

小野天神前遺跡

—久慈川・那珂川流域の再葬墓Ⅱ—



2023

常陸大宮市教育委員会

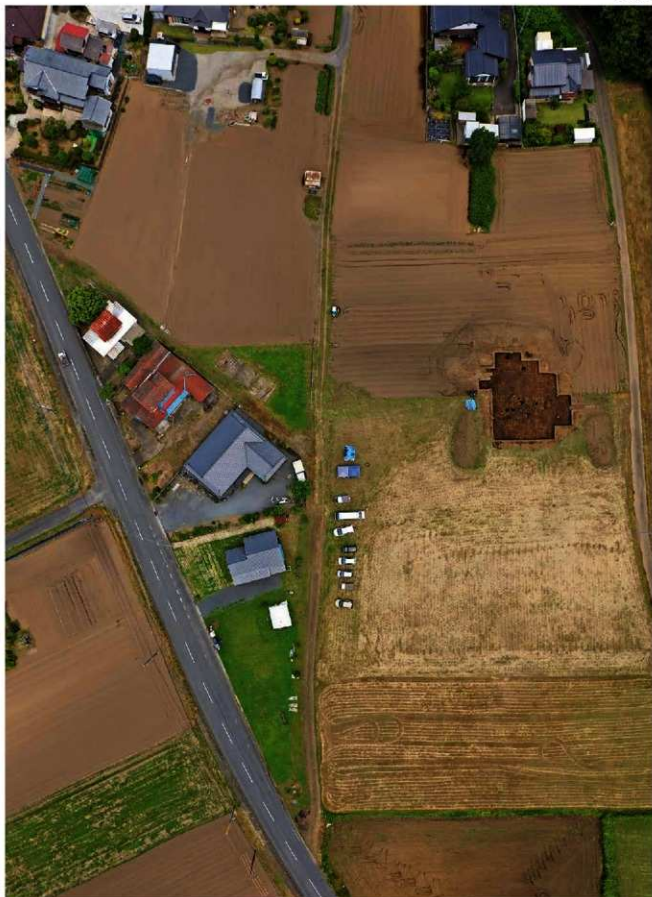
小野天神前遺跡

—久慈川・那珂川流域の再葬墓Ⅱ—



2023

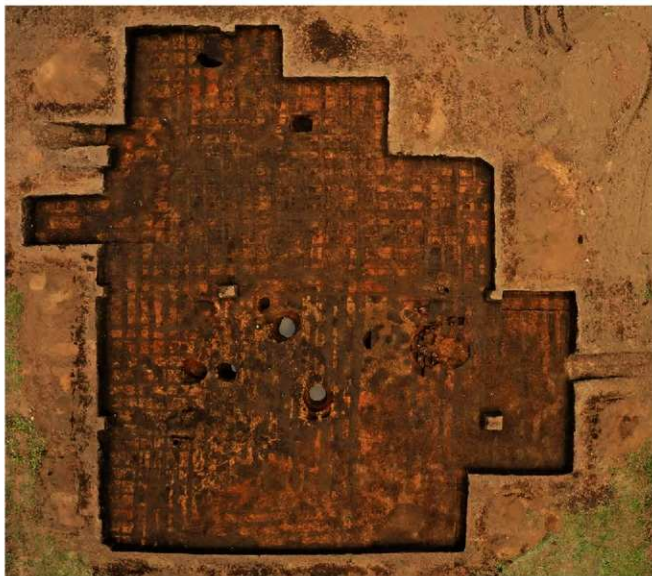
常陸大宮市教育委員会



1. 調査区の位置



1. 調査区通景 (南東方向から)



2. 調査区全景



1. 両葬墓の分布



2. 第45A・B号土坑土器群出土状況（北方向から）



1. 第45A・B号土坑土器群出土状況 (西方向から)



2. 第45A・B号土坑土器群出土状況 (南方向から)



3. 第45B号土坑土器1出土状況 (北西方向から)



5. 第45B号土坑土器2・9出土状況 (北西方向から)



1. 第45B号土坑の覆土堆積 (西方向から)



2. 第77号土坑との重複部分 (西方向から)



3. 第45B号土坑土器1内堆積土 (西方向から)



4. 第45B号土坑土器2内堆積土 (南西方向から)



5. 第45A・B号土坑の重複部分 (西方向から)



6. 第45A・B号土坑の重複部分 (南方向から)



7. 第45B号土坑土器8下部出土状況 (南西方向から)



1. 第45A号土坑土器7出土状況 (西方向から)



2. 第46号土坑土器1出土状況 (北西方向から)



3. 第48号土坑土器出土状況 (南方向から)



4. 第47A・B号土坑土器1・2出土状況 (西方向から)



5. 第47B号土坑土器1内堆積土 (西方向から)



6. 第47A・B号土坑土器1・2下部出土状況 (東方向から)



7. 第76号土坑土器1出土状況 (北東方向から)



8. 第81号土坑土器出土状況 (南方向から)



土器7

1. 第45A号土坑の土器



土器1



土器2



土器4



土器6

2. 第45B号土坑の土器(1)



土器3

(縮尺約1/6)



1. 第45B号土坑の土器(2)



2. 第76号土坑の土器



3. 第47A号土坑の土器 (縮尺約1/6)



第45B号土器1胴部



第45B号土器4胴部



第45B号土器5頸部



第45B号土器5胴部



第45B号土器6口縁部



第45B号土器6胴部



第45B号土器2口縁部

4. 文様の接写(1)

(原寸)



第45B号土器10胴部



第46号土器1胴部



第47B号土器2胴部



第81号土器1胴部

(原寸)



第48号土器1口縁部



第48号土器2胴部

1. 文様の接写(2)



木葉痕(第47A号土器1)



木葉痕・調整痕(第45B号土器6)



調整痕(第45B号土器4)



網代痕(第45A号土器7)

(縮尺不同)

2. 底面痕跡



第45B号土器5胴部

3. 種子任痕



1. 第34号土坑完掘状況 (西方向から)



2. 第34号土坑土器1出土状況 (南方向から)



3. 第41号土坑土器1・4・8出土状況 (東方向から)



4. 第41号土坑土器出土状況接写 (東方向から)



5. 第43号土坑土器1・3出土状況 (南方向から)



6. 第71号土坑土器1出土状況 (南西方向から)



7. 第71号土坑土器3出土状況 (南西方向から)



1. 第34号土坑出土土器1

(缩尺1/4)



2. 第41号土坑出土土器4

(缩尺1/4)



3. 第71号土坑出土土器3

(缩尺1/4)



4. 第71号土坑出土土器1

(缩尺1/4)



(原寸)

5. 第71号土坑土器3内出土石锥

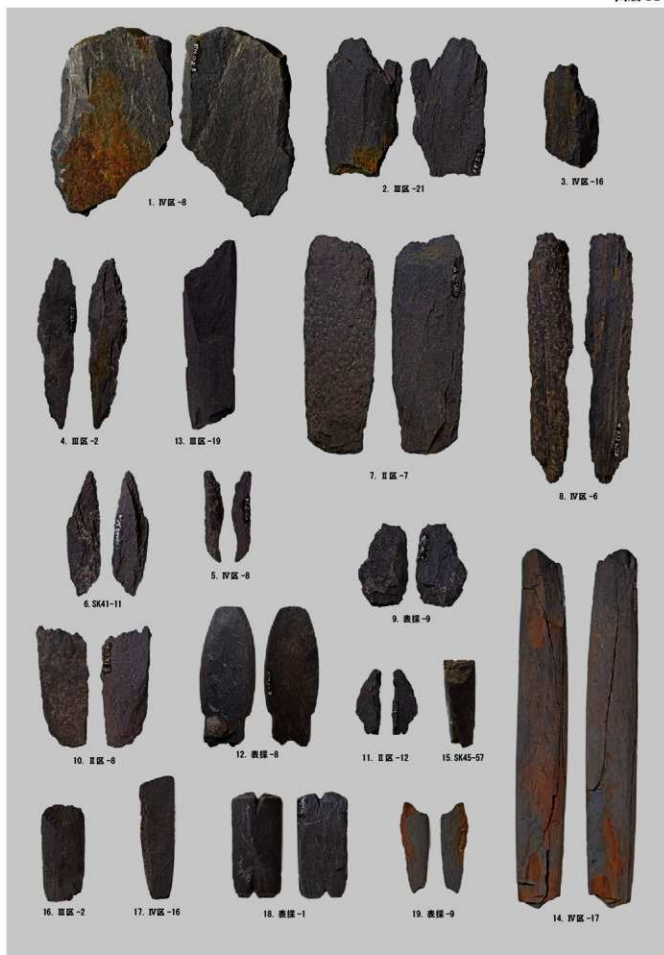


6. 第67号土坑出土土器片



1. 第67号土坑出土石鏡・石鏡未成品

(原寸)



1. 調査区出土石棒 (粘板岩)

(縮尺1/2)



序 文

常陸大宮市は、茨城県北西部、県都水戸市から北へ約20kmに位置する人口約3万8千人の市です。市域の北部には八溝・久慈山系からなる山地が連なり、南西端を那珂川、東部を南北に縦断する久慈川が流れ、さらに市域中央に久慈川支流の玉川と那珂川支流の緒川が南北に流れていて、高度に応じた緑豊かな丘陵・台地・低地を形成する景勝の地となっています。

このような豊かな環境のもと、当市域には古くから人々の生活が営まれ、原始・古代からの様々な種類の遺跡が多く残されています。その中でも特筆すべき遺跡として、弥生時代の再葬墓遺跡が挙げられます。

とりわけ、最もよく知られる再葬墓遺跡が泉坂下遺跡です。久慈川右岸に所在する泉坂下遺跡は、平成18年の学術調査で再葬墓が確認されるとともに、きわめて遺存状態のよい人面付壺形土器が出土したことで注目を集めました。その後、4回の確認調査を経て、平成29年に遺跡は再葬墓としては日本初の国史跡に、再葬墓出土物は国重要文化財に指定されました。

一方、泉坂下遺跡より早い時期から知られていた再葬墓遺跡が、今回調査の行われた小野天神前遺跡です。那珂川左岸の標高約55mの台地上に位置する小野天神前遺跡は、ゴボウ耕作中に人面付壺形土器が出土したことで注目され、昭和51年に茨城県立歴史館による発掘調査が行われています。この調査をふまえたうえで、当市では再葬墓研究をより一層進め、国史跡泉坂下遺跡の整備活用に資することを目的として、今回の発掘調査の実施に至ったものです。くわえて、この成果は現在進めている市史編さん事業においても不可欠のものであり、今後の郷土学習の貴重な資料となることを期待しています。

なお、これらのほか、市内には中台遺跡と宿尻遺跡で再葬墓が確認されています。一つの市に四箇所もの再葬墓遺跡が見つまっている例は極めて稀であり、当市の歴史理解のうえで、再葬墓研究がどれほど重要であるかがかえります。

結びに、発掘調査のために多大な御理解・御協力をいただきました地権者の皆様、また全般にわたり御協力いただきました地元の皆様及びその他御指導・御協力いただいた関係各位に衷心より深く感謝申し上げます。

令和5年7月

常陸大宮市教育委員会
教育長 小野 司寿男

例 言

- 1 本書は常陸大宮市教育委員会が実施した、常陸大宮市小野字天神前2842、2843、2844に所在する、小野天神前遺跡の発掘調査の報告書である。
- 2 この調査は、小野天神前遺跡の再葬墓の情報が今後の国史跡泉坂下遺跡の史跡整備計画及び常陸大宮市史編さん事業の推進に資することから実施にいたったものである。調査面積は286㎡である。
- 3 発掘調査及び整理期間は以下のとおりである。
発掘調査 2021(令和3年)年5月10日～同年6月25日
整理作業 2022(令和4年)年4月1日～2023(令和5年)年3月31日
- 4 発掘調査は、常陸大宮市教育委員会文化スポーツ課の中林香澄、鈴木素行、整理作業は石川優水、鈴木素行が担当した。調査に関する当市教育委員会の組織は以下のとおりである。
【2021(令和3)年度】茅根正憲(教育長、12月24日まで)、橋本勇夫(教育長職務代理人、12月25日から令和4年3月31日まで)、諸澤正行(教育部長)、坪裕志(文化スポーツ課長)、砂川明夫(同課長補佐)、會沢英行(同主査)、中林香澄(同主任)、杉浦果奈(同主事)、萩野谷悟(同会計年度任用職員)、鈴木素行(同会計年度任用職員)、岡部孝代(同会計年度任用職員)、須藤公子(同会計年度任用職員)、河西恵子(同会計年度任用職員)
【2022(令和4)年度】小野司寿男(教育長)、諸澤正行(教育部長)、坪裕志(文化スポーツ課長)、後藤俊一(同課長補佐)、高村恵美(同主査)、石川優水(同主幹)、杉浦果奈(同主幹)、萩野谷悟(同会計年度任用職員)、鈴木素行(同会計年度任用職員)、岡部孝代(同会計年度任用職員)、須藤公子(同会計年度任用職員)、河西恵子(同会計年度任用職員)
- 5 本書は、鈴木素行が編集し、Ⅲ-7・8を中林香澄、Ⅲ-9を田中美零、その他を鈴木が執筆した。
- 6 石器の石材については、田切美智雄氏(茨城大学名誉教授)に御教示いただいた。
- 7 土器底面の木炭痕原体については、小幡和男氏(茨城県歯ヶ浦環境科学センター)に御教示いただいた。
- 8 動物遺存体の同定と土器圧痕のレプリカ法による同定は、バリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、分析報告書をもとにⅣ-1・2を執筆いただいた。
- 9 図版の遺物写真は、飯島一生氏(常陸大宮市史編さん委員会考古部会)の撮影による。
- 10 調査にあたり、地権者である四倉英明・宇留野憲謙氏から多大なる御理解と御協力をいただいた。
- 11 発掘調査及び整理作業の従事者は、以下のとおりである。
飯島一生、岡部孝代、河西一良、鈴木素行、須藤公子、田中美零、中林香澄(以上、発掘調査及び整理作業)、相澤桃子、稲田均、小野千里、小西竜世、篠原とよ子、根本康裕(以上、発掘調査)、石川優水、河西恵子(以上、整理作業)
- 12 発掘調査及び整理作業にあたっては、以下の方々から種々の御教示や御協力をいただいた。記して謝意を表する。(50音順、敬称略)
相田美樹男、五十嵐雄大、猪狩俊哉、石井聖子、石川日出志、宇留野美雪、江原美奈子、江幡武雄、小川貴行、小澤重雄、川又清明、瓦吹堅、後藤孝行、近藤裕子、さかいひろこ、佐々木義則、清水哲、谷口陽子、中郡茂之、中村信博、西野陽子、広木良彦、矢野徳也、横倉要次、四倉一、錦引逸雄
茨城県立歴史館、ひたちなか市埋蔵文化財調査センター
- 13 出土遺物及び関係資料は、常陸大宮市教育委員会において保管している。

目 次

I	遺跡の位置と環境	1
1	小野天神前遺跡の位置	1
2	小野天神前遺跡の地理的環境	1
3	小野天神前遺跡の歴史的環境	2
4	人面付土器の発見	3
5	茨城県歴史館の発掘調査	4
6	遺物採集の聖地	4
7	採集された「小野型石棒」の標本	7
8	採集された弥生時代中期の壺形土器	7
II	調査の概要	9
1	発掘調査の目的と方法	9
2	調査の経過	9
3	擾乱の分布	12
4	遺構の分布	12
5	調査区の基本土層	14
6	調査区の標高	14
7	縄文時代の遺構と遺物	15
III	再葬墓の調査	25
1	弥生時代遺構の分布	25
2	第45A号土坑	25
3	第45B号土坑	28
4	第48号土坑	38
5	第77号土坑	40
6	第46号土坑	40
7	第47A号土坑	40
8	第47B号土坑	43
9	第76号土坑	44
10	第81号土坑	45
11	遺構外	45
IV	動物遺存体の同定と試料の分析	47
1	小野天神前遺跡、宿尻遺跡出土の動物遺存体の同定(金井慎司)	48
2	小野天神前遺跡、宿尻遺跡、中台遺跡出土土器の圧痕レプリカ作成観察(田中義文)	52
V	調査の成果と課題—小野天神前遺跡における再葬墓群の成立と展開—	55
1	新たに検出された再葬墓群	55
2	第1次調査区の位置	56
3	第1次調査区の範囲と面積	59
4	第1・2次調査区の位置関係	62
5	第1次調査区の再葬墓	62
	(1)1号土坑—63 (2)2A・B号土坑—63 (3)3A・B号土坑—66 (4)4号土坑—68 (5)6号土坑—69	

(6)9A・B号土壌	69	(7)10号土壌	70	(8)11号土壌	71	(9)12号土壌	72	(10)13号土壌	73
(11)14号土壌	73	(12)15号土壌	77	(13)16号土壌	78	(14)17A・B号土壌	82		
(15)18号土壌	83	(16)遺構外	84						

6 土坑の分類	87
7 再葬墓群の成立と展開	88

挿 図 目 次

第1図 緒川合流点より下流の那珂川流域遺跡	1	第42図 第48号土坑遺物出土位置	38
第2図 第2次調査区の位置(1)	2	第43図 第48号土坑出土遺物	39
第3図 第2次調査区の位置(2)	2	第44図 第46号土坑実測図・出土遺物	41
第4図 時期別分布図	3	第45図 第47A・B号土坑実測図	41
第5図 耕作に伴う石棒の出土	3	第46図 第47A・B号土坑出土遺物	42
第6図 茨城県歴史館による発掘調査	3	第47図 第76号土坑実測図・出土遺物	43
第7図 採集土偶	4	第48図 第81号土坑実測図・出土遺物	44
第8図 採集石棒(1)	5	第49図 遺構外出土遺物	45
第9図 採集石棒(2)	6		
第10図 採集石棒・独鈷石	7		
第11図 採集弥生土器	7	IV-1	
第12図 調査区の区画と表記	9	図1 窟尻・泉取下遺跡出土のアオおよびサケ科椎骨	49
第13図 調査風景(1)	10	図版 出土骨	51
第14図 調査風景(2)	11		
第15図 調査区の粗乱	13	IV-2	
第16図 調査区の遺構	14	図版1 土器Iⅴ痕(1)	53
第17図 調査区的地形	14	図版2 土器Iⅴ痕(2)	54
第18図 縄文時代土坑実測図	16		
第19図 第41号土坑出土土器	17	第50図 第2次調査区で検出された弥生時代の遺構と土器群	55
第20図 第43号土坑出土土器	18	第51図 換地に伴う地階の変更	56
第21図 第67号土坑出土土器	18	第52図 第1次調査区と第2次調査区(1)	57
第22図 第34号土坑出土土器	18	第53図 第1次調査区位置の検討資料	58
第23図 第68号土坑出土土器	18	第54図 第1次調査区と第2次調査区(2)	59
第24図 第71号土坑出土土器	19	第55図 第1次調査区における再葬墓の分布	60
第25図 調査区出土土製品	20	第56図 第1次調査区の範囲と面積の検討資料	61
第26図 調査区出土石製品—粘板岩製石棒—	21	第57図 第1次調査区の再葬墓の略図	61
第27図 調査区出土石製品・石器	22	第58図 第1・2次調査区の再葬墓	62
第28図 弥生時代の遺構	25	第59図 1号土壌・出土土器	63
第29図 第45A・45B・48・77号土坑実測図(1)	26	第60図 2A・B号土壌	64
第30図 第45A・45B・48・77号土坑実測図(2)	27	第61図 2A号土壌出土土器	66
第31図 第45A号土坑出土遺物—土器7—	29	第62図 2B号土壌出土土器	67
第32図 第45B号土坑出土遺物(1)—土器1—	30	第63図 3号土壌・出土土器	68
第33図 第45B号土坑出土遺物(2)—土器2—	31	第64図 4号土壌・出土土器	68
第34図 第45B号土坑出土遺物(3)—土器3—	31	第65図 6号土壌・出土土器	69
第35図 第45B号土坑出土遺物(4)—土器4—	32	第66図 9号土壌・出土土器	69
第36図 第45B号土坑出土遺物(5)—土器5—	33	第67図 10号土壌・出土土器	70
第37図 第45B号土坑出土遺物(6)—土器6—	34	第68図 11号土壌	70
第38図 第45B号土坑出土遺物(7)—土器8—	35	第69図 11号土壌出土土器	71
第39図 第45B号土坑出土遺物(8)—土器9—	36	第70図 12号土壌・出土土器	72
第40図 第45B号土坑出土遺物(9)—土器10—	37	第71図 13号土壌・出土土器	72
第41図 第45号土坑出土遺物	37	第72図 14号土壌	74
		第73図 14号土壌出土土器	75

第74図	15号土壌	76	第81図	18号土壌出土土器	83
第75図	15号土壌出土土器	77	第82図	遺構外出土遺物	84
第76図	16号土壌	78	第83図	第1次調査区の報告と再検討	87
第77図	16号土壌出土土器(1)	79	第84図	第1次調査区の分析事例	88
第78図	16号土壌出土土器(2)	80	第85図	北東群再葬墓の成立と展開	89
第79図	17号土壌・出土土器	82	第86図	小型精製壺形土器の変遷	90
第80図	18号土壌	82			

目 次

第1表	第67号土坑出土石蔵一覧表	24	IV-1		
第2表	調査区出土石蔵等一覧表	24	表1	検出分類群一覧	48
第3表	小野天神前遺跡第2次調査出土土器計測・観察表	46	表2	小野天神前遺跡骨同定結果	50
第4表	小野天神前遺跡発掘調査で検出された動物遺存体	47	表3	宿尻遺跡骨同定結果	50
第5表	小野天神前遺跡土壌の水洗選別で検出された動物遺存体	47	IV-2		
第6表	宿尻遺跡発掘調査で検出された動物遺存体	47	表1	土器圧痕観察結果	52
第7表	宿尻遺跡土壌の水洗選別で検出された動物遺存体	47	第8表	小野天神前遺跡第1次調査出土土器注記一覧表	85
			第9表	小野天神前遺跡第1次調査出土土器計測・観察表	86

I 遺跡の位置と環境

1 小野天神前遺跡の位置

発掘調査を実施した地籍は、常陸大宮市小野字天神前 2842・2843・2844 の 3 筆で、「小野天神前遺跡」の範囲内にある。

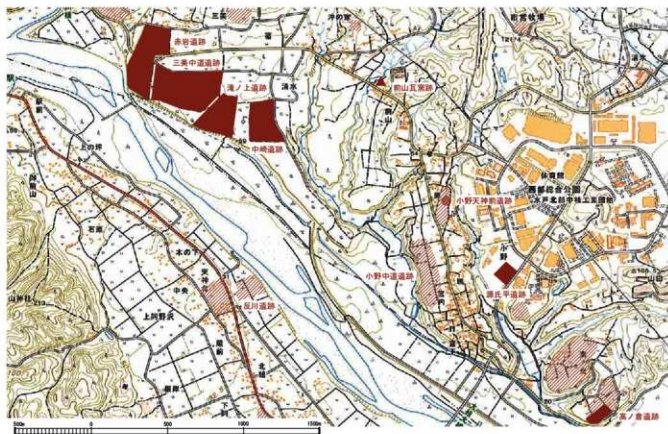
小野天神前遺跡は、東京帝国大学人類学教室 (1897・1898・1901・1917・1928) が編集した『日本石器時代人民遺物発見地名表』には記載されていないが、1937 (昭和12) 年には首藤保之助が「大場村」の遺跡を「村童ノ案内」で訪れ、「子供所持」の石鏃等を入手したことを記録している (首藤1986)。この「大場村」を、1938 (昭和13) 年には「大場村字小野村」と記載し、「コノ日子供等皆山ニ篠刈りニ出デテ不在」と落胆していることから、「小野」の遺跡であることが判明する。さらに、首藤が入手した遺物には、縄文時代晩期の石棒に相当する「石剣折レ」やメノウの石鏃がかなり含まれていることから、小野天神前遺跡を訪れていたと考えるとほぼ間違いのない (鈴木・飯

島・高村2021)。この頃すでに、「ヤジリ」が拾える畑として、地元の子供たちには知られていたであろう。

茨城県教育委員会等が発行した遺跡地名表・地図の類 (1964・1970・1975・1977・1979・1980・2001) では、1964 (昭和39) 年の『茨城県遺跡地名表』に小野天神前遺跡が初めて登場する。遺物の項目には、「縄文式土器 (中、後晩期)、石斧、石匙、独鈷石」が記載されている。これは1972 (昭和47) 年の地名表まで変更がない。1977 (昭和52) 年の『茨城県遺跡地図』からは、弥生時代と奈良・平安時代の遺跡の複合が記載されるようになり、現在の周知の遺跡に至っている。

2 小野天神前遺跡の地理的環境

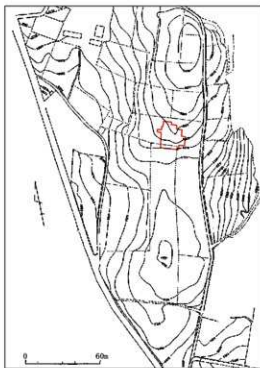
茨城県北部は、久慈川を境界として西側に八満山地、東側に阿武隈山地と呼称される山地地形が展開する。その八満山地は北から、八満山を中心とした八満山塊、鷲子



第1図 緒川合流点より下流の那珂川流域遺跡



第2図 第2次調査区の位置(1)



第3図 第2次調査区の位置(2)
(測量図は阿久津1977より引用)

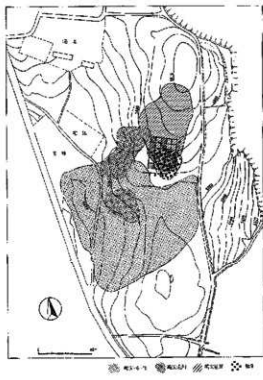
山、尺丈山、南山などの鷺子山塊、そして那珂川より南の鶏足山塊に区分される。これらの山地の周辺には、200 m等高線より低い地域に丘陵が分布し、鷺子山塊は南縁に丘陵が広がる。栃木県的那須岳を水源とする那珂川は、鷺子山塊と鶏足山塊の間を西から東へと流れ、河岸段丘を形成した。70 mを上回る段丘は上位段丘、60 m前後の段丘は中段段丘、50 mを下回る段丘は下位段丘にほぼ相当する(早川2003)。小野天神前遺跡は、那珂川左岸の中段段丘上に形成された遺跡であり、鷺子山塊を流れる緒川との合流点よりも3kmほど下流に位置している(第1図)。段丘には小河川が樹枝状に谷を開析し、小野天神前遺跡がのる台地は、南北方向に細長い。遺跡は、那珂川に面した台地の西側ではなく、東側の縁辺の方に近い。現況は、一部が宅地、大部分が耕作地として利用されている(第2・3図)。

3 小野天神前遺跡の歴史的環境

小野天神前遺跡が立地する周辺は、緒川との合流点に近く、特に那珂川左岸には、2001(平成13)年の『茨城県遺跡地図』に記載された多くの遺跡が知られている(第1図)。今回の小野天神前遺跡の調査で遺構が確認された時代・時期を中心として、周辺の遺跡を概観する。

小野天神前遺跡から上流方向へ1.5kmほどに、三美地区の遺跡群が位置する。赤岩・三美中道・滝ノ上・中崎遺跡が隣接しており、「畑地帯総合整備事業三美地区」に伴い、2011(平成23)～2016(平成28)年度に発掘調査が実施された。対象地は広い範囲で示されるが、実際に発掘調査が行なわれたのは、いずれも農道部分に限定されている。旧石器時代から縄文時代後期前葉までの遺構と遺物が検出されており、直近の縄文時代遺跡として、小野天神前遺跡の前史を補完する。旧石器時代は赤岩遺跡(三輪2012)の礫群と石器集中地点、三美中道遺跡(青池2015)の石器集中地点、縄文時代の草創期は中崎遺跡(平石2017、高野2018)と滝ノ上遺跡(青池2015)の陥穴状遺構、早・前期は中崎遺跡(平石2017)の住居跡が代表的な遺構であり、中期の中・後葉には滝ノ上遺跡(高橋2014、青池2015・2016、田中2016)を中心として大規模な集落跡が形成された。小野天神前遺跡から下流方向へ1.5kmほどには、2004(平成16)年に発掘調査が実施された高ノ倉遺跡が位置し、縄文時代中期中葉を主体とする多数の土坑が検出された。滝ノ上遺跡とは、小野天神前遺跡を越えて3kmの間隔を空け、ここにも大規模な集落跡が推定されている(小川・大淵2005)。

縄文時代後期中葉から晩期までの遺跡は、小野天神前



第4図 時期別分布圖
(阿久津1979より引用)

遺跡の上流方向4kmほどに西端遺跡が位置する(川上・阿久津1976, 川又等1990)。さらに上流方向の4.5kmには宿尻遺跡(鈴木編2022)があり、位置と距離は中期とやや異なるものの、間隔を空けて遺跡が並ぶ。直近では、1983(昭和58)年に発掘調査が実施された源氏平遺跡(外山1985)に石剣の破片と擦切具、滝ノ上遺跡(高橋編2014)に晩期の土器が出土している。

弥生時代は、2019(令和元)年に再葬墓が調査された宿尻遺跡(鈴木編2022)が同じ那珂川左岸の上流方向へ8.5kmほど、対岸の那珂川右岸に北方遺跡(川上1976)が3kmほど、久慈川流域の泉坂下遺跡(鈴木編2011)が6kmほどという位置関係にある。中期でも中・後葉の遺跡は、赤岩遺跡(三輪編2012)に土坑1基が調査され、調査区内からも土器が出土した。また、源氏平遺跡(外山1985)にも、中葉と見られる土器の破片が含まれている。後期前半の遺跡は、滝ノ上遺跡(高橋編2014)に土坑1基が調査された。後期後半の遺跡は、合流点付近の緒川右岸に遺跡群が形成されている。2014(平成26)年度に発掘調査が実施された山根遺跡(三輪編2014)では「十王台式」の住居跡が検出されており、2020(令和2)年度に発掘調査が実施された内原遺跡(杉原編2021)では古墳時代前期の住居跡にS字状口縁台付甕と「十王台式」が伴う。

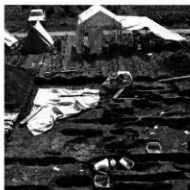


1. 石棒とともに掘り上げられた様



2. 出土地点を指示する宇留野常男氏

第5図 耕作に伴う石棒の出土(1970年頃)



1. 調査風景



2. 人面付土器の出土

第6図 茨城県歴史館による発掘調査(1976年)

4 人面付土器の発見

小野天神前遺跡に弥生時代の人面付土器が発見されるまでの現地の状況については、「四倉一郎・みね夫妻談石井聖子聞きとり」の記録(四倉編1995)がある。1966(昭和41)年11月、四倉一郎は、ゴボウ取機に伴い掘り出された石器と土器に強く興味をひかれ、土偶や土版等を含む多量の遺物を採集した。翌年の1967(昭和42)年から1968(昭和43)年にかけては、「うわさを聞きつけて遺物を買いくる人がずいぶんあった」という。ほとんどは「壺屋」と呼ばれるバイヤーのようであるが、この情報を得て大塚子之吉も遺跡を訪れるようになったのかもしれない。宇留野常男により完全形を含む石棒が掘り出されたのも1970(昭和45)年の頃であったという(第5図)。1974(昭和49)年秋、「私(引用註:四倉一郎)の隣の畑でゴボウを掘っていた四倉英明さんが人面付土器を掘り当てて、それを譲り受けた水戸の大塚子之吉さんが歴史館に持ち込んだのがきっかけになって発掘調査をすることになった」と語られている。

小野天神前遺跡の報告書(阿久津1978a)では、「昭和49年秋、水戸市大塚子之吉氏が、大宮町小野地区より出土した人面付土器をもって歴史館に来られた」とあり、続けて人面付土器が四倉英明から大塚の手に渡るまでが詳

しく記述された。「話によると、ゴボウを収穫するのに手掘りで掘っていたところ、あまり割れていない土器が出土したので、周辺部の土を取り除いたところ、6~7個の土器が無傷で並んでいたという。耕作者はこの土器をどう取り扱ってよいか判断できなかったため、写真を撮って現状のままにして、むしろ上にかけていた。その時人面だけは家に持ち帰り、他の人にみせたりしていた時に、大塚氏がそれを聞き、出土した土器全部を譲ってもらうことになった。しかし現地の土器は、むしろの上で子供達が遊んでいたため、碎片化してしまい、とりあえず、水戸まで持ち帰り復元した。このような経緯をもって、この土器が歴史館に持ち込まれた」という。

5 茨城県歴史館の発掘調査

茨城県歴史館(現:茨城県立歴史館)が小野天神前遺跡の発掘調査を実施するに至る経緯は、「歴史館では現地を何度か踏査してみると、ゴボウによる被害は予想を上廻るもので、畑一面土器、石器類が散乱しており、このままでは何もわからないまま消滅してしまうことを憂慮し、早急に学術調査の必要性を協議した。昭和51年度予算に学術調査費が認められ、昭和51年8月17日から約18日間を費やし、調査を行なった」(阿久津1978a)と記載されている。「調査員 川上博義、西宮一男、阿久津久」とあるが、調査から報告に至るまで、阿久津久が中心となった。

この頃、大宮町(現:常陸大宮市)では新体制による町史編さん事業が至急で進められており、「昭和50年に第1回の編さん委員会を開き、「昭和51年5月までには原稿を書き終え」、「発刊時期は、予算等の事情で昭和52年2月」(藤田1977)という忙しさであった。阿久津は、この大宮町史編さん委員会の委員の一人となり、「原始・古代」を担当した。この期間にあたる1975(昭和50)年11-12月には旧石器時代の梶巾遺跡、1976(昭和51)年8-9月には弥生時代の小野天神前遺跡と、立て続けに学術調査を実施した。「昭和52年3月31日」刊行の『大宮町史』には、小野天神前遺跡の解説に「昭和51年8月、茨城県歴史館でこの地点の調査を実施し、弥生時代の土壌20か所を確認し、人面付土器2個が出土している」(阿久津1977)という一文は添えられたが、発掘調査で検出された遺構や遺物の画像は一切掲載されていない。小野天神前遺跡

の地形測量図が掲載されたのは、岩崎古墳群、轄塚古墳、富士山古墳などともに、町史編さん事業として測量図が作成されたことによるのではなかろうか。

茨城県歴史館による発掘調査は、人面付土器が出土したという地点を中心として1辺4mのグリッドを設定し、再葬墓の広がりや追跡するという手順で進められた(第6図1)。「320m」(阿久津1978b)という調査区内には、弥生時代中期の再葬墓の他にも、縄文時代後期の住居跡・土坑、平安時代の住居跡も検出されたとし、この調査以後には弥生時代と奈良・平安時代が重複する遺跡として小野天神前遺跡が周知されることになる。

弥生時代の遺構と遺物に限定して編集された報告書には遺構数が明記されておらず、弥生時代中期の土坑数を16基や20基とする文献もあるが、18基とする記載が多い。大塚子之吉が所蔵していた人面付土器の口頸部の他にも、2号土壇の遺物として人面部の破片が報告され、16号土壇では底部まで残存する人面付土器が出土した(第6図2)。茨城県北部における再葬墓の最初の調査事例であるとともに、3点の人面付土器が小野天神前遺跡の名前を広めることになった。この茨城県歴史館の発掘調査を第1次調査として、今回の発掘調査は、小野天神前遺跡の第2次調査と位置付けることができる。

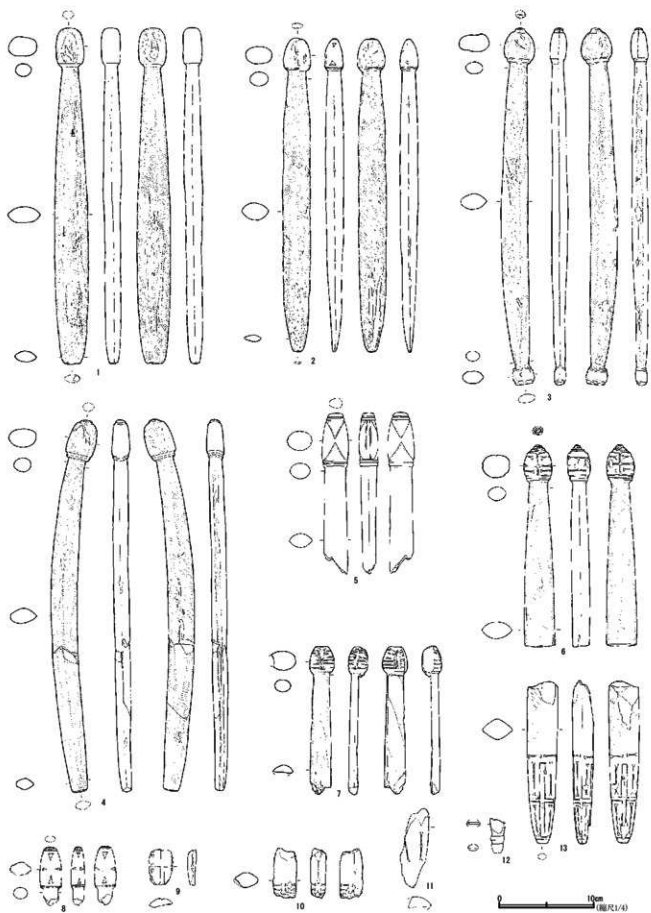
6 遺物採集の聖地

発掘調査が終了した後の状況について四倉一郎は、「この発掘のあと小野天神前遺跡はすっかり有名になって、地元の人たちも遺物をけっこう大事にするようになった」、「ひどかったのは調査のあと、毎日2、3人ずつ人が来て、畑の中を歩いてはいろんなものを拾っていってしまうんだ。あんまり目に余ると注意したりもしたけれど、防ぎようがなかった」(四倉1995)と語っている。考

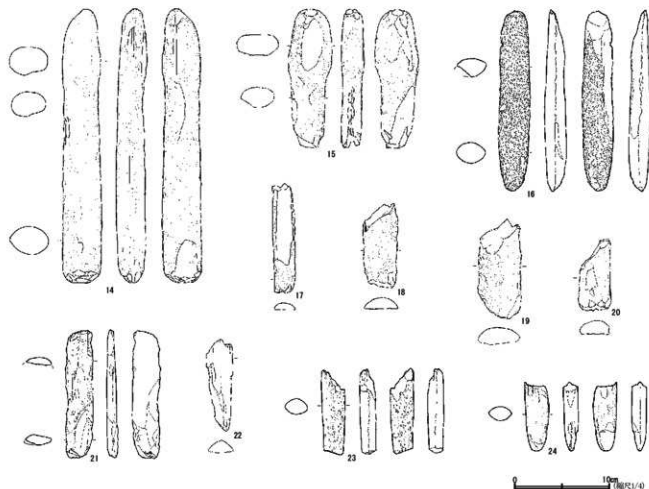


(採集者:稲田均)

第7図 採集土偶



第8図 採集石棒(1)



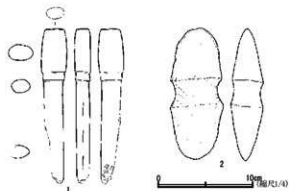
番号	種類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	採集者	備考
1	石剣	355	36	19	361.7	宇留野常男	
2	石剣	331	29	19	279.5	宇留野常男	
3	石刀	377	33	18	291.5	宇留野常男	
4	石刀	392	29	19	300.6	宇留野常男	
5	石剣	171	27	21	126.1	江幡武雄	
6	石剣	212	32	18	214.0	宇留野常男	黒色付着物あり
7	石剣	156	26	21	61.9	宇留野常男	
8	不明	61	22	14	27.9	江幡武雄	
9	不明	37	27	9	11.8	稲田 均	石鏃に転用
10	石剣	53	25	17	30.9	稲田 均	
11	石剣	84	27	13	28.9	江幡武雄	
12	石剣	36	15	4	2.7	江幡武雄	
13	石剣	172	32	22	138.7	宇留野常男	焼痕あり
14	石棒未成品	290	41	33	621.6	宇留野常男	鋸打段階
15	石棒未成品	146	45	23	221.3	江幡武雄	鋸打段階
16	石棒未成品	190	32	22	178.9	宇留野常男	鋸打段階、焼痕あり
17	石棒未成品	116	23	7	30.2	江幡武雄	鋸打段階、焼痕あり
18	石棒未成品	89	36	13	53.3	江幡武雄	鋸打段階
19	石棒未成品	105	46	18	119.8	藤本 武	鋸打段階
20	石棒未成品	77	35	16	55.3	藤本 武	鋸打段階、焼痕あり
21	石剣	135	29	11	63.8	中野茂之	焼痕あり
22	石剣	97	28	12	39.6	佐藤次男	
23	石剣	89	25	17	48.4	宇留野常男	焼痕あり
24	石剣	73	26	16	35.4	中野茂之	焼痕あり

第9図 採集石棒(2)

古学の研究者のみならず、遺物の蒐集を目的とした多くの人を引き寄せることになった。

四倉一郎が採集した遺物の一部は、1977(昭和52)年の『大宮町史』に実測図が掲載された。また、1995(平成7)年に開催された大宮町歴史民俗資料館の特別展「大宮の考古遺物」には、宇留野常男が掘り出した石棒が公開されるとともに、四倉一郎、野上公雄、江幡四郎、中橋長太郎、片西登美江が採集した土偶や石器、石製品が展示され、図録『大宮町の考古遺物』(瓦吹編1995)に掲載された。他には青山俊明、稲田均、江幡武雄、川又清明、中

郡茂之、横倉要次、渡辺明が採集に訪れていたことが記録されている(川又1989、鈴木2002a・2020、萩野谷2018、横倉2011)。ひたちなか市埋蔵文化財調査センターが所蔵する「藤本弥城先史資料」、「佐藤次男考古学資料」にもそれぞれ小野天神前遺跡の採集遺物が含まれており、実測図を作成してあった石棒の破片については、ここに報告しておきたい(第9図)。また、今回の発掘調査を機に寄贈・寄託されることになった遺物も、一部をここに掲載した(第7・10図)。



番号	種類	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	採取者
1	石剣	角閃石	164	27	17	98.5	広木良彦
2	独鈷石	燧石(燧岩)	139	56	36	330	広木良彦

「石材」は同図実物写真の測定による。

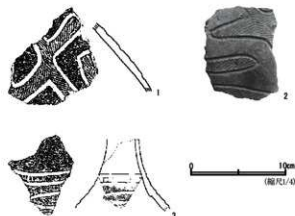
第10図 採集石棒・独鈷石

7 採集された「小野型石棒」の標本

宇留野常男が採集した10点の石棒には、完全形の石剣と石刀がそれぞれ2点ずつ含まれていた。完全形の石棒が、しかも1つの遺跡から4点が出土する事例は、北海道の周墳墓に副葬された石棒を別にすれば、極めて稀である。少なくとも関東地方においては類例を挙げることができない。2001(平成13)年から開始した「関東地方東部における縄文時代晩期の石棒製作」(鈴木2002a・2002b, 鈴木編2005)の研究では、全体の形状が残された標本があり、頭部形態や彫刻文様の部分破片も多数が出土している小野天神前遺跡の名称から「小野型石棒」を設定した。さらに、茨城県北部における石棒製作は、多賀山地の粘板岩を中心とした日立変成岩の河川礫を素材とし、原産地付近の太平洋岸における剥離・敲打工程、久慈川流域における敲打・研磨工程が連鎖して、一連の製作工程が完結することを推定した。その成品が小野天神前遺跡で多量に消費されるとともに、他地域へも流通したことを想定するのであるが、茨城県歴史館の調査が再葬墓の調査・報告に限定されたこともあって、小野天神前遺跡の石棒について、その「多量」を具体的に提示できないでいた(鈴木2019)。知り得た採集資料だけでも100点を優に超えており、その中から粘板岩を素材とする24点をここに掲載した(第8・9図)。成品の破片が多いが、未成品(14~20)も含まれており、小野天神前遺跡もまた石棒製作遺跡であったことが窺える(鈴木2002b)。

8 採集された弥生時代中期の壺形土器

人面付土器が発見されるまでの経緯でも明らかなよう



(採集者 1・3: 渡辺明, 2: 西倉一郎)

第11図 採集弥生土器

に、再葬墓が形成されていた地点にもゴボウの耕作が及んでおり、検出された土器のほぼ全てが部分的な破壊を受けている。欠損部は攪乱され、遊離した破片もまた地表面に露出して、採集の対象となった。縄文あるいは条痕文のみの破片については、茨城県歴史館が再葬墓から検出した土器の一部であるのか、別の個体なのかを識別することが難しい。しかし、特徴的な文様と器形から別の個体と識別される2個体の土器が採集されている。1つは、別個に採集されていた2点の破片であり、大型の壺形土器の胴上部と推定される(第11図1-2)。磨消縄文による文様が特徴的である。区画の沈線と縄文の部分には赤彩の痕跡が残されている。もう1つは、小型の壺形土器である。縄文の上に沈線で文様が構成されること、胴部との境界付近で括れるのではなく、口縁部へ向かって頸部が細くなることが特徴的である(3)。これらの土器は、未調査の再葬墓が埋没している可能性を考えさせる。

参考文献

- 青池紀子編 2015「三美中道遺跡Ⅱ・滝ノ上遺跡Ⅱ」(M228)常陸大宮市教育委員会
 青池紀子編 2016「滝ノ上遺跡Ⅲ」(M299)常陸大宮市教育委員会
 阿久津久 1977「日本のはじまりから農耕まで」大宮町の遺跡」『大宮町史』大宮町役場 44-74頁, 107-184頁
 阿久津久 1978a「茨城県大宮町小野天神前遺跡(999)」学術調査報告書1 茨城県歴史館 (編と監査には1977)と訂正されているが、発行に「昭和53年3月20日」とある。)。
 阿久津久 1978b「小野天神前遺跡」『日本考古学年報』29(1978年) 日本考古学協会 119-120頁
 茨城県教育委員会編 1964「茨城県遺跡地名表」茨城県教育委員会
 茨城県教育委員会編 1970「茨城県遺跡地名表」茨城県教育委員会
 茨城県教育委員会編 1975「茨城県遺跡地名表」茨城県教育委員会

- 茨城県教育委員会編 1977『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会
- 茨城県教育庁文化課編 2001『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会
- 小川和博・大瀧淳志 2005『高ノ倉遺跡発掘調査報告書』常陸大宮市教育委員会
- 川上博義 1976『桂村北方出土の古式弥生式土器』『常総台地』7-47頁
- 川上博義・阿久津久 1976「縄文時代における文化の領域的研究」『茨城県歴史館報』3-63-77頁
- 川又 守 1990『原始古代』『御前山村郷土誌』御前山村 51-64頁
- 川又清明 1989「小野天神前遺跡」『竊良岐考古』第11号 72-74頁
- 瓦吹 堅 1995『大宮の考古遺物 一那珂・久慈の清流にはぐくまれた大宮町の先史・古代一』大宮町教育委員会
- 斎藤 忠 1979「先土器・縄文時代遺跡地名表」『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』茨城県 518-557頁
- 首藤保之助 1986『首藤保之助(1948-2005) 考古資料 採集記録』(309頁) 須賀川市立博物館調査研究報告第6集 須賀川市立博物館
- 杉原宗久 2021『内原遺跡』(303頁) 常陸大宮市教育委員会
- 鈴木素行 2002a「ケンタウロスの落とし物 一関東地方東部における縄文時代晩期の石棒について一」『竊良岐考古』第24号 15-38頁
- 鈴木素行 2002b「本覚遺跡への途 一関東地方東部における縄文時代晩期の石棒製作遺跡について一」『茨城県考古学協会誌』第14号 89-118頁
- 鈴木素行 2005『本覚遺跡の研究 一関東地方東部における縄文時代晩期の石棒製作について一』(81,89頁)
- 鈴木素行 2011『泉坂下遺跡の研究 一人面付土器を伴う弥生時代中期の再葬墓群について一』(81,89頁)
- 鈴木素行 2016「フェイク 一十王台式土器研究史外伝・7一」『竊良岐考古』第38号 1-22頁
- 鈴木素行 2019「石棒から再葬墓へ：2006」『泉坂下遺跡と再葬墓研究の最新報』季刊考古学・別冊29 21-30頁
- 鈴木素行 2020「凝灰岩の石剣 一関東地方東部における縄文時代晩期の石棒製作について・Ⅲ一」『常陸大宮市史研究』第3号 107-118頁
- 鈴木素行 2022『宿尻遺跡 一久慈川・那珂川流域の再葬墓Ⅰ一』(303頁) 常陸大宮市教育委員会
- 鈴木素行・飯島一生・高村忠美 2021「『石買ヒノ爺老』一首藤保之助による常陸大宮市域の考古遺物採集記録一」『常陸大宮市史研究』第4号 105-126頁
- 高野浩之 2013『赤岩遺跡Ⅱ・三美中道遺跡Ⅰ』(315頁) 常陸大宮市教育委員会
- 高野浩之 2018『中崎遺跡Ⅱ』(302頁) 常陸大宮市教育委員会
- 高橋浩文 2014『滝ノ上遺跡Ⅰ』(319頁) 常陸大宮市教育委員会
- 田中浩江 2016『滝ノ上遺跡Ⅳ』(305頁) 常陸大宮市教育委員会
- 東京帝国大学 1897『日本石器時代人民遺物発見地名表』東京帝国大学
- 東京帝国大学 1898『日本石器時代人民遺物発見地名表』(76) 東京帝国大学
- 東京帝国大学 1901『日本石器時代人民遺物発見地名表』(76) 東京帝国大学
- 東京帝国大学 1917『日本石器時代人民遺物発見地名表』(96) 東京帝国大学
- 東京帝国大学 1928『日本石器時代遺物発見地名表』(106) 同書院
- 外山泰久 1985『常陸源氏平』大宮町教育委員会
- 平石尚和 2017『中崎遺跡Ⅰ』(303頁) 常陸大宮市教育委員会
- 萩野谷悟 2018『渡邊明氏採集の常陸大宮市考古資料』(76頁)『常陸大宮市史研究』第1号 67-76頁
- 早川唯弘 2003『地形分類図』土地分類基本調査 常陸大宮・烏山』茨城県農地局農地計画課 13-38頁
- 藤田 稔 1977「あとし」『大宮町史』大宮町役場 989-993頁
- 文化庁文化財保護部 1980『全国遺跡地図 茨城県』文化庁文化財保護課
- 三輪孝幸 2012『赤岩遺跡Ⅰ』(311頁) 常陸大宮市教育委員会
- 三輪孝幸 2014『山根遺跡』(302頁) 常陸大宮市教育委員会
- 横倉要次 2011『常陸大宮市小野天神前遺跡採集の縄文土器と大型石棒』『竊良岐考古』第33号 8-13頁
- 四倉一郎・四倉みね(石田孝子編集) 1995『わたしと小野天神前遺跡』『大宮の考古遺物』大宮町教育委員会 41-42頁

II 調査の概要

1 発掘調査の目的と方法

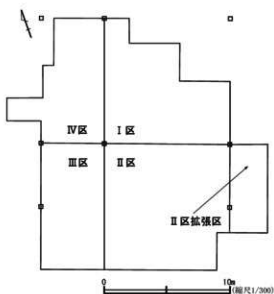
茨城県歴史館が実施した1976(昭和51)年の発掘調査は、弥生時代の土器を伴うことが明らかな16基の土坑群を検出した。土坑は、直径10mほどの範囲内に群集する。その調査区の北と東、西方向には土坑が検出されない空間が確認されているものの、南方向は、調査区の限界近くまで土坑が分布する。なかでも15・18号土坑については、当初の調査区を50cmほど南に拡張して、それぞれの全体が調査された。したがって、南方向の空間には、未調査の再葬墓が分布する可能性が残されている。

泉坂下遺跡では、2012(平成24)～2015(平成27)年度の確認調査により、再葬墓群の分布が捉えられるに至ったが、2017(平成29)年に国史跡に指定され、そのほとんどは未調査のまま保存されることになった。各土坑の内容が調査され、かつ再葬墓群の全体構成がほぼ判明する遺跡として、小野天神前遺跡は稀少な事例である。今回の発掘調査は、その未調査部分について再葬墓の有無を確認することが目的であった。

茨城県歴史館の発掘調査報告書(阿久津1978)に記載された調査区の位置をもとに、これを第1次調査区として、一部は重複する位置関係で南側に第2次調査区を設定した。当初は100～150㎡の調査面積を予定していたが、ゴボウの耕作に伴う攪乱が著しく、第1次調査区の位置が判然としないことから、北・南方向への拡張を繰り返した。結果として286㎡の面積を調査対象とすることになった。確認された遺構の調査は、弥生時代のものに限定していたが、1次葬が想定される規模の土坑については、これを確認するために掘り込み、結果として縄文時代の土坑についても調査を実施することになった。再葬墓については、土器内土壌とともに、土坑内覆土についても水洗選別を実施した。水洗選別の篩の目方は3mmを基本とし、一部については1mmまでの遺物を回収した。

2 調査の経過

5月10日(月)晴。調査区の基準杭を設定する(第13図1)。調査区の南北軸は北より20°東に傾く(N-20°-E)。これは、「N-20°-E」(阿久津1978)という第1次調査区の傾きに一



第12図 調査区の区画と表記

致する。調査区が取まる1辺10mグリッド4つ分については、北東から時計回りに「I・II・III・IV区」と表記する(第12図)。

5月11日(火)曇のち晴。明日からの重機による表土除去に備えて、I・II区の一部について試し掘りを行なう。I区にはトレンチャーによる攪乱が縦横に走り、II区には南北方向に攪乱が見られた。

5月12日(水)曇。ローム層上面を遺構確認面として、重機による表土除去を開始する。I区の確認面において縄文時代晩期の浅鉢形土器が出土した(第68号土坑)。I・IV区の表土はほぼ除去されたが、第1次調査区を確認することはできない。

5月13日(木)雨。現地作業中止。整理作業所で出土した遺物を水洗する。

5月14日(金)晴のち曇。重機による表土除去の2日目。第1次調査区が報告よりも南側にあった可能性を検討するために、II・III区を南方向に拡張する。II区東側に再葬墓らしき遺構を検出する(第45号土坑)。

5月17日(月)曇時々雨。重機による表土除去の3日目。II区で検出された再葬墓の範囲を検討するため、さらに東側へと調査区を拡張し、この部分を「II区拡張区」と表記する(第12図)。



1. 調査区グリッドの設定 (5月10日)



2. 遺構・攪乱の確認 (5月20日)



3. 第45号土坑の調査 (5月24日)



4. 第34号土坑の調査 (6月10日)

第13図 調査風景(1)

5月18日(火)小雨のち雨。午前は遺構確認の作業を継続したが、調査区内が泥化して作業が困難になり、中止する。午後は整理作業所で出土した遺物を水洗する。

5月19日(水)曇のち雨。10時までは午前は遺構確認の作業を継続したが、以後は降雨のため整理作業所で出土した遺物を水洗する。

5月20日(木)曇。遺構確認の作業を継続(第13図2)。第1次調査区の再葬墓等は埋め戻されて攪乱の状態で見出されると考えられることから、調査区内の攪乱の形状と攪乱同士の前後関係を含めて、遺構確認の平面図を作成することにする。

5月24日(月)晴。遺構・攪乱確認と平面図作成の作業を継続。再葬墓(第45～47号土坑)の検出状況を撮影した。その後、第45号土坑については、十字形のベルトを設定して覆土の掘り下げを開始する(第13図3)。掘り上げた覆土は、水洗選別に備えて土嚢袋に入れる。

5月25日(火)晴のち曇。遺構・攪乱確認と平面図作成の

作業を継続、平面図はⅠ区について完了した。再葬墓の第45号土坑は2基の重複のように観察される(第45A・B号土坑)。

5月26日(水)晴。遺構・攪乱確認と平面図作成の作業を継続、平面図はⅡ区拡張区とⅣ区についてほぼ完了した。ここまで、第1次調査区に一致する攪乱は認められない。

5月27日(木)晴。遺構・攪乱確認と平面図作成の作業をⅡ・Ⅲ区について継続。Ⅱ・Ⅲ区で見出された土坑のうち、再葬墓の前段階である1次葬の土坑に想定される平面規模の第34・41・43・67号土坑を半蔵して掘り始める。

5月28日(金)晴。遺構・攪乱確認と平面図作成の作業、第34・41・43・67号土坑の掘り下げを継続する。

5月31日(月)晴。遺構・攪乱確認と平面図作成の作業を継続。第34・41・43・67号土坑は、出土した土器から縄文時代後・晩期の遺構であることが確定した。各土坑の遺物出土状況を撮影。第45号土坑は覆土の掘り下げを再開した。



1. 第45号土坑の調査 (6月21日)



2. 第71号土坑の調査 (6月23日)



3. 第47号土坑の調査 (6月23日)



4. 第47号土坑の調査 (6月24日)

第14図 調査風景(2)

6月1日(火)晴。遺構・攪乱確認と平面図作成の作業、第34・41・43・67号土坑、第45号土坑の掘り下げを継続する。

6月2日(水)曇のち晴。昨日の作業を継続する。

6月3日(木)晴。遺構・攪乱確認と平面図作成の作業を継続、第45号土坑の掘り下げを継続する。第34・41・43・67号土坑のセクション図を作成した。

6月7日(月)曇のち晴。遺構・攪乱確認と平面図作成の作業、第34・41・43・67号土坑、第45号土坑の掘り下げを継続する。

6月8日(火)晴のち曇。遺構・攪乱確認と平面図作成の作業、第34・41・43・67号土坑の掘り下げを継続する。第45号土坑は、セクション図作成に向けて、ベルトにかかっている部分の土器及び土坑底面の精査に入る。

6月9日(水)晴。昨日の作業を継続する。

6月10日(木)晴。遺構・攪乱確認と平面図作成の作業がほぼ完了する。第34・41・43・67号土坑の掘り下げを継続(第13図4)。第45号土坑のセクションを中心に再葬墓を

撮影した。現地で空撮の打ち合わせ。

6月11日(金)晴。第45号土坑のセクション図を作成し、第45B号土坑が旧く第48号土坑が新しいことを確認した。ベルト部分の掘り込みを開始する。第41号土坑の底面付近から無文の注口土器が出土した。

6月14日(月)曇一時雨。第45号土坑の南北ベルト中で第45号土坑の2基の新旧関係を確認し、9個体の土器を埋設した第45B号が旧く、1個体の土器を埋設した第45A号が新しい。これ以後は遺物を2基に分けて表記する。第41号土坑の注口土器を撮影、取り上げた。

6月15日(火)曇一時雨。空撮に備えて、第45・46・47・76号土坑に埋置された土器の全体を露出させる。

6月16日(水)曇。空撮のための準備。

6月17日(木)曇のち晴。午前は空撮のための準備。11～12時、日本特殊撮影株式会社による空撮。撮影後、第34・41・43・67号土坑の平面図を作成、調査区を地図に落とし込むための測量を行なう。

6月18日(金)晴。第34・41・43・67号土坑の平面図、調査区測量を継続。第45号土坑土壤の水洗を開始する。

6月21日(月)晴。第45号土坑の土器出土状況エレベーション図、土器内セクション図を作成しながら土器を取り上げる(第14図1)。土器内セクションを撮影。第71号土坑を半載して掘り下げる。

6月22日(火)晴のち曇。第45号土坑の土器について、横位に埋置された土器下側の状況を撮影する。

6月23日(水)曇。第45号土坑の土器の取り上げが完了した。第47A・B号土坑を精査する(第14図3)。第71号土坑の撮影、エレベーション図・平面図を作成した(第14図2)。深い土坑については一部を埋め戻す。

6月24日(木)晴。第47A・B号土坑の土器出土状況エレベーション図・平面図を作成し、土器を取り上げる(第14図4)。第45B号土坑の底面を精査し、攪乱中の遺物も回収した。深い土坑の埋め戻しを継続。

6月25日(金)晴。再葬墓群周辺を撮影し、平面図を作成した。土壤の水洗も完了。第47A・B号土坑について、土器出土状況エレベーション図・平面図を作成し、土器を取り上げる。第45B号土坑の底面を精査し、攪乱中の遺物も回収した。これで調査を終了し、再葬墓は上面に山砂を敷いて埋め戻す。ポイントに刺しておいた五寸釘、木杭を抜き、機材を撤収した。

3 攪乱の分布

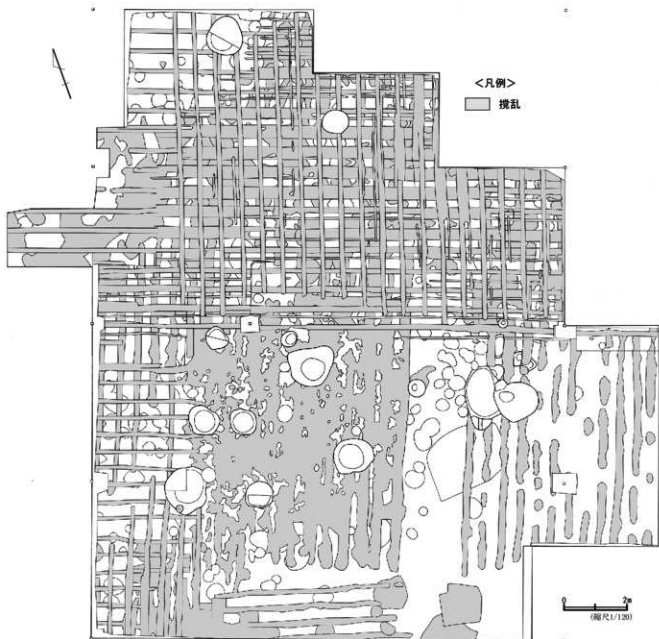
調査区のⅠ・Ⅳ区とⅡ・Ⅲ区を分ける線は、現在の土地境界(2842と2843・2844)にほぼ一致するように設定した。この線から南側に1mほどずれ込むものの、北側のⅠ・Ⅳ区と南側のⅡ・Ⅲ区とでは、攪乱の状態から耕作歴の大きな異なりが窺える(第15図)。Ⅰ・Ⅳ区のほとんどにはトレンチャーによる南北方向と東西方向の深耕溝が交差しており、ゴボウの耕作が繰り返されて攪乱を受けていない部分が僅かに残る状態であった。トレンチャーによる深耕溝は東西方向よりも南北方向が新しい。Ⅱ区東側からⅡ区拡張区にかけては、手掘りによる南北方向の深耕溝があり、これは連続してⅠ区にも及んでいることが捉えられた。ほぼ等間隔に溝が並ぶが、Ⅱ区拡張区の北壁断面では、少なくとも2回のゴボウ耕作の痕跡と観察された。Ⅰ区では、手掘りが旧くトレンチャーが新しいという新旧関係が明瞭である。この手掘りの深耕溝

の西側に2mほどの空白を挟んで、Ⅱ・Ⅲ区にまたがる攪乱は、手掘りによる南北方向のゴボウ耕作が繰り返された結果と考えられた。Ⅲ区のさらに西側には、トレンチャーによる南北方向と東西方向の深耕溝が交差していた。これは南北方向よりも東西方向が新しい。他にも不整形の攪乱があり、そのほとんどはトレンチャーによる深耕溝よりも古い。

第1次調査の時点では手掘りによるゴボウ耕作のみであったらしいが、表土を除去した今回の調査区は、トレンチャーによるゴボウ耕作が繰り返されて、縦横無尽と表現したくなるほどに攪乱を受けていた。つまり、第1次調査区を一目瞭然に特定することなど到底できない状態であった。調査した再葬墓等の遺構は埋め戻されて攪乱の状態で検出されると考えられたことから、今回の調査区については、遺構のみならず攪乱の検出状況についても詳細に記録を取ることにした。完成した遺構・攪乱平面図と、第1次調査区の遺構分布図を同縮尺で準備し、2枚を重ね合わせて、特に2・14・16・18号土坑という大型の土坑の配置が一致する攪乱部分を見出そうとしたわけである。Ⅱ区の東側からⅡ区拡張区にかけては、未調査の再葬墓が検出され、攪乱部分も比較的少ないことから、ここに一致することがないのは明らかであった。Ⅱ・Ⅲ区の壊滅的な攪乱部分については、平面規模の大きな土坑をいくつか掘り下げて調査し、耕作の攪乱が土坑の覆土よりも新しく、攪乱の中に埋没する土坑は未調査の状態であることが明らかにされている。Ⅰ・Ⅳ区のどこかに一致する攪乱部分があるにちがいないと、2枚を様々な重ね合わせてみたが、遂に一致を見出すことはなかった。以上のことから、今回の調査区内には、第1次調査区を確認することができないと判断した。

4 遺構の分布

第1次調査の報告は、ほぼ弥生時代の遺構と遺物に限定され、他の時代を含めた遺構番号の全体は明らかにされなかった。検出された遺構に番号を付すにあたり、同じ番号は混乱を招く可能性があると考えられた。第1次調査の住居跡が10基以下、土坑が30基以下であることは確実なので、今回の調査で検出された竪穴住居跡(竪穴遺構)は11号から、土坑は31号からの番号を採用した。



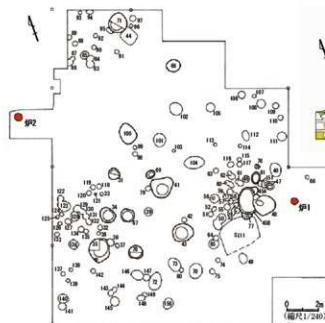
第15図 調査区の攪乱

今回の調査区で検出された遺構は、竪穴状遺構が1基(S11)、伊跡2基、柱穴状のピットも含めた土坑が130基ほどである(第16図)。一部でも覆土を掘り込む調査を実施したのは、第31・34・35・41・43・45(A・B)・46・47(A・B)・48(A・B)・67・68・69・71・76・77・78・81号土坑の17基、A・Bに分離した3基を加えれば20基である。

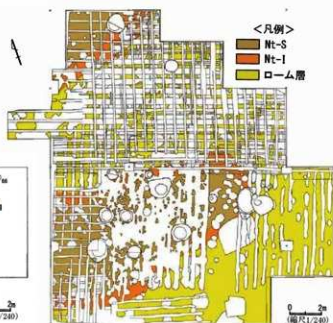
第45A・45B・46・47A・47B・76号土坑が現地において土器の埋設を確認した弥生時代の再葬墓であり、整理では第48B号土坑にも土器が埋設されていた可能性が考えられた。したがって、確実に6基、推定を含め

れば7基で構成される再葬墓群を調査した。また、これに重複するように形成された第48A・77・81号土坑の3基も弥生時代のものと推定される。

他の第31・34・35・41・43・67・78号土坑の7基については、再葬墓の前段階である1次葬の土坑に想定される平面規模であったことから、その確認のために調査を実施した。結果、遺構確認面から1mを超える深さの第34・41・43・67号土坑は縄文時代の土坑であることが確認された。遺構確認面から0.3mに満たない浅さの第31・35・78号土坑は、攪乱が底面にまで及び、覆土もほとんど観察できないような状態で、構築された時



第16図 調査区の遺構



第17図 調査区の地形

代を明らかにし得なかった。第68・71号土坑については、遺構確認面で遺物が検出されたことから、これを取り上げるために一部を調査した。ともに縄文時代の土坑である。

以上の調査により、縄文時代の遺構として土坑6基、弥生時代の遺構として再葬墓7基・土坑3基の10基を認められたが、検出した他の遺構については、覆土を掘り込む調査をほとんど実施しておらず、時代・時期は明らかでない。但し、覆土の色調や確認面に散布する遺物から、第11号竪穴遺構や2基の炉跡、土坑のほとんどは縄文時代に形成されたものと見られる。なお、調査区内からは、古代・中世の遺物もわずかに出土したが、これらの時代の遺構は確認されなかった。

調査区内をローム層上りまで掘り下げたところ、地面には橙色の今市スコリア (Nt-I) が露出する部分、淡褐色の七本椽スコリア (Nt-S) が露出する部分が現れた (第17図)。Ⅱ・Ⅲ区では、七本椽スコリアを今市スコリアが馬蹄形に取り囲み、その外側にローム層が広がる。ここには、更新世に南西方向へと台地を下刻した谷地形が形成され、それが今市・七本椽スコリアの堆積により埋没していると推定された。Ⅳ区の北西隅にも、同じような谷地形の一部が埋没している。第45A・B号土坑などの再葬墓群は、南側の埋没谷の谷頭付近に位置していることになる。また、縄文時代後・晩期の土坑で遺構確認面か

ら1mを超える深さの第34・41・43・67号土坑は南側の埋没谷の中に、第71号土坑は北側の埋没谷の中に位置する。今市・七本椽スコリア層は浸水性が高く、つまり溜水性が低い。谷地形内のローム層は水浸けにより粘土化している。土坑の調査中には、そのローム部分が浸水して、調査に支障をきたした。

5 調査区の基本土層

遺構確認面まではゴボウの深耕を含む耕作土としてほとんどが攪乱されており、今市スコリア・七本椽スコリア・ローム層という層序の上位に堆積する基本土層について捉えることができなかった。第1次調査では、ローム層直上に「Ⅲ. 暗褐色土」が堆積するような記載もあるが、切り合い関係等が混乱しており判然としない。

6 調査区の標高

調査区内から検出した遺構と出土した遺物は、仮原点を設定して測量し、これを標高に換算する予定であったが、仮原点へと標高を移動する基準点が近在には見当たらなかった。第1次調査の遺構等が検出できれば、同一箇所の標高から2つの調査区の整合については図れるとも考えていたが、それも断念せざるを得ないことになった。したがって、仮原点との差を表記して相対的な高低のみを示してある。

7 縄文時代の遺構と遺物

再葬墓群を主目的とする調査としては、1次葬の痕跡の有無を検討するために、土壌墓が想定される平面規模の土坑を対象に覆土を掘り込み、その多くが縄文時代の土坑であることを確認した。その証拠に相当する各土坑の遺構と遺物について概要を提示するとともに、縄文時代後・晩期の調査事例は、常陸大宮域のみならず茨城県北部において稀少なことから、調査区出土遺物のうち土偶などの土製品、石棒などの石製品、石器の一部についても報告しておきたい。

第34号土坑 III区に位置し、30cm余で第67号土坑に隣接する。確認面での規模と形状は長軸1.03m、短軸0.86mの略楕円形、深さは1.05m、底面は長軸0.68m、短軸0.64mの略円形である(第18図2)。

底面付近からは、縄文時代後期後半の鉢形土器(第22図1)が横位の状態で出土した(図版10-2)。鉢形土器は器高195mm、口径214mm(残存率60%)、頸径173mm(残存率81%)、胴径179mm(残存率95%)、底径55mm(残存率100%)。

石器は剥片類が4点(6.7g)、土製品は土器片円盤2点が出検されている。動物遺存体は検出されなかった。

第41号土坑 II区に位置する。確認面での規模と形状は長軸1.50m、短軸1.10mの不整形、深さは1.68m、底面は長軸0.75m、短軸0.70mの略円形である(第18図1)。上部が不整形であるのは、覆土第4・5層に今市・七本桜スコリアのブロックが多量に含まれることから、壁の崩落によるものと考えられる。確認面下1mまではセクション図を作成できたが、降雨後に水没して以下の観察はできなかった。

底面付近の西壁際からは、縄文時代晩期前葉の注口土器(第19図4)が正位の状態で出土し、その周囲に深鉢形土器の口-胴部破片(1)、粗製深鉢形土器の胴-底部破片(8)がまとまっていた(図版10-3・4)。注口土器は器高180mm、口径100mm(残存率39%)、頸径170mm(残存率100%)、胴径238mm(残存率69%)、底径50mm(残存率100%)。器外面の胴下部には酸化した鉄分が付着している。

石器は剥片類が20点(316.9g)、磨石・敲石・石皿が3点、土製品は土偶が2点(第25図1・4)、土器片円盤が3点、動物遺存体は5点(9.3g)が出検されている。

第43号土坑 II区に位置する。確認面での規模と形状は長軸1.30m、短軸1.12mの略楕円形、深さは1.45

m、底面は長軸0.84m、短軸0.75mの略円形である(第18図3)。確認面下1.2mまではセクション図を作成できたが、降雨後に水没して以下の観察はできなかった。

覆土第1層の下部からは、縄文時代晩期前葉の深鉢形土器口縁部の破片(第20図1)、注口土器口-頸部の破片(3)がまとまって出土した(図版10-5)。底面付近からも、縄文時代晩期前葉の深鉢形土器胴部破片(第20図4)が出土している。これは胴径382mm(残存率25%の部分からの推定)と大型である。

石器は剥片類が167点(1,089.4g)、石鏃・石鏃未成品が4点、磨石・敲石・石皿・凹石・砥石が9点、土製品は耳飾りが1点(第25図5)、土器片円盤が3点、動物遺存体は10点(6.0g)が出検されている。

第67号土坑 III区に位置し、30cm余で第34号土坑に隣接する。確認面での規模と形状は長軸0.92m、短軸0.75mで隅丸方形に近く、深さは1.60m、底面は長軸0.65m、短軸0.62mの略円形である(第18図2)。確認面下0.9mまではセクション図を作成できたが、降雨後に水没して以下の観察はできなかった。西側の壁に露出したローム層は粘土化しており、今市スコリアとの境界付近に赤~橙色に酸化した鉄分の集中が観察されている。

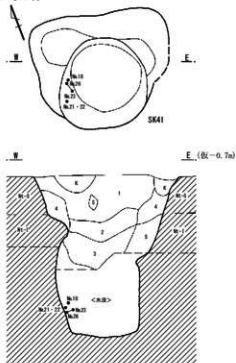
覆土第1層の上部から縄文時代後期前葉の深鉢形土器の大破片(第21図1)が出土したが、覆土中には晩期前葉の注口土器(2)の破片も含まれており、土坑の時期は晩期前葉と考えられる。

覆土第2層とした部分には、剥片類が多量に含まれ、「混剥片土層」と表現し得る状態であった。一部は現地の調査でも取り上げたが、微細な破片まで回収するためにほとんどは土壌ごと採取し、3mm方眼の篩を使用して水洗選別を実施した。回収された剥片類の石材ごとの点数と重量は以下の通りである。(図版11-6参照)

石材	点数	重量(g)
メノウ	4899	2,956.1
碧玉	95	76.1
チャート	32	26.9
流紋岩	2	2.5
合計	5028	3,061.6

剥片類に混在して、32点の石鏃・石鏃未成品が出検された(第1表)。そのうち17点は水洗選別で回収されたものである。石鏃未成品が22点、成品もしくは成品に近

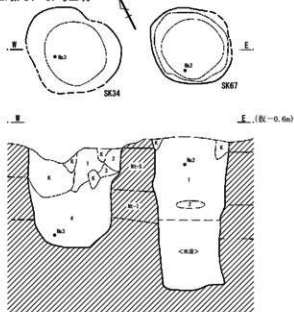
1. 第 41 号土坑



第 41 号土坑 (SK41) 堆積覆土

- 第 1 層：暗褐～黒褐色土層
 第 2 層：暗褐～褐色土層
 第 3 層：黒褐色土層
 第 4 層：暗褐色土と Nt-S ブロックの混合層
 第 5 層：暗褐色土と Nt-I ブロックの混合層

2. 第 34・67 号土坑



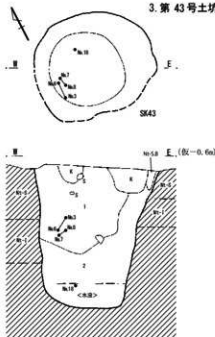
第 67 号土坑 (SK67) 堆積覆土

- 第 1 層：暗褐色土層

第 34 号土坑 (SK34) 堆積覆土

- 第 1 層：暗褐色土層
 第 2 層：黒褐～暗褐色土層
 第 3 層：暗褐色土層
 第 4 層：褐～暗褐色土層

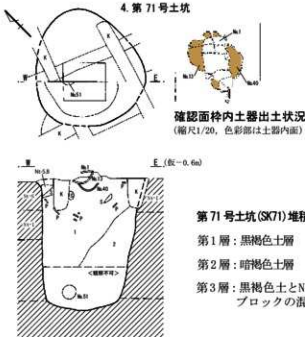
3. 第 43 号土坑



第 43 号土坑 (SK43) 堆積覆土

- 第 1 層：暗褐色～褐色土層
 第 2 層：赤みを帯びた褐色土層

4. 第 71 号土坑



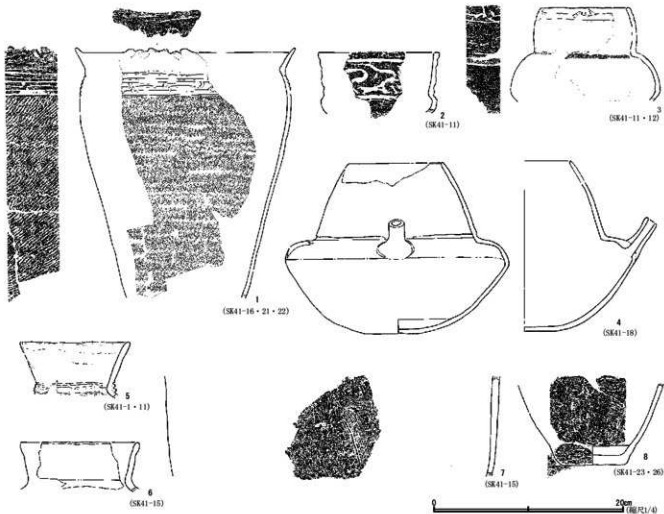
第 71 号土坑 (SK71) 堆積覆土

- 第 1 層：黒褐色土層
 第 2 層：暗褐色土層
 第 3 層：黒褐色土と Nt-S
 ブロックの混合層

K: 攪乱, B: ブロック, P: 土器破片, S: 礫・石器



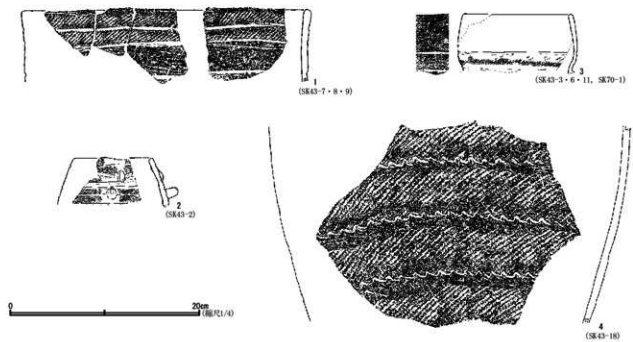
第 18 図 縄文時代土坑実測図



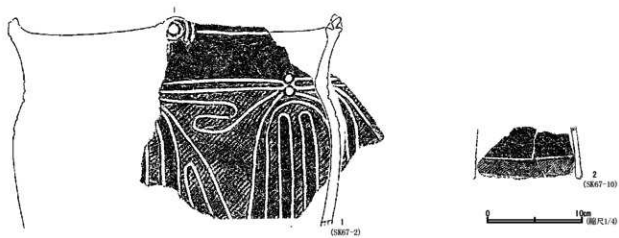
第19図 第41号土坑出土土器

い未成品は7点、判断のできない細片が3点に分けられた。石材は、メノウが27点で圧倒的に多く、他は碧玉が3点、オパールが1点、珪質頁岩が1点である（石材鑑定は田切美智雄氏による）。碧玉には1点の未成品が含まれ、オパールの1点も未成品であるが、珪質頁岩は成品のみであった。メノウは20点が未成品、5点が成品もしくは成品に近い未成品、2点が判断のできない細片であった。メノウの剥片には、縁辺の一部に刃部を加工した利器が1点含まれるもの、その未成品の多さから、ほとんどは石鏃製作に伴う石核・剥片・破片と捉えることができる。最大計測値が2cm以上の剥片類は点数が424点（9%）、重量が2,354.5g（80%）。礫面を残した残核の破片、石鏃の長さを上回る剥片等で構成され、石鏃素材の剥片剥離に相当する痕跡として捉えられる。2cm未満の剥片類は点数が4,475点（91%）、重量が601.6g（20%）。押圧剥離による微細な剥片を多量に含んでおり、石鏃の調整剥離に相当する痕跡として捉えられる。ここでは、素材の

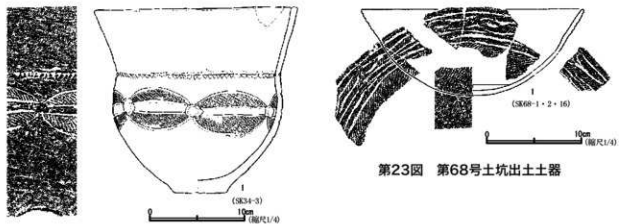
剥片剥離から調整剥離まで一連の製作痕跡が残されていた。成品には無茎「泉坂下型」（図版12-1）が1点含まれていたが、これは表面に光沢がなく、他のメノウとは別個体の石材で製作されたものと見られる。有茎の成品（2～4）が3点検出されており、この形態が目的と推定される未成品が多い。また、尖基柳葉形の形態が目的と推定される未成品（16～18）も3点検出された。石鏃未成品として抽出した中に、オパール（石材鑑定は田切美智雄氏による）が含まれていたことは、メノウとして一括した剥片類の中にもオパールとすべき石材が含まれていることを考えさせたが、膨大な量であるため全ての鑑定は実施できていない。碧玉については、メノウと同様に石鏃製作の剥片・破片を伴う。チャート、流紋岩は、剥片・破片のみで石鏃・石鏃未成品が検出されていない。逆に成品のみの珪質頁岩は、製作の痕跡が残されていない。泉坂下遺跡の第26号竪穴住居跡の覆土に実施した水洗選別では、各土壌中から剥片類が検出されたが、現地の調査で覆土中に



第20图 第43号土坑出土土器

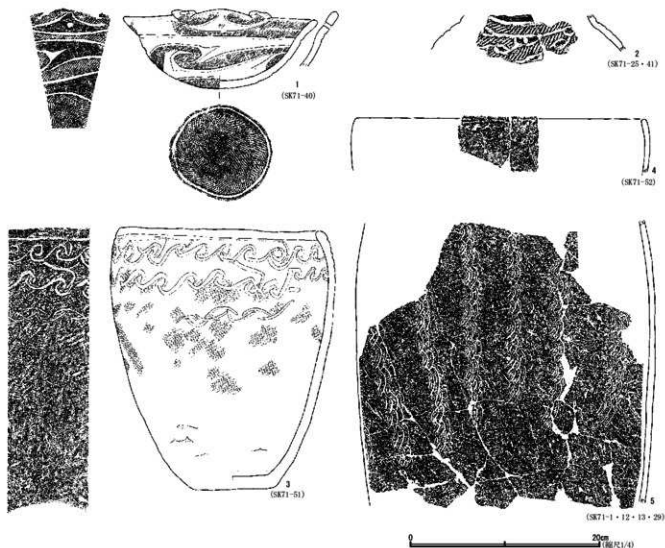


第21图 第67号土坑出土土器



第22图 第34号土坑出土土器

第23图 第68号土坑出土土器



第24図 第71号土坑出土土器

剥片類の集中は捉えられていない(鈴木2021)。第67号土坑は、メノウを中心とする石鏃製作の痕跡が一括で廃棄された稀な事例と考えられる。

石器は他に磨石・巖石が3点、土製品は土器片円盤が4点、動物遺存体は1点(0.7g)が検出されている。

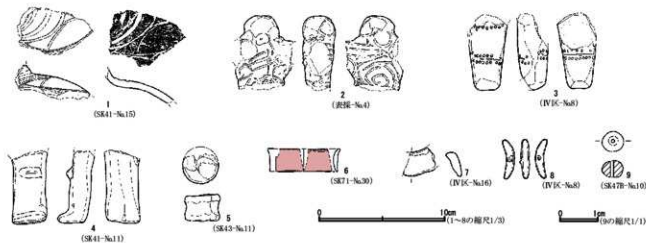
第68号土坑 I区に位置する。確認面において縄文時代晩期前葉の浅鉢形土器の破片(第23図1)がまとまって検出された。これを取り上げるために確認面下0.3mまで掘り下げたところ、土坑は、直径0.80-0.85mの円筒形であることが捉えられた。石鏃・石鏃未成品も5点が出土している。

第71号土坑 IV区に位置する。半截して南側だけを底面まで調査した。確認面での規模と形状は長軸1.24m、短軸1.14mの倒卵形、深さは1.34mで、底面は直径0.77mほどの略円形が推定される(第18図4)。

確認面において縄文時代晩期前葉の粗製深鉢形土器の

胴部(第24図5-No.1)が器外面を上に向けた横位で検出された。これを取り上げるために調査を進めたところ、下位から同一個体の胴部(5-No.13)が器内面を上に向けた横位で、さらに下位からは、これも縄文時代晩期前葉の浅鉢形土器(1-No.40)が正位で検出された(図版10-6)。これらの土器については、正位の浅鉢形土器を覆うように、深鉢形土器が横位で設置された状態が復元される。浅鉢形土器は、器高83mm、口径207mm(残存率89%)、丸底。深鉢形土器は、胴径318mm(残存率28%)と大型である。確認面下1mまではセクション図を作成できたが、以下の観察はできなかった。底面付近からは、縄文時代晩期前葉の粗製深鉢形土器(第24図3)が横位の状態で出土した(図版10-7)。ひびは入るが欠損のない完全形である。土器内土壌の水洗選別では、この深鉢形土器内から完全形の石鏃(図版11-5)が検出されている。

覆土の半分ほどの調査ではあったが、石器は剥片類が



第25図 調査区出土土製品

57点 (296.9 g)、石錘が1点、石錘1点、磨石・敲石が2点、土製品は耳飾り1点 (第25図6)、土器片円盤が2点、動物遺存体は23点 (16.1 g) が検出されている。

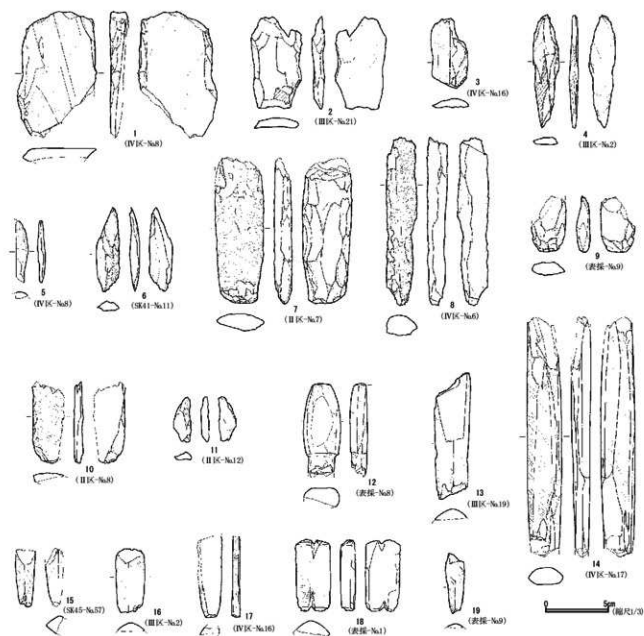
以上のことから、第34号土坑については縄文時代後期後半、第41・43・67・71号土坑の4基については縄文時代晩期前葉の土坑と判断した。底面までを調査していない第68号土坑も縄文時代晩期前葉と推定される。底面まで調査した5基は、全て深さが1mを超える円筒形の土坑であり、そのなかでは後期の第34号土坑が他の晩期の土坑と比較して浅いことが指摘される。

調査区出土の遺物 遺構も含めて調査区から出土した縄文時代の遺物のうち、土製品 (第25図)、石製品のうち石棒・石棒未成品とその製作工具 (第26・27図)、磨製石斧未成品 (第27図4) など一部を実測図で、石鏃・石鏃未成品を一覧表 (第2表) で掲載した。

土製品 土偶4点、耳飾り2点、土製腕輪1点、垂飾り2点を報告する。第25図1は、特異な形状の土器という可能性もあるが、湾曲から中空土偶の頸・肩部に相当する破片と推定した。無文部は磨き調整され、表裏面に沈線文が施されている。第41号土坑の覆土から出土した。2は、中実土偶の頭・胴部である。表面採集されたもので、四倉一郎の採集品にも顔面部に穴を穿つ粗製な土偶の類例があることから掲載した。左胸部には、わずかな隆起で乳房が表現されているように見える。全体に撫で調整され、沈線文が施されている。3は、右脚部の破片であり、管状施文具による刺突文と沈線文が施されている。4は、左脚部の破片であり、短い隆帯が貼付されている。第41号土坑の覆土から出土した。他にも土偶の

一部と推定される小破片が8点検出されている。5は、小型中実の消車形土製耳飾りである。最大直径は28mm (残存率66%) で、無文。第43号土坑の覆土から出土した。6は、中型環状の消車形土製耳飾りである。最大直径は58mm (残存率15%)。一端が窪状工具で刻まれ、器内面の端部付近には沈線文が施されている。器内外面とも磨き調整後に赤彩。第71号土坑覆土から出土した。7は、土製腕輪の破片であり、オオツツノハ製貝輪を模倣した形状が推定される。赤彩や白彩の痕跡は観察されなかった。8は、土製垂飾りであり、動物の牙製勾玉を模倣した形状と考えられる。穿孔は、端部ではなく、中央付近に位置する。これにも赤彩や白彩の痕跡は観察されなかった。9は、土製小玉である。第47B号土坑 (弥生時代再葬墓) 覆土の水洗選別で検出された。縄文時代後・晩期の本覚遺跡 (鈴木 2005) において検出される一方で、弥生時代中期の泉坂下遺跡など再葬墓には確実な出土事例を認めないことから、縄文時代のもつと判断した。

石製品 石棒・石棒未成品22点を報告する。このうち19点 (第26図1~19) の石材は粘板岩であり、他にも石棒の小破片、石棒未成品の剥片・破片として26点 (131.2 g) が抽出されている。これらは、第45・47B・48・81号土坑 (弥生時代再葬墓) 覆土の水洗選別でも検出された。他の石材の3点 (第27図1~3) はいずれも成品である。第26図1~4は剥離段階の未成品。1・3には素材である河川礫の自然面が残る。5~11は敲打段階の未成品。5は頭部、7・9・10は基部に相当する。両面が残る7~10は、敲打の進行が片面のみで、衝突痕 (クレーター) も大きいことから、敲打段階の初期のもつと考えられる。12は、

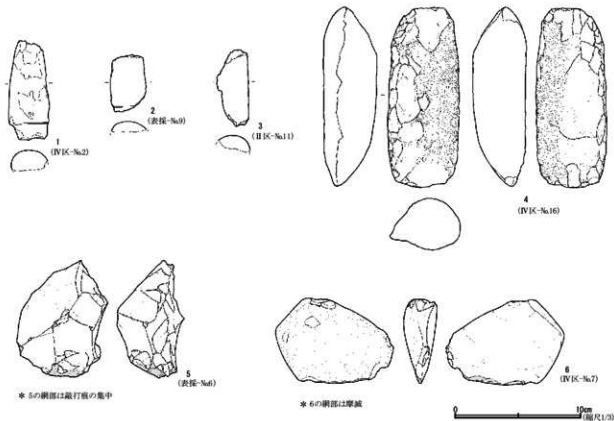


番号	注記	種類	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
1	IV区-№8	石種未成品	100	63	15	92.2	研磨段階
2	III区-№21	石種未成品	73	41	10	28.4	研磨段階
3	IV区-№16	石種未成品	55	28	8	13.5	研磨段階
4	III区-№2	石種未成品	90	21	7	13.0	研磨段階
5	IV区-№8	石種未成品	48	10	6	2.9	敲打段階
6	SK41-№11	石種未成品	66	18	8	8.1	敲打段階
7	II区-№7	石種未成品	116	39	14	86.9	敲打段階
8	IV区-№6	石種未成品	133	24	16	67.7	敲打段階
9	表採-№9	石種未成品	44	27	11	13.8	敲打段階
10	II区-№8	石種未成品	64	25	7	14.5	敲打段階
11	II区-№12	石種未成品	35	14	6	3.0	敲打段階
12	表採-№8	石種未成品	74	30	14	43.5	研磨段階
13	III区-№19	石剣	100	29	8	27.5	
14	IV区-№17	石剣	190	27	15	108.7	焼痕(赤化)あり
15	SK45-№57	石剣	46	14	15	8.4	水洗差別
16	III区-№2	石剣	51	23	8	10.8	
17	IV区-№16	石刀身	65	19	7	8.7	
18	表採-№1	石剣	56	28	14	29.3	石面に転用
19	表採-№9	石剣	48	15	3	2.4	焼痕(赤化)あり

第26図 調査区出土石製品 一粘板岩製石棒一

固定砥石(磨き砥石)による研磨で形成された稜線が残り、研磨で生じた擦痕も明瞭であることから、研磨段階前半期(研磨段階1)の未成品として捉えた。頭部の破片である。但し、同様な研磨の痕跡が残る14には、使用の痕跡

と考えられる焼痕(赤化)が認められ、泉坂下遺跡第26号竪穴住居跡から出土した石剣にもこれが認められることから、成品の可能性もある(鈴木2016)。13～19は、研磨による擦痕がわずかなもの(15～18)、焼痕が観察される



※ 5の網目は磨行痕の集中

※ 6の網目は摩滅

10cm
(1/4 英尺)

番号	法記	部類	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
1	Ⅳ区-№2	石棒	千枚岩	79	32	16	65.6	破損7あり
2	表採-№9	石棒	千枚岩	45	28	9	16.0	
3	Ⅱ区-№11	石棒	長石質片岩	61	25	13	21.6	
4	Ⅳ区-№16	磨製石斧未成品	硬砂岩	142	57	43	469	
5	表採-№6	敲石	珪質頁岩	92	72	53	262	
6	Ⅳ区-№7	削器(推切具)	硬砂岩	68	93	26	176.5	

『石材』は田切実智雄氏の鑑定による。

第27図 調査区出土石製品・石器

もの(14-19)を成品として捉えた。18は、胴部が「擦り切り」で折断され、切目石錘に転用されている。第27図1・2は千枚岩、3は長石質片岩を素材とする。研磨の擦痕がほとんど観察されずいずれも成品として捉えた。これらの石材は、粘板岩を含めて多賀山地の日立変成岩と推定されている(石材鑑定は田切実智雄氏による)。頭部の形状は幅に対して長さが倍ほどの「長頭形」(第26図12・第27図1)があり、胴部の断面形状が菱形(第26図15など)あるいは楕円形(第27図3)で石剣に限定されること、両頭形が確認できないことなど「小山台型」の特徴を認め、一方で「小野型」については確実な特徴を抽出することができない。「小山台型」については、「大洞B・BC・C1式に伴う。「大洞B・BC式」には、日立変成岩が堆積する多賀山地の太平洋岸に製作遺跡が推定され、「大洞C1式」には、久慈川流域にも製作遺跡が認められる」(鈴木2021)という認識であったが、今回調査された縄文時代晩期前葉の第41号土坑覆土からは粘板岩の石棒未成品

が1点(第26図6)検出されたことを記しておきたい。石器のうち、石棒製作に関係する資料として、磨製石斧未成品1点、敲石1点、削器(推切具)1点を報告する。第27図4は、磨製石斧の未成品であり、Ⅳ区西側の表土から出土した。石材は硬砂岩。右側面から表裏面にかけて一部に自然面を残し、左・上・下側面からの剥離で全体が成形されている。敲打による整形が右側面を中心に進行している。泉塚下遺跡では、ホルンフェルスを石材とした磨製石斧の製作が確認されており(鈴木2021)、石棒製作とは同じ作業工程の磨製石斧は、石材が異なるものの、小野天神前遺跡においても製作されていた。5は、珪質頁岩の石核を転用した敲石である。石棒製作の敲打段階のうち整形の仕上げに相当する資料には細かな衝突痕が残されており、先端が尖る敲石によるものと考えられている。端部が尖る敲石として、石核が選択されたものと見られる。敲打を繰り返すことで摩滅した面が形成されるとともに、その衝撃により端部からの剥離が生じ

ている。6は、硬砂岩の剥片の縁辺を使用した削器（擦切具）である。鋭利であった側縁が摩滅し、摩滅は裏面（剥片の主要剥離面）の一部にも及ぶ。石剣破片の転用（第26図18）を含めて16点の切目石錘が出土しており、この製作にも使用されるが、擦切具として石棒製作のための工具の1つであったと考えられる。硬砂岩の剥片を使用した削器（擦切具）は3点が抽出されており、使用痕が最も明瞭な1点を掲載した。

石 畿 第67号土坑の32点の他に、調査区から74点の石畿・石畿未成品が検出された（第2表）。発掘調査で出土したのは表採も含めて69点、再葬墓覆土の水洗選別で抽出されたのが5点である。74点の石材は、メノウが35点、チャートが25点、玉髓が4点、珪質頁岩が4点、オパールが3点、碧玉が2点、流紋岩が1点である（石材鑑定は田切美智雄氏による）。その比率は、メノウが47%、チャートが34%、玉髓が5%、珪質頁岩が5%、オパールが4%、碧玉が3%、流紋岩が1%。まずは、これを那珂川流域の上流に位置する宿尻遺跡（鈴木2022）と比較すると、宿尻遺跡では、石畿・石畿未成品が37点検出され、メノウが41%（15点）、チャートが41%（15点）、碧玉が11%（4点）、流紋岩が5%（2点）、オパールが3%（1点）である。石材が共通するとともに、メノウに伍するようにチャートが多い。次に、久慈川流域に立地する泉坂下遺跡（鈴木2021）と比較すると、泉坂下遺跡第6次調査第33トレンチ（第26号型穴住居跡）では、石畿・石畿未成品が75点検出され、メノウが71%（53点）、チャートが11%（8点）、オパールが11%（8点）、珪質頁岩が5%（4点）、玉髓が1%（1点）、黒曜石質火山ガラスが1%（1点）である。メノウが圧倒的に多いことが、那珂川流域の小野天神前遺跡、宿尻遺跡と異なる。チャートの比率が高いことを那珂川流域の特徴と指摘できそうではあるが、泉坂下遺跡は、ほぼ縄文時代晩期の資料であるのに対して、小野天神前遺跡、宿尻遺跡は、後・晩期が重複した資料の総体であることに注意が必要である。第67号土坑では石畿・石畿未成品の32点のうち84%（27点）をメノウが占めていた。これが小野天神前遺跡における晩期の石材組成を代表するのか、今後の遺構を単位とした調査と分析が必要である。未成品を除いた石畿は47点で、基部が残存形態が捉えられたのは41点であった。有茎が29点、無茎が8点、その他4点であり、有茎が圧倒的に多

い。有茎の15点をメノウが占めるのに対して、無茎のメノウは2点に過ぎない。石材と形態の対応が時期の異なりによることも考えられるのである。

参考文献

- 阿久津久 1978『茨城県大宮町小野天神前遺跡(石畿)』学術調査報告書1 茨城県歴史館
- 鈴木素行 2005『本覚遺跡の研究 ―関東地方東部における縄文時代晩期の石棒製作について―』(66頁)
- 鈴木素行 2011『泉坂下遺跡の研究 ―一人面付土器を伴う弥生時代中期の再葬墓群について―』(66頁)
- 鈴木素行 2016『泉坂下遺跡における石棒製作について』『泉坂下遺跡Ⅴ―一人面付土器を伴う弥生時代中期の再葬墓群― 保存整備事業に伴う第4次確認調査報告及び総括報告―』(202頁) 常陸大宮市教育委員会 146-160頁
- 鈴木素行 2021『泉坂下遺跡Ⅶ ―保存整備事業に伴う第6次確認調査報告―』(202頁) 常陸大宮市教育委員会
- 鈴木素行 2021『縄文時代 ―関東地方東部における縄文時代晩期の石棒製作について・Ⅳ―』『泉坂下遺跡Ⅶ』所収 常陸大宮市教育委員会 112-120頁
- 鈴木素行 2022『宿尻遺跡 ―久慈川・那珂川流域の再葬墓Ⅰ―』(207頁) 常陸大宮市教育委員会
- 萩野谷悟 2022『泉坂下遺跡Ⅵ ―保存整備事業に伴う第5次確認調査報告―』(202頁) 常陸大宮市教育委員会

第1表 第67号土坑出土石織一覧表

図録番号	注記	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
図録12-1	SK67-8-1	石織(燧石)	メノウ	20	13	5	1.0	発掘下型)
2	SK67-7-2	石織(燧石)	メノウ	23	15	5	1.1	水洗
3	SK67-1-1	石織(燧石)	メノウ	28	16	7	2.0	
4	SK67-7-13	石織(燧石)	メノウ	22	18	6	1.9	水洗
5	SK67-3-1	石織未成品	メノウ	31	21	8	3.9	水洗
6	SK67-7-8	石織未成品	メノウ	30	19	7	4.0	水洗
7	SK67-1-3	石織未成品	メノウ	28	25	12	6.5	
8	SK67-8-2	石織未成品	メノウ	24	24	9	4.2	
9	SK67-1-2	石織未成品	メノウ	32	20	12	5.9	
10	SK67-7-10	石織未成品	メノウ	26	19	9	4.0	水洗
11	SK67-8-3	石織未成品	メノウ	30	18	9	3.9	
12	SK67-7-3	石織未成品	メノウ	27	20	8	3.7	水洗
13	SK67-8-7	石織未成品	メノウ	26	16	6	2.3	
14	SK67-8-6	石織未成品	メノウ	25	16	6	2.0	
15	SK67-8-5	石織未成品	メノウ	28	16	10	3.3	
16	SK67-8-8	石織未成品	メノウ	30	9	6	1.5	
17	SK67-1-4	石織未成品	オパール	27	9	7	1.6	
18	SK67-8-4	石織未成品	メノウ	32	15	7	2.8	
19	SK67-7-1	石織未成品	メノウ	28	14	7	2.0	水洗
20	SK67-7-11	石織(燧石)	碧玉	22	13	5	1.1	水洗
21	SK67-7-5	石織(燧石)	碧玉	10	11	5	0.4	水洗
22	SK67-6	石織未成品	碧玉	20	17	9	2.1	
23	SK67-7-9	石織(燧石)	珪質頁岩	27	19	4	1.4	水洗
--	SK67-7-14	石織	メノウ	17	16	6	1.6	水洗
--	SK67-7-12	石織(燧石)	メノウ	10	6	3	0.2	水洗
--	SK67-7-4	石織(燧石)	メノウ	9	11	4	0.3	水洗
--	SK67-3-3	石織未成品	メノウ	23	15	10	2.0	水洗
--	SK67-3-2	石織未成品	メノウ	21	21	5	1.5	水洗
--	SK67-8-10	石織未成品	メノウ	16	15	7	1.2	
--	SK67-8-9	石織未成品	メノウ	15	14	7	1.5	
--	SK67-7-6	石織未成品	メノウ	13	14	4	0.6	水洗
--	SK67-7-7	石織未成品	メノウ	13	8	4	0.5	水洗

*「石材」は田中實隆氏の鑑定による。

第2表 調査区出土石織等一覧表

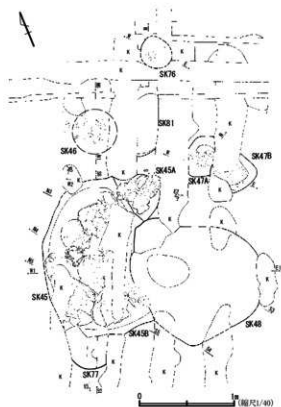
図録番号	注記	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	備考
図録14-1	SK45-10	石織(燧石)	メノウ	20	11	4	0.7	
2	表挿-9-1	石織(燧石)	メノウ	20	11	3	0.6	
3	B区-20	石織(燧石)	メノウ	23	12	4	0.8	
4	SK45-9	石織(燧石)	メノウ	26	12	4	0.7	
5	1区-4	石織(燧石)	メノウ	25	11	3	0.7	
6	SK68-21-1	石織(燧石)	メノウ	21	13	4	0.8	
7	1区-8-1	石織(燧石)	メノウ	19	12	4	0.7	
8	SK48-8	石織(燧石)	メノウ	16	12	4	0.5	
9	1区-15-2	石織(燧石)	メノウ	20	18	4	1.2	
10	B区-7-2	石織未成品	メノウ	30	24	6	2.8	
11	B区-8-1	石織未成品	メノウ	27	23	10	3.6	
12	B区-11-1	石織未成品	チャート	30	17	7	4.0	
13	SK68-22	石織(燧石)	チャート	20	15	4	0.9	
14	SK45-57	石織(燧石)	チャート	16	14	3	0.5	水洗
15	1区-1	石織(燧石)	チャート	27	16	5	1.3	
16	SK47-2	石織(燧石)	チャート	17	14	5	0.9	水洗
17	B区-29-1	石織(燧石)	チャート	23	12	5	0.8	
18	表挿-5-1	石織(燧石)	チャート	18	13	4	0.5	
19	B区-29-2	石織(燧石)	チャート	16	9	5	0.7	
20	表挿-8	石織(燧石)	珪質頁岩	15	14	2	0.3	
21	SK76-1	石織(燧石)	珪質頁岩	22	14	4	1.0	黒色付着物
22	B区-3	石織(燧石)	珪質頁岩	20	15	5	1.1	
23	SK47-3	石織(燧石)	珪質頁岩	18	10	2	0.2	水洗
24	1区-8-2	石織(燧石)	玉軸	17	15	4	0.6	
25	B区-16	石織(燧石)	玉軸	20	13	4	1.0	磨痕(黒化)
26	B区-12-3	石織未成品	玉軸	18	11	6	0.8	磨痕(黒化)
27	1区-8-4	石織未成品	玉軸	26	19	6	2.3	
28	SK43-2	石織(燧石)	オパール	22	11	5	0.8	
29	1区-15-1	石織(燧石)	オパール	11	8	4	0.3	
30	B区-5	石織未成品	オパール	24	19	7	2.2	
31	SK45-12	石織(燧石)	碧玉	18	9	6	1.0	
32	B区-14-2	石織(燧石)	流紋岩	22	13	4	0.7	
--	B区-22-1	石織(燧石)	メノウ	10	13	3	0.4	
--	1区-9-1	石織(燧石)	メノウ	18	11	5	0.7	
--	B区-27	石織(燧石)	メノウ	17	17	7	1.4	
--	B区-4	石織(燧石)	メノウ	17	14	5	1.2	
--	SK48-7	石織(燧石)	メノウ	15	14	4	0.6	
--	B区-3	石織(燧石)	メノウ	14	10	4	0.5	
--	SK45-11	石織(燧石)	メノウ	13	10	3	0.3	
--	B区-4	石織(燧石)	メノウ	11	16	3	0.3	
--	SK46-6	石織(燧石)	メノウ	7	9	3	0.1	水洗
--	表挿-9-2	石織	メノウ	20	11	4	0.7	
--	B区-7-1	石織	メノウ	19	10	3	0.4	
--	B区-6	石織	メノウ	17	14	6	1.3	
--	SK47-16	石織	メノウ	10	8	3	0.1	
--	B区-22-2	石織	メノウ	9	5	3	0.1	
--	1区-9-2	石織未成品	メノウ	35	23	12	7.6	
--	SK43-17-2	石織未成品	メノウ	34	23	10	7.2	
--	B区-5	石織未成品	メノウ	30	22	13	8.9	
--	1区-5-3	石織未成品	メノウ	29	21	12	8.1	
--	B区-12-2	石織未成品	メノウ	29	19	11	4.8	
--	B区-8-2	石織未成品	メノウ	27	12	9	2.8	
--	B区-8	石織未成品	メノウ	26	21	8	4.1	
--	表挿-5-3	石織未成品	メノウ	23	18	6	1.8	
--	1区-8-3	石織未成品	メノウ	21	21	7	2.7	
--	SK43-17-1	石織未成品	メノウ	20	16	8	2.4	
--	B区-25	石織(燧石)	チャート	20	17	5	1.2	
--	SK42-1	石織(燧石)	チャート	18	14	3	0.6	
--	SK81-2	石織(燧石)	チャート	14	15	3	0.5	
--	表挿-5-2	石織(燧石)	チャート	19	13	4	0.9	
--	SK45-101	石織(燧石)	チャート	16	13	4	0.6	水洗
--	B区-12-1	石織(燧石)	チャート	15	13	4	0.8	
--	表挿-6	石織	チャート	13	11	3	0.4	
--	SK68-19-1	石織未成品	チャート	37	25	7	6.1	
--	B区-10	石織未成品	チャート	34	21	16	7.9	
--	1区-5-2	石織未成品	チャート	32	29	9	8.7	
--	SK68-19-2	石織未成品	チャート	30	17	5	2.5	
--	SK69-1	石織未成品	チャート	26	14	8	2.2	
--	SK68-21-2	石織未成品	チャート	24	22	9	3.4	
--	1区-5-1	石織未成品	チャート	22	18	7	2.9	
--	SK43-11	石織未成品	チャート	21	13	6	1.2	
--	B区-11-2	石織未成品	チャート	19	30	7	3.4	
--	表挿-2	石織未成品	チャート	14	13	4	0.6	
--	B区-2	石織未成品	碧玉	40	31	9	11.9	
図録11-5	SK71-51	石織	メノウ	51	21	6	2.8	土器跡、水洗

*「石材」は田中實隆氏の鑑定による。

Ⅲ 再葬墓の調査

1 弥生時代遺構の分布

重機による表土除去の2日目に、Ⅱ区の東側から再葬墓と考えられる遺構を検出した。手掘りのゴボウ耕作でかなり攪乱(K)をうけていたが、複数個体の壺形土器が接近して埋没していると考えられた。当初は調査区をⅠ～Ⅳ区の範囲内と考えていたが、この再葬墓に関連する遺構が周辺に分布する可能性を検討するため、調査区を東側に拡張した。これがⅡ区拡張区である。表土除去後にローム層上面で遺構を確認すると不整な平面形状が出現し、複数の再葬墓が重複する可能性が考えられた。しかし、攪乱により判然としないことから、これを第45号土坑として遺構の調査を始めた。調査が進むと、多くの土器を埋置した土坑(第45B号)に重複して、1個体のみ土器を埋置した土坑(第45A号)が掘り込まれていることが明らかとなった。土器群には既に番号を付してあったことから、第45号土坑としての土器7が第45A号土坑に帰属する。第45B号土坑には、さらに2基の土坑が重複し、東側の土坑は、当初から重複する別の土坑と考えられたので第48号、南側の土坑は、調査が進んでから重複が確認されたことから、第77号というように番号が離れている。第45A・B号土坑の北側には、埋設された土器が3箇所で露出し、これらを第46・47・76号土坑とした。第47号は、当初1基の土坑と考えられたが、最終的に2基の土坑(第47A・B号)の重複と判断した。したがって、土器の埋置を伴う弥生時代の再葬墓は、6基が検出された。第76号土坑の北端から第45B号土坑の南端までは、3.2m、第47B号土坑の東端から第45B号土坑の西端までは2.6mであり、これを長軸・短軸とした楕円形の範囲に分布する。この範囲にかかる第48・77・81号土坑は、土器の埋置は伴わないものの、再葬墓群に関連する弥生時代の土坑と考えられた。調査後、第76号土坑の東側に位置する第40号土坑の平面形状と規模が第48号土坑や第81号土坑に共通することに気付いたが、覆土を掘り込む調査は実施しないままとなった。第45(A・B)・46・47(A・B)・48・76号土坑の覆土、各土坑出土の土器内土壌は全て3mm方眼の篩による水洗選別を実施し、土器内土壌については1mm方眼の篩による水洗選別も実施した。

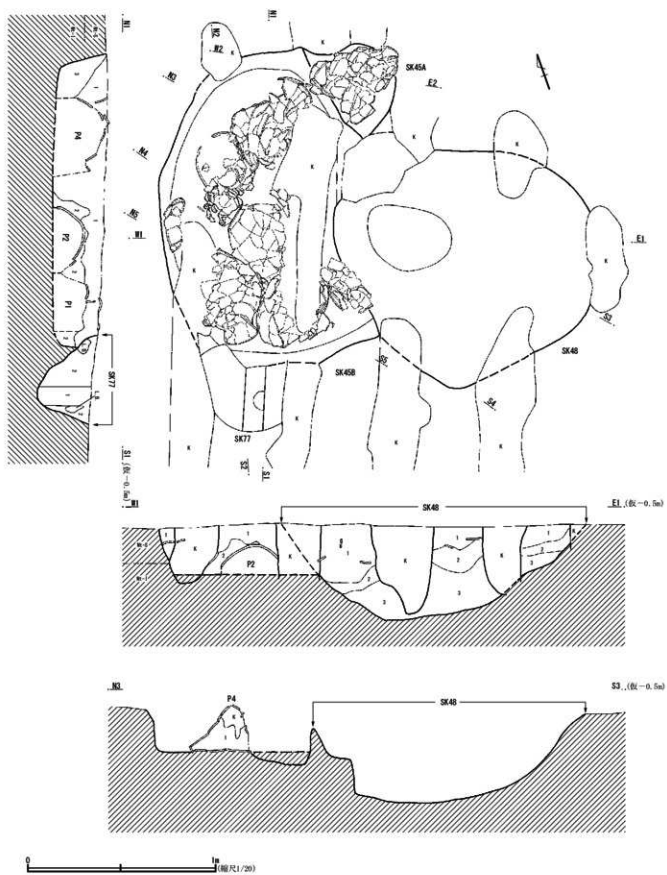


第28図 弥生時代の遺構

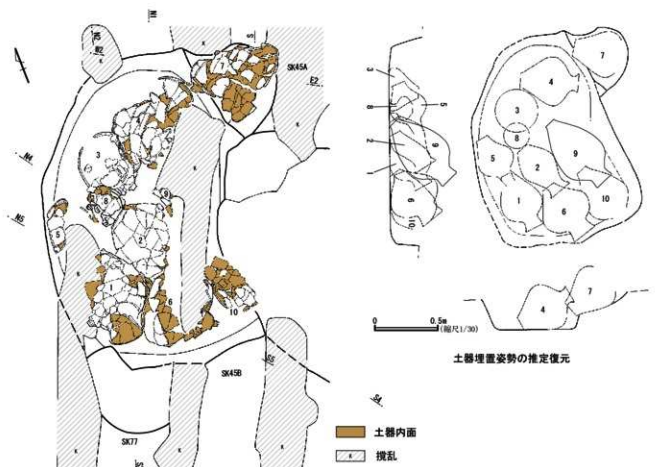
2 第45A号土坑

南北方向に走るゴボウ攪乱の隙間に、ローム層を掘り込み土器が埋置されたことと見られる状態が検出された。西側にはゴボウ攪乱を挟んで同じように土器(第45B号土坑土器4)が露出しており、これらが連続した1つの土坑とも考えられたので、第45B号とともに第45号として調査を進めた。土坑の底面に到達すると、土器が埋置された底面には段差があり、第45号土坑の南北ベルト中に重複を示す土層堆積が観察された。第45A号が第45B号の覆土第1層を掘り込んでおり、第45B号の底面は、第45A号土器7の下へと連続する(第30図W2-E2断面、図版5・5・6)。したがって、重複関係は、第45B号が旧く、第45A号が新しいことが確定した。

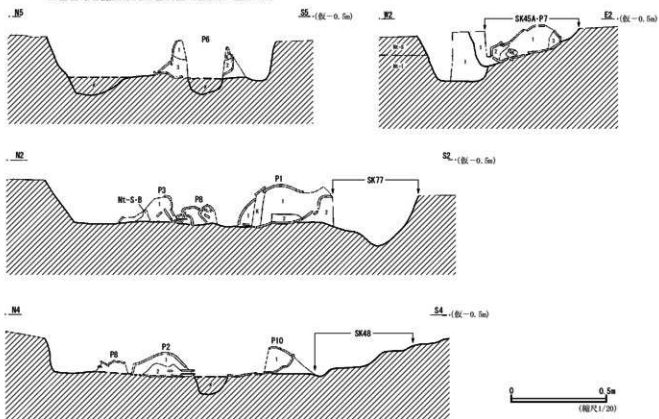
遺構 確認面で南北52cm、土層断面図(第30図W2-E2断面)で東西58cmを測り、略円形の平面形状が推定される(第29・30図)。最深部が土坑底面の西側にあり、確認面からの深さは18cmほどで、ここから東側の確認面ま



第29图 第45A·45B·48·77号土坑实测图(1)



土器番号と露出した土器内面 (色彩部が土器内面)



第30図 第45A・45B・48・77号土坑実測図(2)

第29・30図の土層説明

第45A号土坑 (SK45A) 堆積覆土

第1層：褐色土層 (Nt-S ブロック, Nt 粒を含む 締まり有り 粘性無し)

第2層：褐色土層 (第1層よりやや暗い)

第3層：ロームブロックと褐色土の混合土層 (締まり有り 粘性無し)

第45B号土坑 (SK45B) 堆積覆土

第1層：暗褐～褐色土層 (Nt 粒を多量に含む 締まり有り 粘性無し)

第2層：淡褐色土・橙色土の混合土層 (箇所により淡褐色土 (Nt-S), 橙色土 (Nt-I) のみの箇所があり, これに暗褐～褐色土が少量混じる 締まり有り 粘性無し)

第3層：暗褐～褐色土の混合土層 (橙色土 (Nt-I) ブロックを含む Nt-S 粒を含む 締まり有り 粘性無し)

第48号土坑 (SK48) 堆積覆土

第1層：暗褐色土層 (ローム粒を少量含む 締まり有り 粘性無し)

第2層：褐色土層 (ロームブロックを含み, 特に中央部に多い, ローム粒を多量に含む 締まり有り 粘性やや有り)

第3層：暗褐色土層 (第1層よりやや暗い, ロームブロックを少量, ローム粒を少量含む 締まり有り 粘性無し)

第77号土坑 (SK77) 堆積覆土

第1層：褐～暗褐色土層 (Nt 粒を含む 上部は締まり有り, 下部はやや硬い 粘性無し)

第2層：褐色土層 (Nt 粒・ブロックを多量に含む 全体的に締まり有り硬い 粘性無し)

では20°ほどの傾斜面が形成されている。覆土には七本桜スコリア及びロームのブロックを含み, 土坑を掘削した土で埋め戻されたことが考えられる。土器内土壌もこの特徴を有しており, 覆土が流入した状況である。

土器の出土状況 第45A号土坑に伴うと判断した遺物は1個体の土器(土器7)である。土坑の傾斜面に沿った状態で埋置されており, その姿勢は, 底部が北西, 口縁部が南東を向く。土坑最深部にある底部付近は保存されていたが, 胴部のほとんどは横位の下側が遺存するものの, 上側は攪乱を受け欠損している。残されたわずかな破片も原位置をとどめないものが多い。これより高い位置にあった口頸部も欠失している。

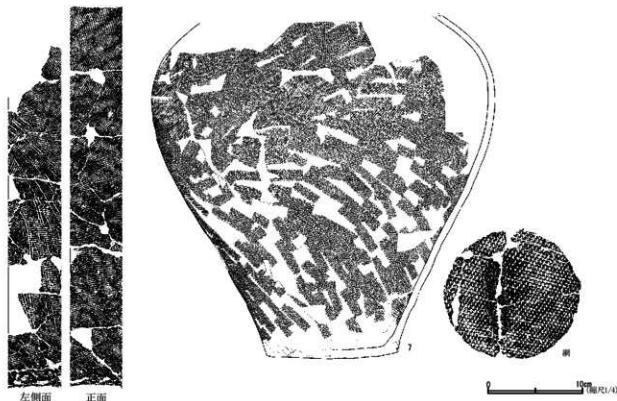
なお, 水洗選別により, 覆土からは1点(0.1g), 土器7内土壌からは2点(0.2g)の動物遺存体が検出されている(N-1参照)。

土器7(第31図) 土器7として取り上げた破片が接合し, 胴上部から底部までが復元された。破断面は摩滅しておらず, 欠損は攪乱によるものである。壺形土器であり, 器高は明らかでないが中型に相当する。計測値は残存高363mm, 胴径364mm(残存率42%), 底径139mm(残存率97%)。想定される器高に比して底部が大きく, 第1・2次調査を併せた土器の中では最大の底径である。器外面は撫で調整の後に, 単節斜縄文LRが施されている。一

部には条痕文の痕跡(左無面拓部)も観察される。縄文の施文方向は, 胴下部が左上り斜位, 最大径付近が横位, 胴上部が右上り斜位と変化する。底面痕跡は網代痕で, 中央の無文部は, 網代痕の上に粘土が付着することによる。これがひび割れ等の補修を目的とした貼付であったのかについては明らかにし得ない。器内面は全体が撫で調整。胎土には金雲母を僅かに含み, 赤色粒子が目立つ。焼成は良い。色調は器外面が褐～暗褐色, 器内面が褐～淡褐色を呈する。器内外面に炭化物の付着は認められない。

3 第45B号土坑

まずは条痕文の壺形土器(土器1)が横位に埋置された状態らしいことが捉えられ, ゴボウ掘乱の隙間に連続してこの土坑の覆土が広がっていた。北側では七本桜スコリア層, 西・南側では今市スコリア層を掘り込む土坑の端部が検出され, 東側には別な第48号土坑が重複することも捉えられていった。覆土を掘り進め, 東西ベルト(第29図 W1-E1断面)で土坑の断面と底面の状態を観察すると, 東側の第48号土坑との重複関係が明らかとなった。第45B号が旧く, 第48号が新しい。南北ベルト(第29図 N1-S1断面)を観察すると, 南側にまた別な第77号土坑との重複関係も明らかとなった。第45B号が旧く, 第77号が新しい。さらに, 北ベルト部分を掘り進めると, 第



第31図 第45A号土坑出土遺物 一土器7一

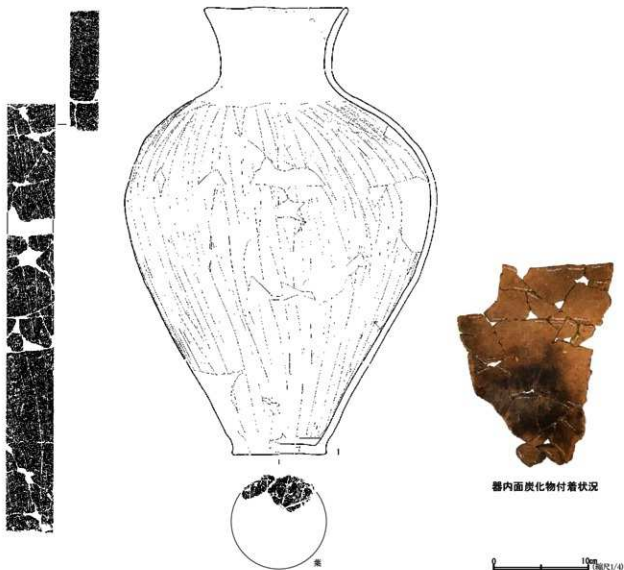
45A号と第45B号の重複関係も明らかになった。第45B号が旧く、第45A号が新しい。したがって、重複する4基の土坑の中では、第45B号が最も古いことになる。土坑の底面には、さらに別な土坑(第82号土坑)の重複を検出したが、その覆土は、第45B号の覆土から連続せず特徴が異なること、第45B号の土器の落ち込みも見られないことなどから、第45B号より古いことは確実で、縄文時代の土坑と判断し、覆土を半載した状態で調査を終了した。

遺構 確認面で南北164cm、東西の残存値110cmほどを測る。南東部に土器9・10を横位で埋置した空間があったとすれば東西130cmほどとなり、倒卵形に近い平面形状が推定される(第29・30図)。壁は、垂直に近い部分(第29図 N3-S3断面のN3方向)もあるが、概ね50～60°の角度で立ち上がる。確認面から底面までは深さ14～22cmで、底面はほぼ平坦である。底面の西側は今市スコリア層、東側はローム層が露出する。

土器の出土状況 第45B号土坑に伴うと判断した遺物は9個体の土器(土器1～6・8～10)である。土器1・2・5・6・9・10の6個体は、土坑南半部に横位の状態埋置されており、その姿勢は、底部が北、口縁部が南を向く。全ての土器個体が底部から口縁部までの完全形

であったとすれば、土器1・6・10の胴下部には土器5・2・9の口頸部がのせられていたはずであり、埋置の順序は、南側の土器1・6・10が先、北側の土器5・2・9が後と推定される。土器4は土坑北側に横位の状態埋置されており、その姿勢は第45A号土坑の土器7と同一方向で、底部が北西、口縁部が南東を向く。土器3・8は、これらの中間にあり、ともに底面を上に向けた逆位の状態埋置されていた。土器3は、口・胴上部を全く欠き、胴部最大径部分を擬口縁として、これが接地した状態である。擬口縁が平坦でないため、もともと南方向にやや傾いた姿勢であったと考えられる。小型の土器8についても、口縁部が底面に接地した状態を確認している(図版5-7)。埋置された土器の周囲に今市・七本桜スコリアのブロックを主体とした覆土第2・3層が堆積しており、土器群を固定するように埋め戻されたことが考えられた。その後に覆土第1層により土坑の全体が埋め戻されている。土器内土壌にも、覆土第1～3層の流入が観察され、まず土器の周囲にあった第2・3層が流入した後、第1層が流入したという順序が捉えられる。

なお、土坑内からは、縄文土器の破片とともに石器や動物遺存体も出土している。石器は、石鏃6点(図版14・第2表)、切目石錘1点、石棒破片3点(第26図15)など。動



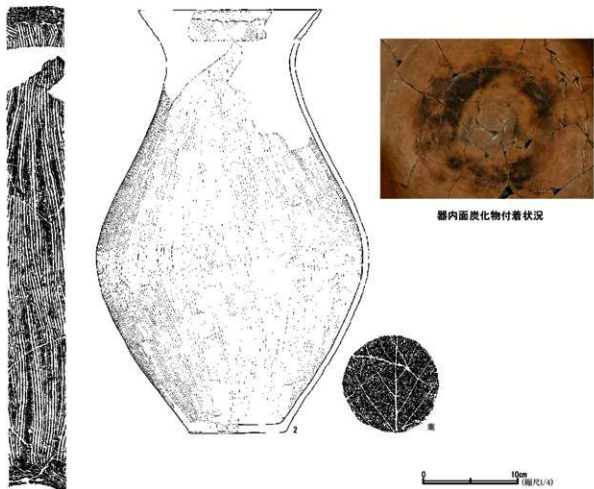
第32図 第45B号土坑出土遺物(1) — 土器1—

物遺存体は水洗選別も含めて、覆土及び土器内土壌から400点以上(30g以上)が検出された(N-1参照)。

土器1(第32図) 土器1として取り上げた大部分の破片に、土器6・8など別番号で記録した破片も接合し、口縁部から底部までが復元された。中型の壺形土器であり、計測値は器高472mm、口径153mm(残存率54%)、頸径117mm(残存率74%)、胴径331mm(残存率58%)、底径100mm(残存率20%)。平口縁で単純口縁。口唇の大部分は丸頭状で、一部は尖頭状を呈する。口頸部は磨き調整の無文。胴部は、撫で調整の後に、縦位を基本とした条痕文が施されている。条痕文は刷毛状で、左端の1条が太く施文されて沈線のように見える部分もある。これが下位から上位へ段階的に施文された。底面痕跡は木葉痕で、クズ型の表面の圧痕が観察される。器内面は全体が撫で調整、肩

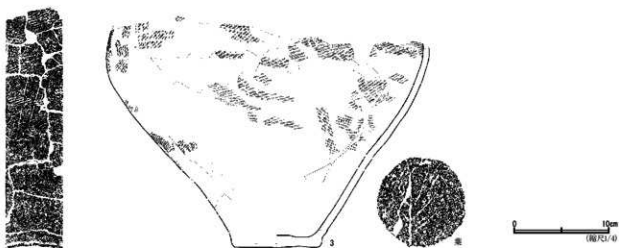
部に成形の積上痕を僅かに残す。胎土には、丸みを帯びた石英礫を含むが、宿尻遺跡に特徴的な「多量」(鈴木編2022)ではない。色調は、器外面の上部が黒色、下部が暗褐～淡暗褐色、器内面が淡暗褐色を呈する。器外面の高さ12-22cmの範囲、器内面の高さ2-13cmの範囲に炭化物の付着が認められる。器外面には12cm以下にも雨垂れ状の炭化物が付着している。器内面に種子状の圧痕を見出したが、レプリカ法による観察では同定に至っていない(N-2参照)。

土器2(第33図) 土器2として取り上げた大部分の破片に、土器10など別番号で記録した破片も接合し、口縁部から底部までが復元された。但し、口縁部と頸部以下は接合しない。中型の壺形土器であり、計測値は器高(推定)447mm、口径192mm(残存率32%)、頸径136mm(残



器内面炭化物付着状況

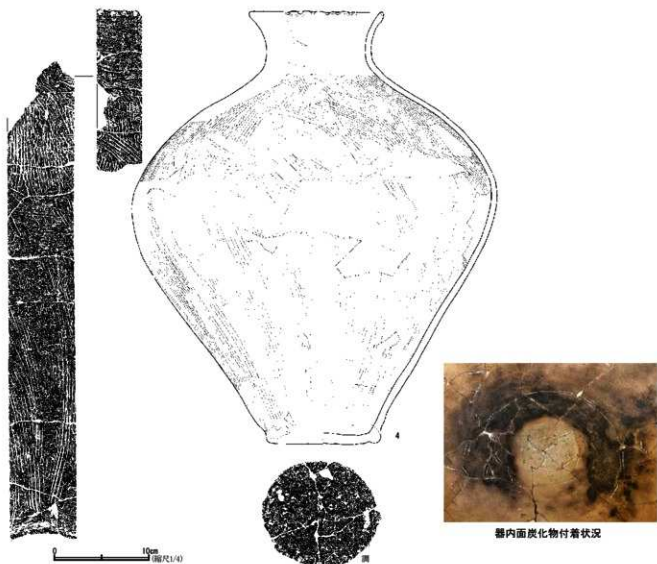
第33図 第45B号土坑出土遺物(2) —土器2—



第34図 第45B号土坑出土遺物(3) —土器3—

存率21%), 胴径299mm(残存率100%), 底径102mm(残存率100%)。平口縁で複合口縁。口唇は角頭状に削り調整, 口縁部にも削り調整の擦痕が残る。頸-胴部は, 撫で調整の後に, 縦位を基本とした条痕文が施されている。条痕

文は刷毛状。下位から上位へと段階的に施文されており, 個々の条痕文も砂粒が移動した軌跡は下から上に向けての施文を示している。底面痕跡は木葉痕で, クズ型の裏面の圧痕が観察される。器内面は全体が撫で調整。焼成



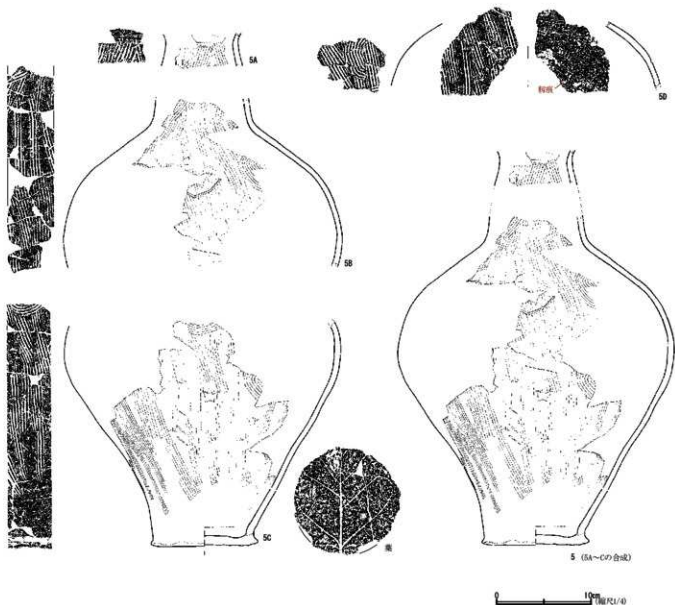
第35図 第45B号土坑出土遺物(4) —土器4—

は良い。色調は、器外面が淡褐・暗褐色、器内面が淡褐色を呈する。器内外面の高さ3.5-18cmの範囲に炭化物の付着が認められる。

土器3 (第34図) 土器3として取り上げた大部分の破片に、別番号で記録した破片も接合し、胴部から底部までが復元された。中型の壺形土器と推定されるが、上端の破断面は摩滅しており、胴部最大径付近を擬口縁とした鉢形の形状で再利用されたと考えられる。計測値は残存高(再利用の器高)244mm、胴径(ほぼ再利用の口径)341mm(残存率89%)、底径90mm(残存率100%)。再利用の擬口縁は平口縁であっても不整に波打つ。胴部には、無節斜縄文しが施されており、施文後の撫で調整により、縄文は部分的な施文に見える。その施文方向は、胴下部が右下り

斜位、最大径付近が横位と変化する。底面痕跡は木葉痕で、クズ型の裏面の圧痕が観察される。器内面は全体が撫で調整。胎土には、骨針を多量に含む。焼成の良否によるのか、軟弱な状態の部分も多い、器外面の上部が暗褐色、下部が褐～淡褐色、器内面が褐～淡褐色を呈する。器外面には僅かに炭化物の付着が認められ、雨垂れ状の部分もある。器内面は一部が暗褐色に変色している。

土器4 (第35図) 土器4として取り上げた大部分の破片に、別番号で記録した破片も接合し、口縁部から底部までが復元された。中型の壺形土器であり、計測値は器高457mm、口径143mm(残存率32%)、頸径101mm(残存率45%)、胴径387mm(残存率36%)、底径(楕円)111-117mm(残存率100%)。平口縁で単純口縁。口唇部は、棒状工具に

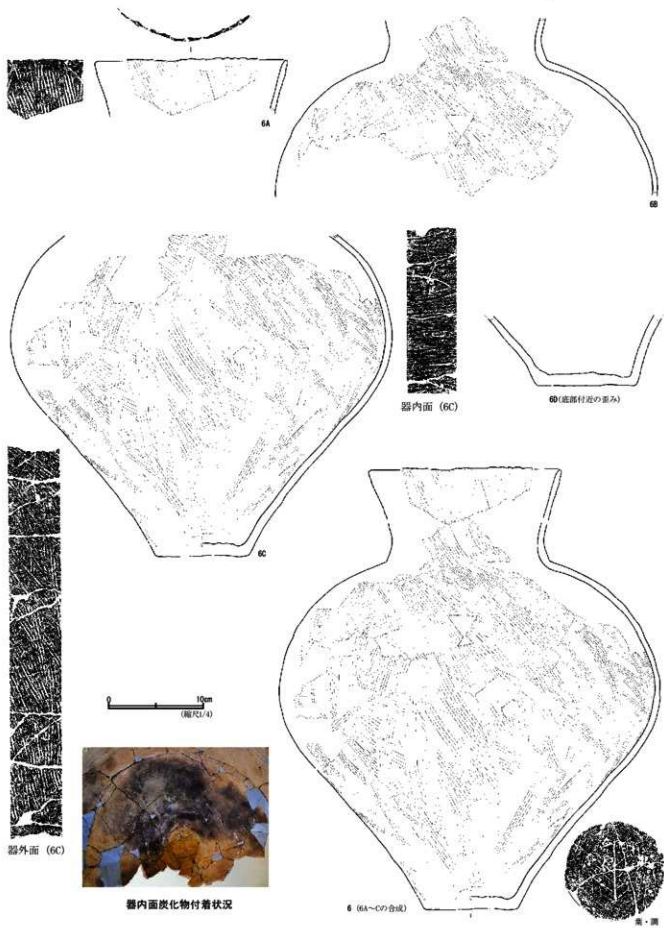


第36図 第45B号土坑出土遺物(5) —土器5—

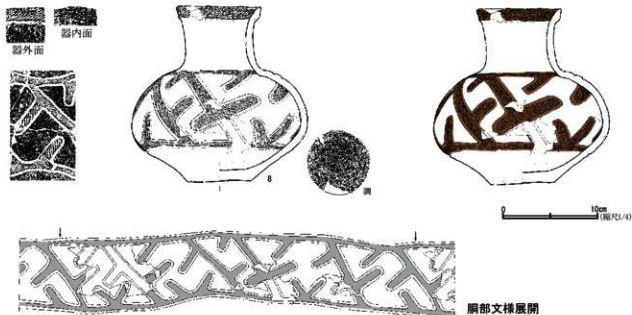
よる刺突文が施され、微波状となっている。頸部は横位の撫で調整であり、胴部の条痕文の上端を消して窪む部分もある。胴部は、撫で調整の後に、条痕文が施されている。条痕文は刷毛～櫛歯状。下位から上位へと段階的に施文されており、その施文方向は、胴下部が疎らに縦位、最大径付近が疎らに横位、胴上部が密に縦位・左上り斜位に変化する。底部付近には、成形の歪みを補修した痕跡が観察された。具体的には、潰れて膨らんだ胴下部を押し戻したと見られる。これに伴い底部が楕円形になったらしい。底面及び器内面の全体は撫で調整。焼成は良い。色調は、淡褐～淡暗褐色を呈する。器外面の高さ12-30cmの範囲、器内面の高さ4.5-20cmの範囲に炭化

物の付着が認められる。器内面の炭化物を採取し、放射性炭素年代測定を実施した(未報告)。

土器5 (第36図) 土器5として取り上げた大部分の破片に、土器8など別番号で記録した破片も接合し、頸部から底部までが復元された。但し、頸上部(SA)、頸下-胴上部(SB)、胴下-底部(SC)は接合せず、それぞれの部分ごとに実測しており、全体の復元は推定による。中型の壺形土器であり、計測値は残存高387mm(推定)、頸径96mm(残存率11%)、胴径294mm(残存率12%)、底径114mm(残存率87%)。頸部最小径の括れが胴部との境界付近ではなく、口縁部との境界にあることに大きな特徴を認める。括れから開く口縁部は一部が残り、その部分は無文



第37図 第45B号土坑出土遺物(6) —土器6—



第38図 第45B号土坑出土遺物(7) — 土器8—

である。頸・胴部は、撫で調整の後に、縦位を基本とした条痕文が施されている。条痕文は、7条以上を同時施文する工具によるもので、この工具の一部が器面にあたることで少数条の条痕文も施文されている。下位から上位へと段階的に施文されており、個々の条痕文も砂粒が移動した軌跡は下から上に向けての施文を示している。胴上部と下部には、条痕文が弧状に施文された箇所がある。これがどのような配置であったのかは明らかにし得ない。また、肩部には、単線による線描の一部も観察されたが、これも全体の形象は明らかでない。底面痕跡は木葉痕で、クズ型の裏面の圧痕が観察される。器内面は全体が撫で調整。胎土には、骨針を少量含む。焼成は良い。色調は、器外面が褐～暗褐色、器内面が褐～淡褐色を呈する。炭化物の付着は認められず、器内外面の下部には橙色に酸化した鉄分が付着している。器内面(5D)に見出した種子状の圧痕は、レプリカ法による観察で「イネ(粳)」と同定された(N 2参照)。

土器6 (第37図) 土器6として取り上げた大部分の破片に、土器5など別番号で記録した破片も接合し、口縁部から底部までが復元された。但し、口・頸部(6A)、頸下・胴上部(6B)、胴・底部(6C)は接合せず、それぞれの部分ごとに実測しており、全体の復元は推定による。中型の壺形土器であり、計測値は器高467mm(推定)、口径204mm(現存率18%)、頸径160mm(現存率15%)、胴径404mm(現存率40%)、底径(楕円)101-105mm(現存率92%)。平口縁

で単純口縁。口唇部は、間隔をあげた押圧により微波状となる。口・胴部は、撫で調整の後に、縦位を基本とした条痕文が施されている。条痕文は貝殻条痕状。下位から上位へと段階的に施文されており、個々の条痕文も砂粒が移動した軌跡は下から上に向けての施文を示す。胴下部の左上り斜位の条痕文は縦位より前に、胴上部の右上り斜位の条痕文は縦位よりも後に施文された。底面痕跡は木葉痕で、トチノキ型の裏面の圧痕が観察される。木葉痕は、削り・撫で調整により周辺が消失しており、これは、底面が楕円形であることとともに、底部付近の成形の歪み(6D)に関連したものかもしれない。器内面は全体が撫で調整、肩部にも成形痕はほとんど残らない。胴上部は横位に調整され、木理状の工具痕跡も観察される。胎土には、赤色粒子が目立つ。色調は、器外面が褐～暗褐色、器内面が淡褐色を呈する。器外面の高さ12.5-32cmの範囲、器内面の高さ2.5-22.5cmの範囲に炭化物の付着が認められる。器外面には雨垂れ状に付着する部分もある。

土器8 (第38図) 土器8として取り上げた大部分の破片に、別番号で記録した破片も接合し、口縁部から底部までが復元された。小型精製の壺形土器であり、計測値は器高186mm、口径90mm(現存率91%)、頸径72mm(現存率100%)、胴径186mm(現存率72%)、底径66mm(現存率86%)。平口縁で複合口縁。口縁部には単節斜縄文LRが施される。器内面の極一部にもこれが施文されている。頸部か

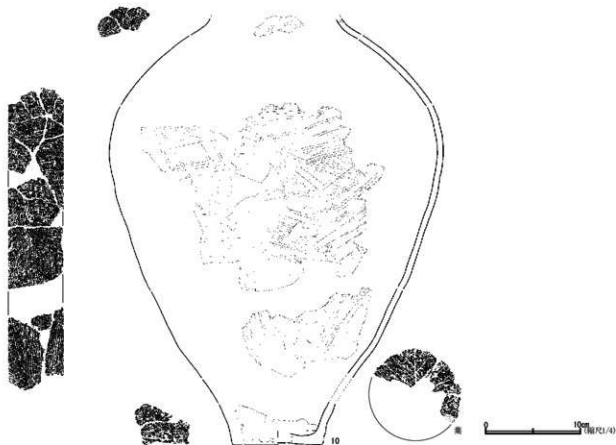


第39図 第45B号土坑出土遺物(8) —土器9—

ら胴部、さらに底面の無文部は磨き調整。胴部には沈線区画の磨消縄文で文様が構成される。5単位となる右下りの縄文帯が上下の縄文帯を連結し、各縄文帯が分岐した「ヒトデ文」の形象である。区画沈線内を含む縄文部分は赤彩されている。器内面は、全体が撫で調整、口縁部の一部のみ磨き調整が見られる。胎土には、骨針を含む。焼成は良い。色調は、褐～赤褐色を呈する。器内外面に炭化物の付着は認められない。

土器9 (第39図) 土器9として取り上げたのは底部付近の破片であったが、土器2など別番号で記録した破片に多数の同一個体を見出した。口・胴上部は、第48号

土坑の掘削で破壊されており、胴・底部の大部分もゴボウ耕作による攪乱で遊離したと見られる。底部、胴部、頸部、口・頸部は接合せず、それぞれの部分ごとに実測しており、全体の復元は推定による。また、第45B号土坑内から出土した口頸部の破片は残存率がかなり低いことから、第48号土坑の同一個体の破片に復元された口径・頸径を採用した。大型の壺形土器であり、計測値は器高630mm(推定)ほど、口径154mm(第45B号土坑の残存率1%)、頸径138mm(第45B号土坑の残存率12%)、胴径382mm(残存率2%)、底径93mm(残存率10%)。平口縁で複合口縁。口縁下は凹線状の撫で調整で、複合口縁の突出が強調されている。



第40図 第45B号土坑出土遺物(9) —土器10—

。口縁から胴部まで撫で調整により全体が無文である。胴部と底部の境界に相当する突出部には、摩滅が見られる。底面痕跡は木葉痕で、トチノキ型の裏面の圧痕が観察される。器内面は全体が撫で調整、頸・肩部には篋状工具による撫で調整が幅広い条痕のように見える。焼成は良い。色調は淡褐色を呈する。器内外面に炭化物の付着は認められない。

土器10 (第40図) 土器10として取り上げた大部分の破片に、土器6などの別番号で記録した破片も接合し、胴部が復元された。また、「覆土・攪乱」として一括で取り上げた破片の中から、特徴的な胎土が一致する頸部付近、底部の破片が抽出された。器高は600mm前後と推定され、大型の壺形土器である。胴径354mm(残存率22%)、底径96mm(残存率50%)。胴部には、縦位の後に横位という順序で、櫛歯状の条痕文が施されている。底面痕跡は木葉痕で、トチノキ型の裏面の圧痕が2重に観察される。器内面は全体が撫で調整。胎土には、銀(白)雲母を極少量含む。焼成の良否によるのか、全体的にやや脆弱である。色調は、器外面が淡褐～暗褐色、器内面が淡褐色を



第41図 第45号土坑出土遺物

呈する。器内外面に炭化物の付着が認められる。器内面の炭化物は、器外面より下位に付着し、部分的である。

土器11 (第41図) 埋置された状態で検出された土器1~10とは異なり、覆土中から出土した。弥生土器の底部破片。出土位置は「北ベルト」と記録されている。土器4・9に近接するが、これらの底部ではない。南北ベルトはゴボウの攪乱を避けて設定されており、覆土中に含まれていたものと見られるが、土器9の北側に攪乱が膨らんでいることから攪乱による混入を全く否定することはできない。底径は90mm(残存率32%)。器内外面ともに篋状工具による撫で調整で、工具止め痕が残されている。器内面に突出するのは、成形に伴う粘土の細かな塊

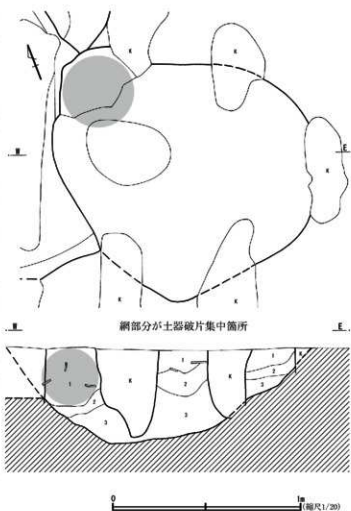
(所謂「粘土クス」)が貼り付いたものと考えられた。甕形土器などの器種では特に、成形時に内部に落下した粘土塊を取り出すことが困難で、また無理に取り出す必要もないと見られることから、そのまま焼成されたのであろう。これは、「焼成粘土塊」の生成を示唆する。また、粘土塊は器内面の撫で調整後に貼り付いており、段階的な成形と調整が繰り返されて土器が製作されていることを示しているとも考えられた。底面痕跡は木炭痕で、クス型の裏面の圧痕が観察される。焼成は良い。色調は、器外面が褐～暗褐色、器内面が灰褐色を呈する。器内外面に炭化物の付着は認められない。

以上の9個体(土器1~6・8~10)を土坑底面に埋置されていた土器、1個体(土器11)を覆土中の土器として報告した。胴部に条痕文が施文された土器が主体で、接合に至らない多くの破片も出土している。条痕文のみ的小破片の全てについて厳密な個体識別は難しく、これらと全く別の個体が混在している可能性は否定できない。

4 第48号土坑

第45B号土坑の東側に重複する土坑である。第45B号と重複する付近の確認面に、土器の破片が集中して検出されていたことから、この部分を掛けるように東西ベルトを設定して堆積土層を観察した(第29図W1-E1断面)。ゴボウ堀乱により第45B号の覆土との関係は捉えられなかったが、第45B号の底面を第48号が掘り込んでおり、第45B号が旧く、第48号が新しいことが確定した。

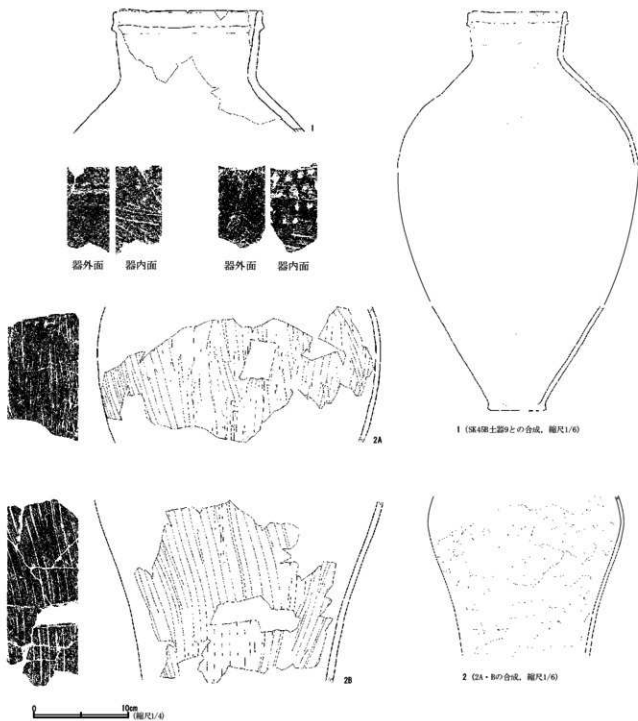
遺構 上端での平面規模と形状は、東西140cmほど、南北125cmほどの楕円形である(第29図)。最深部は中央でなく西側に片寄り、確認面からの深さは50cmを測る。比較的平坦なことから底面として捉えたのは、東西50cm・南北30cmほどの楕円形の範囲である。この底面から30°ほどの傾斜で東西の壁が立ち上がる。北壁のみ60°ほどの急角度の部分が見られた。覆土は3層に分けられ、第2層としたロームブロックを含む褐色土が中層として明瞭に区分された(第29図W1-E1断面)。これが土坑の全体を覆うように堆積する。第3層にもロームブロックが含まれている。第2・3層は、掘削の直後に土坑が埋め戻されたことを示しており、土坑の規模と形状からも墓塚であることが考えられた。しかも、第2層の存在は、再葬のための掘り返しを否定していることから、



第42図 第48号土坑遺物出土位置

土壇墓と捉えられる。

土器の出土状況 遺構確認面で検出されていた土器は、一部が土層断面に露出し、覆土第1層に包含されることが捉えられた(第42図)。これを記録した後、東西ベルト部分から北側を掘り進めたところ、小破片は多数が密集するものの、土器の造形的な位置関係を保つような状況はついに検出されなかった(図版6.3)。第45B号を掘り込んでいることから、そこに埋設されていた土器の破壊は想定されたが、現地では詳細な個体識別はできなかった。整理が進むと、ここには大きく2個体の土器が含まれることが明らかとなった。土器1は、大型で無文の甕形土器であり、これは法量や文様が一致し、器内面に特徴的な撫で調整の痕跡が残されることから、第45B号の土器9と同一の個体と確認された。一方の土器2は、条痕文のみの胴部であったことから、第45B号の土器1・2・4・5・6・10と同一個体の可能性を検討したが、これらとは別の個体と判断された。特に、第48号に接して検出



第43図 第48号土坑出土遺物

された土器10とは、条痕文の施文具が決定的に異なる。さらに、条痕文の特徴が共通する第46号土坑の土器1についても検討したが、これともまた別の個体と判断された。したがって、検出されていた再葬墓の土器とは、全く別の個体であることが明らかとなった。土器1・2の破片が集中する部分には、土坑の北壁が膨らみ僅かな段を有していた。ここを南北に縦断する土層断面は記録できなかったが、この部分には単体の土器を埋置した再葬墓が形成されていたこと、それが第48号の掘削によりほと

んど破壊され、土器は完全に破砕されて掘り上げられたことが考えられた。僅かに残されていた再葬墓の覆土を第48号の覆土と区別することなく掘り進めたことで、第48号の北壁は、その再葬墓の部分が膨らむ形状になったのであろう。この部分を「第48B号土坑」として、単体の土器を埋置した再葬墓であったことを想定しておきたい。第45B号の土器9、第48B号の土器2は、その全てではないにしても、掘り上げた破片が集中して第1層中に残されたことは、その土器の性格が認知されていたの

ではないかと考えられる現象である。特に土器2については、全壊に伴い土器内に収められていた人骨が振り起こされたことまで想定すべきかもしれない。

土器1 (第43図) 第45B号土器9の同一個体と識別された。第45A号から出土した破片1点が接合して、口頸部が復元されている。その計測値は口径154mm(残存率34%)、頸径138mm(残存率24%)。口縁部の成形には歪みが見られる。器内面は口縁部が横位の撫で調整、頸部から肩部に幅広い条痕のように見える撫で調整があり、肩部には成形の積上痕と指頭による押圧の痕跡も残る。

土器2 (第43図) 第48号として取り上げた大部分の破片に、第45B号から出土した一部の破片も接合し、胴部が復元された。但し、胴中部(2A)と胴下部(2B)は接合せず、それぞれの部分ごとに実測しており、全体の復元は推定による。中型の壺形土器であり、計測値は残存高さ254mm(推定)、胴径300mm(残存率24%)。器表面の粘土が上から下へと覆いかぶさるような状態が、最大径部分から5cmほど下の位置に観察され、これは、胴上部の成形に伴い下部との連続を調整した痕跡と考えられた。胴部は、撫で調整の後に、縦位を基本とした条痕文が下位から上位へと段階的に施文されている。櫛歯状工具による条痕文で、条が沈線文のように太い。器内面は全体が撫で調整。胎土には、骨針を少量含む。焼成は良く硬質である。色調は、器外面の上部が淡褐色、下部が暗褐色、器内面が淡褐色を呈する。最大径より10cm下を境界として、これより上の器外面、下の器内面に炭化物の付着が認められる。

5 第77号土坑

第45B号土坑の南北セクションにおいて、南側に重複が確認された(第29図N1-S1断面)。第45B号が旧く、第77号が新しい。

遺構 確認できた上端での平面規模と形状は、南北の47cmが確定で、東西が60cmほどの楕円形かと想定される。最深部は中央でなく南側に片寄り、確認面からの深さは28cmを測る。比較的平坦なことから底面として捉えたのは、直径10cmほどと推定される円形の範囲である。この底面から40°ほどの傾斜で北壁が、80°ほどの急角度の傾斜で南壁が立ち上がる。覆土は2層に分けられ、第1層は、柱痕に堆積したものと考えられた。その

周囲に堆積する第2層の褐色土層は、今市・七本桜スコリアのブロックを多量に含み、柱を固定するように埋め戻して形成された。時期を決定する遺物は出土しなかったが、第45B号より新しいことから縄文時代の遺構ではない。また、覆土の状態は、古代・中世の遺構とも考え難い。再葬墓に関連した弥生時代の遺構であるならば、墓標の掘り方が想像されてくる。その墓標は、直径10cmほどの木製であったと考えられよう。この土坑は完掘せず、セクションラインより東側を保存して埋め戻した。

6 第46号土坑

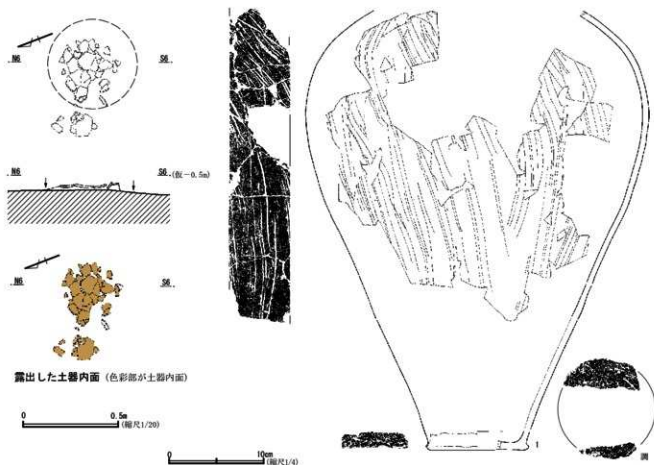
今市スコリア層が露出する確認面において、ほとんどの破片が器内面を上に向けた状態で検出された(第44図)。多くの破片が集合する東側の土器の周囲には、暗褐色土の堆積も観察されたが、堆積が薄く残されていただけで、土器の調査に伴い消失した。西側の破片は、一部が攪乱により移動したものと考えられる。

土器の出土状況 土器1は横位の状態で埋置されていたと考えられる。東側の胴部破片は、底部方向が西、口縁部方向が東である。底部破片は、西側の破片とともに攪乱で遊離したものと見られる。

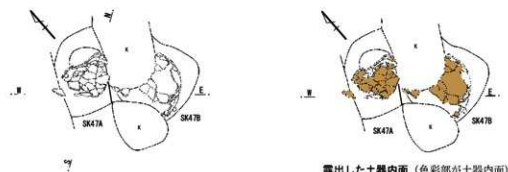
土器1 (第44図) 第46号として取り上げた破片が接合し、胴部が復元された。胴部と底部は接合せず、それぞれの部分ごとに実測しており、全体の復元は推定による。大型の壺形土器であり、計測値は胴径364mm(残存率12%)、底径108mm(残存率37%)。胴部は、撫で調整の後に、縦位を基本とした条痕文が下位から上位へ段階的に施文されている。櫛歯状工具による条痕文で、条が沈線文のように太い。歯数は7本と推定されるが、全てが施文された部分は少ない。底面は削り調整で、沈線のように見えるのは削りにより生じた擦痕である。器内面は全体が撫で調整。胎土には、金雲母を含む。焼成は良い。色調は、器外面が暗褐色・黒色、器内面が褐色を呈する。器外面の高さ14-23cmの範囲に南垂れ状の炭化物、器内面の高さ12-17.5cmの範囲に炭化物の付着が認められる。

7 第47A号土坑

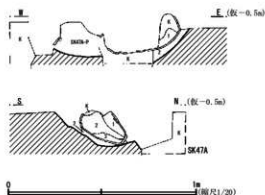
第45A号土坑から50cm程東方向に所在する。確認面においては、ゴボウの攪乱を挟んで南東側に露出していた土器(第47B号土坑土器2)と合わせて一つの土坑としてい



第44図 第46号土坑実測図・出土遺物



露出した土器内面 (色彩部が土器内面)



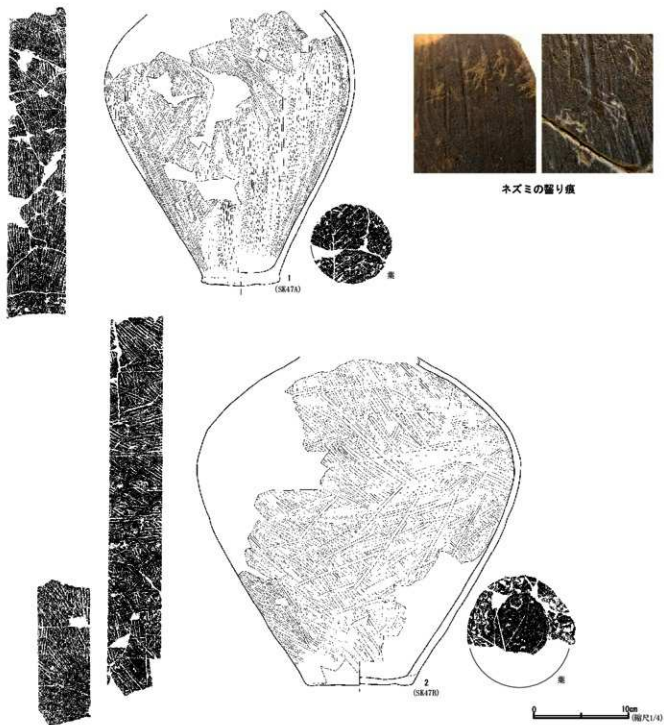
第47A号土坑(SK47A)堆積覆土

- 第1層: 暗褐色土層 (ローム粒を少量含む 締まり有り 粘性無し)
- 第2層: 褐色土層 (ローム粒を多量に含む 締まり有り 粘性無し)
- 第3層: 暗褐色土層 (ローム粒を少量含む 締まり有り 粘性無し)

第47B号土坑(SK47B)堆積覆土

- 第1層: 褐色土層 (ローム粒を含む 締まり有り 粘性無し)
- 第2層: 褐色土層 (ローム粒を多量に含む)

第45図 第47A・B号土坑実測図



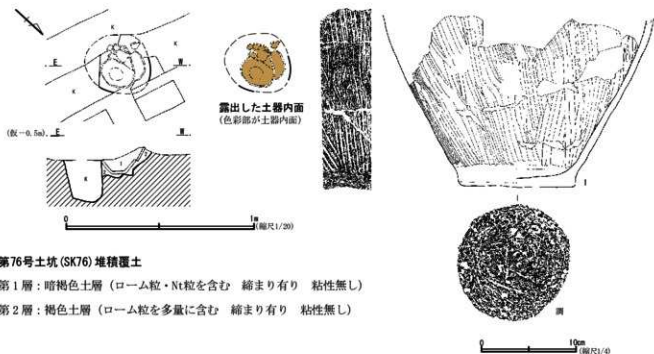
第46図 第47A・B号土坑出土遺物

たが、土坑底面に高低差があったことから、別々の土坑であると判断した。ただし重複関係については、攪乱により土層での観察ができず、確定できなかった。

遺構 観察された形状は、確認面で南北46cm、土層断面図で東西の残存値35cmを測り、略円形の平面形状が推定される(第45図)。確認面からの深さは18cmほどで、南側で約40°の傾斜の立ち上がりを確認した。覆土はローム粒を多量に含む褐色土が、土器の下層と土器内

部で確認されていることから、土坑を掘削した際の土がそのまま戻され、その覆土が土器内部に流入したと考えられる。

土器の出土状況 第47A号土坑に伴う土器は1個体であり、土坑傾斜面に口縁部をやや上に向けた状態で立てかけられていた。このため上部にあった口縁部から頸部が攪乱を受けて欠損している。口縁部が西、底部が東方向に向く。



第76号土坑 (SK76) 堆積覆土

第1層：暗褐色土層（ローム粒・Nt粒を含む 締まり有り 粘性無し）

第2層：褐色土層（ローム粒を多量に含む 締まり有り 粘性無し）

第47図 第76号土坑実測図・出土遺物

土器1 (第46図) 第47A号土坑の土器として取り上げた土器片が接合し、胴部から底部までが復元された。攪乱により欠損しており器高は不明だが、中型の壺形土器と推定される。計測値は残存高290mm、胴径265mm（残存率53%）、底径83mm（残存率100%）。器外面は撫で調整の後に条痕文が施されている。刷毛状の条痕が、縦位を基本として下位から上位に段階的に施文されている。胴部最大径の辺りでは斜位の条痕が増え、やや乱雑になる。施文の方向も、胴下位は下から上を基本としているが上位では逆方向の施文も混じる。底面はトチノキ型の本葉痕である。器内面は全体的に丁寧に撫で調整がされており、積上痕はほとんど確認できない。色調は、器外面は淡褐色～黒褐色、器内面は淡褐色を呈する。焼成不良のため、全体的に脆弱で器外面が摩耗している。複数箇所ネズミによる齧り痕が見られる。

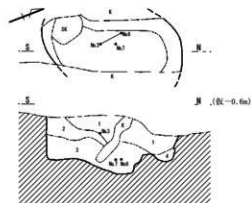
8 第47B号土坑

第47A号土坑南東側に重複した状態で位置している。重複する箇所は大部分が攪乱されているが、残存部分から、第47B号土坑の遺構底面の方がやや低く推定される。

遺構 確認面で南北40cm、土層断面図で東西45cmの残存値を測り、略円形の平面形状が推定される（第45図）。東側で約50°の傾斜の立ち上がりを確認した。覆土は、ローム粒を多量に含む褐色土が確認されている。

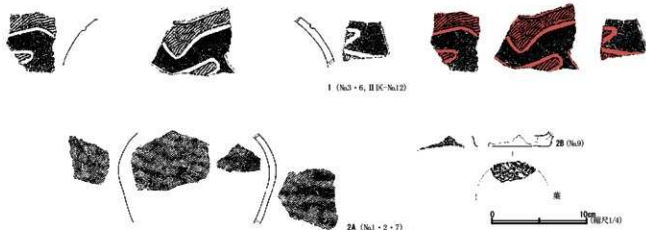
土器の出土状況 第47B号土坑に伴う土器は1個体であり、土坑傾斜面に胴部がよりかかるような状態で横位で埋置されていた。このため口縁部から頸部が攪乱により欠損し、さらにゴボウの耕作痕により西側半分も欠損している。

土器2 (第46図) 第47B号土坑の土器として取り上げた土器片が接合し、胴部から底部までが復元された。攪乱による欠損で器高は不明だが、中型の壺形土器と推定される。計測値は残存高348mm、胴径344mm（残存率34%）、底径112mm（残存率42%）。器外面は積上痕を残した状態から刷毛状の条痕文が施されている。下位から上位に段階的に施文されており、施文の方向は、胴下位は縦位、胴部最大径付近が横位を主にしており、肩部より上は縦位に横位の間隔をあけて施文されている。底面はウリノキ型2葉分の本葉痕である。器内面は全体的に丁寧に撫で調整がされている。胎土には丸みを帯びた石英粒子を少量含む。焼成は良い。色調は、器外面が褐色～黒



第81号土坑(SK81)堆積層土

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒，Nt粒を含む 締まり有り 粘性無し）
 第2層：淡褐～褐色土層（ロームブロック・粒を多量に含む 締まり有り 粘性無し）
 第3層：褐色土層（暗褐色土がシミ状に混じる 締まり有り 粘性無し）
 第4層：褐色土層（暗褐色土を含まない 締まり有り 粘性無し）



第48図 第81号土坑実測図・出土遺物

褐色，器内面が褐色を呈する。器内面の高さ2.9cmの間に帯状の炭化物が付着している。器外面にも一部，雨垂れ状の炭化物が付着している。

9 第76号土坑

I区とII区の境界で，南北方向と東西方向とに走るゴボウ攪乱の交わる位置に土坑の一部が検出された。

遺構 (第47図) 土坑は，北側と東側の一部が僅かに残存しており，残存部と出土土器の範囲から直径35cmほどの，ほぼ円形の土坑と推測される。遺構確認面の深さは16cmで，底面は平坦ではなく凹凸がみられた。

土器の出土状況 土器は正位の状態を確認され，攪乱により口縁から胴中部にかけては破壊されており，胴下部から底部にかけて残存していた。土器内にはローム粒とNt粒を含む暗褐色土が堆積していた。

土器1 (第47図) 正位で出土した土器の他，土器に近接して検出された，攪乱により移動してしまっと思

われる土器片も接合し，胴下部の一部から底部までが復元された。器形は胴部の広がりから中型の甔形土器と考えられる。計測値は残存高180mm，最大径288mm（残存率33%），底径120mm（残存率100%）。胴部は，縦位を基本とした条痕文が施されており，櫛歯状工具を使用している。条線は沈線のように太く，底部近くでは下位から上位に，残存胴上部では下方向に条線が細くなり払ったような痕跡があることから，上位から下位に施文していると考えられる。底部と胴部の境には，指で一周撫でるような痕跡がみられ，その部分には施文が及んでいない。底部は，全面調整されており，円を描くように調整が行われている。器内面は全体が撫で調整されており，土器焼成時の黒斑がみられる。胎土には，白色小粒・灰色小粒が多く含まれている。焼成は良く硬質である。色調は，器外面が暗褐色で，一部に淡褐色がみられる。器内面は淡褐色を呈する。

10 第81号土坑

第45・46・47・76号土坑に4方向を囲まれた空間に位置する。南北方向に走るゴボウ掘の隙間に、土坑の一部が検出された。確認には、土器が露出していない。

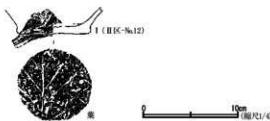
遺構 上端での規模と形状は、南北方向の74cmが確定で、東西は30cmが残存し、おそらくは楕円形と推定される(第48図)。底面の西側には壁の傾斜の一部が残されており、この方向へ大きく広がることはない。南北61cmで、東西は22cmが残存する範囲を底面と捉えたが、平坦ではなく凹凸が見られた。底面南西部のピット(SK)は、縄文時代のもつと判断された。覆土は4層に分けられ、第2層としたロームブロックを含む褐色土が中層として明瞭に区分された。2個体の土器の破片がこれより上位の第1層、下位の第3層に包含されていた。

土器1(第48図) 2点の破片が出土し、Ⅱ区の遺構外からも同一個体の破片1点が抽出された。また、過去に地表面から採集されていた2点の破片(第11図1・2)も同一個体と見られる。中型精製の甕形土器であり、残存部での最大径は280mm(残存率10%)ほどと推定された。胴部には、沈線区画の磨消縄文で文様が構成される。これは、縄文帯が分岐する「ヒトデ文」の形象であろう。区画沈線内を含む縄文部分は赤彩されている。器外面は無文部は磨き調整、器内面は撫で調整。焼成は良い。色調は、器外面が褐・黒色、器内面が灰褐色を呈する。器内外面に炭化物の付着は認められない。

土器2(第48図) 5点の破片が出土した。破片どうしは接合しない。小型の甕形土器であり、計測値は胴径166mm(残存率23%)、底径78mm(残存率21%)。胴部は、撫で調整の後に、単節斜縄文LRが横位に施文されており、上下に間隔を空けた施文も見られる。底部は外側への突出が撫で調整で平坦化されている。底面痕跡は木葉痕で、カシワ型の裏面の圧痕が観察される。器内面は、全体が撫で調整、肩部に成形の積上痕を僅かに残す。焼成は良い。色調は、器外面が褐・暗褐・黒褐色、器内面が褐色を呈する。器内外面に炭化物の付着は認められない。

11 遺構外

遺構外から出土した弥生土器については、土器を包含する遺構から掘乱により遊離したものもあるが、条痕文のみの胴部の破片について、同一個体を識別することは



第49図 遺構外出土遺物

難しい。口縁部と底部に限定して検討すると、明らかに別個体と識別されたのは、底部の1点のみであった。泉坂下遺跡の第1次調査(鈴木2011)では、狭い調査面積にもかかわらず、口縁部と底部にそれぞれ複数個体が識別されたのと比較して、この点が大きく異なる。遺構外の底部(第49図1)は、Ⅱ区東側で出土しており、これは再葬墓等の弥生時代遺構が検出された範囲に合致する。遺構の上部に包含されていた可能性も考えられよう。対して、Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ区には、別個体と識別される土器が抽出されていない。これは、第1次調査区的位置を含めて再葬墓群の分布を検討する手掛かりの1つになると考えられた。

土器1(第49図) Ⅱ区東側から出土した。計測値は底径76mm(残存率100%)。小型の甕形土器と推定される。胴部は条痕文のようにも見えるが判然としない。底面痕跡は木葉痕で、カシワ型の裏面の圧痕が観察される。器内面は、篋状工具による撫で調整。焼成は良い。色調は、器外面が暗褐色、器内面が淡褐色を呈する。

註1 小野天神前遺跡の甕形土器の法量を、第1次調査で出土した土器を含めて、次の3つに分類した。

大型→器高50cm以上

中型→器高30～50cm

小型→器高30cm未満

器高が明らかでない土器についても、大よその法量として示した。

註2 小野天神前遺跡の木葉痕で、第1次調査で出土した土器を含めて、次の4つに分類した。樹痕は、葉脈の部分的な圧痕からの推定であり、葉緑が圧痕としてほとんど残されており、原体の樹種を1種に絞り切るのは難しい。代表的な樹種を候補として抽出し、葉脈の「型」として表記している。この分類には、小幡和男氏のご指導をいただいた。

トチノキ型→2号土坑土器6(No.200)、10号土坑土器1(No.790)などを典型とする。同じような特徴の葉脈は、アワヅキにも見られる。

カシワ型→2号土坑土器9(No.201)、17号土坑土器2(No.700)などを

IV 動物遺存体の同定と試料の分析

動物遺存体の同定 小野天神前遺跡の発掘調査で

は、遺構の覆土及び表土から出土した173点(121.7g)、土壌の水洗選別で抽出された633点(48.8g)、総計806点(170.5g)の動物遺存体が検出された。また、2019年に発掘調査を実施した宿尻遺跡(鈴木編2022)からも、水洗選別を含む総計825点(45.1g)が検出されていた。ともに弥生時代の再葬墓の調査に伴うことから、これらの動物遺存体の中にヒトの骨が含まれていないか検討を必要とした。委託先のパリオ・サーヴェイ株式会社へは、選択漏れを懸念してほぼ全ての資料を送付した。

分析の結果、ヒトの骨と同定できるものは含まれていなかった。現在まで茨城県北部の調査では、縄文時代後・晩期の常陸太田市本覚遺跡(鈴木編2005)において調査面積45m²から284点(46.8g)、後・晩期が重複する泉坂下遺跡第1次(鈴木編2011)において調査面積36m²から825点(67.4g)、同第6次(鈴木編2021)において調査面積60m²から9,900点(989.0g)の動物遺存体が検出され、一方、後・晩期が重複しない中台遺跡からは、これが検出されておらず、動物遺存体は概ね縄文時代に帰属するものと見られる。小野天神前遺跡では、後期の第34号土坑からは検出されず、晩期以降の各遺構に包含されており、特に晩期に焼骨が生成されたことを窺わせている。遺構ごとの検出状況の蓄積が今後に期待されることである。宿尻遺跡からは、1mm方眼を使用した水洗選別で、魚骨が検出されており、種類の同定が期待された。

レプリカ法による植物種子の同定 宿尻遺跡(鈴木編2022)においては、土器の器表面に「種子状の圧痕を見出した」という記載のみを報告した。小野天神前遺跡から出土した土器の器表面にも、種子状の圧痕が見出されたことから、宿尻遺跡の圧痕も含めて、圧痕の正体、種子であるなら種類の同定を、これもパリオ・サーヴェイ株式会社に委託した。種子ではないと同定されたものがあり、宿尻遺跡については、この報告が旧記載を改定することに。

参考文献

鈴木素行編 2005『本覚遺跡の研究』(北原編)

第4表 小野天神前遺跡発掘調査で検出された動物遺存体

出土位置	点数	重量(g)
I区	13	14.8
II区	8	5.7
III区	15	17.2
IV区	23	16.8
SI1	2	0.8
SK35	5	3.0
SK36	10	2.1
SK41	5	9.3
SK43	10	6.0
SK45	12	6.3
SK46	1	0.5
SK47A	1	0.5
SK48	8	1.4
SK49	4	0.6
SK56	1	2.2
SK67	1	0.7
SK68	23	11.5
SK71	23	16.1
表層(0-1)	8	6.2
合計	173	121.7

第5表 小野天神前遺跡土壌の水洗選別で検出された動物遺存体 (跡方100cm)

出土位置	点数	重量(g)
SK45	418	31.4
SK45A	1	0.1
SK45A	1	0.2
SK45B	10	0.6
SK45B	8	0.4
SK45B	3	0.3
SK45B	8	0.7
SK46	19	1.5
SK47	23	2.5
SK47B	7	0.2
SK48	91	8.0
SK47B	32	2.3
SK71	10	0.6
SK76	<0.1	<0.1
合計	633	48.8

総計	点数	重量(g)
	806	170.5

第6表 宿尻遺跡発掘調査で検出された動物遺存体

出土位置	点数	重量(g)
調査区内	3	1.1
A6・B6・C6R	1	0.6
B2R	1	0.5
B4R	1	0.2
C2R	1	0.3
C3R	3	0.7
SE2	1	0.8
SK1 I区	14	3.8
SK2	2	1.8
SK4	2	2.5
SK5	1	2.3
表層(0-1)	1	0.8
合計	31	15.4

第7表 宿尻遺跡土壌の水洗選別で検出された動物遺存体 (跡方100cm)

出土位置	点数	重量(g)
SK1 I区	89	4.5
SK1 II区	66	3.0
SK1 III区	116	7.1
SK1 IV区	64	4.6
SK1 東へルト	30	1.3
SK1 西へルト	9	0.4
SK1 南へルト	14	0.8
SK1 北へルト	28	1.4
SK1 土器1内	9	0.3
SK1 土器2内	12	0.6
SK1 土器3内	4	0.4
SK1 土器4内	10	0.6
SK1 土器5内	10	0.4
SK1 土器6内	9	0.3
SK1 土器7内	11	0.4
SK1 土器8内	3	0.1
SK1 土器9内	16	0.6
SK1 土器10	1	<0.1
SK1 土器12	2	0.1
SK1 土器13内	5	0.1
SK1 土器15内	4	0.1
合計	510	27.1

出土位置	点数	重量(g)
SK1 土器1内	9	0.2
SK1 土器2内	33	0.2
SK1 土器3内	9	0.3
SK1 土器4内	64	0.4
SK1 土器5内	27	0.2
SK1 土器6内	21	0.2
SK1 土器7内	20	0.3
SK1 土器8内	6	<0.1
SK1 土器9内	18	0.2
SK1 土器10内	9	<0.1
SK1 土器11内	2	<0.1
SK1 土器12内	4	<0.1
SK1 土器13内	35	0.2
SK1 土器15内	21	0.1
合計	278	2.3

総計	点数	重量(g)
	819	44.8

鈴木素行編 2011『泉坂下遺跡の研究』(北原編)

鈴木素行編 2021『泉坂下遺跡Ⅶ 一保存整備事業に伴う第6次確認調査報告一』(北原編)常陸大宮市教育委員会

鈴木素行編 2022『宿尻遺跡 一久慈川・那珂川流域の再葬墓Ⅰ一』常陸大宮市教育委員会

1 小野天神前遺跡, 宿尻遺跡出土の動物遺存体の同定

金井 慎司(ハリノ・サーヴェイ株式会社)

1 試料

試料は、小野天神前遺跡, 宿尻遺跡の2遺跡から採取されたものである。

小野天神前遺跡では、調査段階で取り上げられた骨43試料, 3mmのフルイで洗い出された骨36試料, 合計79試料がある。それぞれ、複数点の破片がみられる。

宿尻遺跡では、調査段階で取り上げられた骨22試料, 3mmのフルイで洗い出された骨41試料, 1mmのフルイで洗い出された骨16試料である。

これらの中で、小野天神前遺跡の取上試料SK41-02・水洗(3mm)試料SK47-08, 宿尻遺跡の水洗(3mm)試料SK1-26, 水洗(1mm)試料SK1土器6内・SK1土器13内の5試料は、重要な印がされている。骨の観察は、これら全点を対象とした。いずれも弥生時代中期再葬墓の調査に伴い出土しているが、2遺跡とも縄文時代後・晩期が重複していることから、大半が縄文時代後・晩期に属する可能性が高いと推定されている。

2 分析方法

試料を肉眼および実体顕微鏡下で観察し、形態的特徴から種・部位を特定する。

3 結果

2遺跡を通じて確認された種類は、硬骨魚綱3種類(アユ・サケ科・タイ科)、鳥綱1種類(種不明)、哺乳綱2種類(イノシシ属・ニホンジカ)である(表1)。以下、遺跡ごとに概略を述べる。

・小野天神前遺跡

観察破片数は531点に及ぶ。この内、種類・部位が判明したものを表2に示す。イノシシ属の歯1点, 第2/5基節骨1点, 左腓骨1点, 右踵骨1点, イノシシ属の第2/5基節骨の可能性のある破片1点, ニホンジカの角6点, 左腕骨1点, 左脛骨1点, ニホンジカの角の可能性のある破片3点が確認される。ニホンジカ左脛骨は、未化骨で外れた近位端である。

その他、種を明らかにできなかったが、歯1点, 椎骨1

表1. 検出分類群一覧

脊椎動物門	Phylum Vertebrata
硬骨魚綱	Class Osteichthysse
条鰭亜綱	Subclass Actinopterygii
サケ目	Order Salmoniformes
アユ科	Family Plecolossidae
アユ	Plecoglossus altivelis altivelis
サケ科	Family Salmonidae
サケ科	Gen. et. sp. indet.
スズキ目	Order Perciformes
スズキ亜目	Suborder Percoidei
タイ科	Family Sparidae
属種不明	Gen. et. sp. Indet.
鳥綱	Class Aves
鳥類	Ord. et. fam. Indet.
哺乳綱	Class Mammalia
ウシ目(偶蹄目)	Order Artiodactyla
イノシシ科	Family Suidae
イノシシ属	Genus Sus
シカ科	Family Cervidae
ニホンジカ	Cervus nippon

点, 寛骨の可能性のある破片1点, 基節骨/中節骨1点, 指骨2点がみられる。それ以外の多くは、哺乳類部位不明破片(509点)である。

大半は、白色を呈し、割れており、表面に微細なひび割れが生じるなど、焼骨の特徴を示す。ただし、取上試料SK35-02の哺乳類部位不明破片2点, 水洗(3mm)試料SK45-57の歯1点は焼けていない。また、取上試料SK43-11のニホンジカの角の可能性のある破片には、明確でないが加工の可能性のある痕跡がみられる。それ以外の骨に加工痕は認められない。

・宿尻遺跡

観察破片数は848点に及ぶ。この内、種類・部位が判明したものを表3に示す。アユ尾椎2点, サケ科椎骨10点, タイ科歯1点, 魚類部位不明16点, 小型鳥類足根中足骨1点, 鳥類趾骨, 鳥類部位不明1点, イノシシ属の可能性のある歯3点, ニホンジカ角3点, ニホンジカ角の可能性のある破片1点, ニホンジカの可能性のある歯1点, 大型哺乳類中手骨/中足骨1点, 小型哺乳類尾椎1点が確認される。

その他、種を明らかにできなかったが、歯3点, 指趾骨1点, 指趾骨の可能性のある破片1点がみられる。それ以外の多くは、哺乳類部位不明破片(527点), 骨破片(268点), 碟(6点), である。

大半は、白色を呈し、割れており、表面に微細なひび割

れが生じるなど、焼骨の特徴を示す。ただし、水洗（3mm）試料 SK1-06の哺乳類歯1点、水洗（3mm）試料 SK1-24のイノシシ属の可能性のある歯3点、水洗（3mm）試料 SK1-26のタイ科歯1点、水洗（3mm）試料 SK1-土器7内の哺乳類歯は焼けていない。また、加工された痕跡が残る骨は確認されない。

4 考察

小野天神前遺跡、宿尻遺跡の両遺跡で検出された1373点の破片を観察したが、1364点が焼骨である。焼けていない骨は、イノシシ属およびその可能性のある歯、タイ科の歯、哺乳類の歯、および種類部位不明破片のわずかに9点であり、全体の1%未満である。大半が焼けた骨の小片である。2遺跡とも弥生時代中期再葬墓の調査に伴って出土した骨とされているが、泉坂下遺跡（小宮、2011）と同様にヒトに由来する骨を確認することはできない。なお、宿尻遺跡では、弥生時代中期の土坑内に埋置された土器内よりメジロザメ属歯1点が出土し、土坑が再葬墓として利用されていた可能性があるとされている（常陸大宮市教育委員会、2022）。発掘調査担当者の所見によると、縄文時代後・晩期の遺構と重複が認められない中台遺跡では土坑覆土と土器内土壌を水洗選別したが骨は検出されなかったという。したがって、久慈川流域に位置する泉坂下遺跡・中台遺跡、那珂川流域に位置する小野天神前遺跡・宿尻遺跡ともに、再葬墓とされる遺構内に残存していない可能性が高い。

今回、出土した骨は、食用等として利用された後、焼かれて廃棄されたものに由来するであろう。両遺跡で検出された骨をみると、イノシシ属、ニホンジカが共通して検出されている。この内、小野天神前遺跡から検出されたニホンジカの左脛骨は、近位端が未化石の外れた骨端であることから、幼獣であると考えられる。イノシシ属やニホンジカは、つくば市の上境旭台貝塚（西本、2015）、麻生町（現行方市）の於下貝塚（麻生町教育委員会、1992）など、縄文時代後・晩期から一般的に認められる。

この他、宿尻遺跡では、アユ尾椎（図1）、サケ科椎骨（図1）、タイ科歯など魚類に由来する骨が検出される。アユは、仔稚魚期に海で生活し、成魚になると河川を遡上し産卵する。茨城県内では、龍ヶ崎市南三島遺跡（小池・森本、1986）、東海村の御所内貝塚（山崎、2019）などでアユ

の可能性のある破片が検出されている。また、泉坂下遺跡第6次調査（バリノ・サーヴェイ株式会社、2021）および同遺跡第4次調査でもアユが確認されている（図1）。その他、玉造町（現行方市）の井上貝塚では、ギバチ、フナ、コイ等などの淡水魚が検出されている（汀、1999）。いずれにしても、泉坂下遺跡、宿尻遺跡の結果は、久慈川流域や那珂川流域においても内水面漁業が行われていたことを示す証拠である。微細な焼骨に注目して調査を行った成果であると言える。

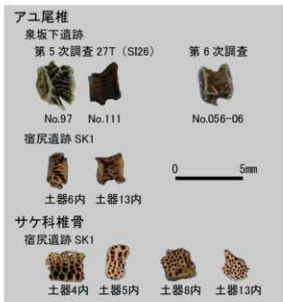


図1. 宿尻・泉坂下遺跡出土のアユおよびサケ科椎骨

引用文献

- 麻生町教育委員会、1992、於下貝塚発掘調査報告書、202p。
 常陸大宮市教育委員会、2022、宿尻遺跡—久慈川・那珂川流域の再葬墓1—、p.67。
 小池裕子・森本治英、1986、附章 南三島遺跡5区地点貝塚出土の自然遺物同定—特に貝類の季節性と魚骨組成・貝類組成・最高組成との関連について—、茨城県教育財団文化財調査報告第32集 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書12 南三島遺跡5区、財団法人茨城県教育財団、pp.355-375。
 小宮 孟、2011、泉坂下遺跡から検出された動物遺存体の同定、茨城県常陸大宮市泉坂下遺跡、常陸大宮市教育委員会、p.95
 西本 豊弘、2015、上境旭台貝塚平成22年度調査出土の動物遺体、茨城県教育財団文化財調査報告第397集上境旭台貝塚4中根・金田台特定土地区画整理事業地区埋蔵文化財調査報告書ⅩⅨ、公益財団法人茨城県教育財団、pp.158-163。
 汀 安衛、1999、井上貝塚出土脊椎動物遺体、茨城県行方郡玉造町 井上貝塚出土脊椎動物遺体調査報告書、玉造町跡調査会、pp.1-25。
 バリノ・サーヴェイ株式会社、2021、泉坂下遺跡第5・6次調査出土の動物遺存体の同定、茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書

第35集 泉取下遺跡Ⅶ—保存整備事業に伴う第6次確認調査報告一、常陸大宮市教育委員会、pp.93-100.

山崎京美、2019、御所内貝塚第2次出土の動物遺存体・平成29年度東海村内遺跡発掘調査報告書、東海村教育委員会、pp.52-80.

表2. 小野天神前遺跡骨同定結果

出土位置	採取方法	詳細一覧	種類	部位	左	右	状態等	数量	重量(g)	焼骨	加工	備考
I区	取上	I区-07	イノシシ属	第2/5基脚骨			略定	1	1.97	○		
			イノシシ属	蹄骨		右	破片	1	1.79	○		
II区	取上	II区-02	ニホンジカ	角			破片	1	0.23	○		
			ニホンジカ?	角?			破片	1	1.71	○		
III区	取上	III区-19	イノシシ属	蹄骨	左		遠位端	1	1.72	○		
			ニホンジカ	蹄骨	左		遠位端	1	9.78	○		
			哺乳類	蹄骨			破片	1	0.53	○		
IV区	取上	IV区-08	ニホンジカ	角			4	5.88	○			
SK41	取上	SK41-02	ニホンジカ	髌骨	左		近位端	1	7.58	○		未化石骨種
SK43	取上	SK43-11	ニホンジカ?	角?			破片	1	0.41	○	○?	加工品?
SK45	覆土	水洗(3mm)	SK45-S7	イノシシ属	歯		破片	1	0.05			
SK47	覆土	水洗(3mm)	SK47-02	哺乳類	歯		破片	1	0.02	○		
SK48	覆土	水洗(3mm)	SK48-06	イノシシ属?	第2/5基脚骨?		近位端片	1	0.64	○		
				哺乳類	指骨			遠位端片	1	0.82	○	
SK56	取上	SK56-03	ニホンジカ	角			破片	1	2.13	○		
SK68	取上	SK68-19	哺乳類	寛骨?			破片	1	2.09	○		
SK71	取上	SK71-50	ニホンジカ?	角?			破片	1	0.07	○		
			哺乳類	指骨			遠位端	1	0.59	○		

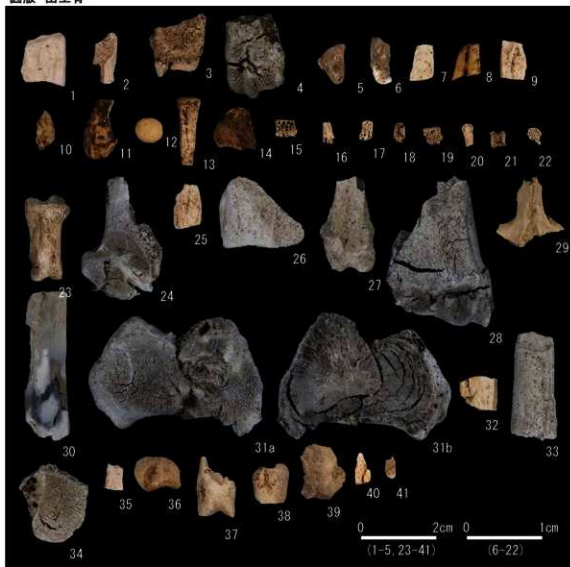
「骨」哺乳類・部位不明」という同定にとどまる資料については記載を省略した。

表3. 宿尻遺跡骨同定結果

出土位置	採取方法	詳細一覧	種類	部位	左	右	状態等	数量	重量(g)	焼骨	加工	備考	
SI2	取上	SI2-04	ニホンジカ	角			破片	1	0.75	○			
SK1	I区	取上	ニホンジカ?	角?			破片	1+	0.23	○			
			哺乳類	指趾骨?			近位端?	1	0.93	○			
SK1	I区	水洗(3mm)	SK1-05	ニホンジカ?	歯		破片	1	0.03	○			
			SK1-13	哺乳類	指趾骨			遠位端片	1	0.32	○		
SK1	II区	水洗(3mm)	SK1-00	ニホンジカ	角		破片	1	0.02	○			
				哺乳類	歯			破片	1	0.02	○		
				ニホンジカ	角			破片	1	0.04	○		
SK1	IV区	水洗(3mm)	SK1-04	哺乳類	歯		破片	1	0.00	○			
SK1	西ベルト	水洗(3mm)	SK1-24	イノシシ属?	歯		破片	3	0.14				
SK1	西ベルト	水洗(3mm)	SK1-26	タイル	歯		破片	1	0.01				
SK1	土層4内	水洗(3mm)	SK1-土層4内	小型哺乳類	尾椎		破片	1	0.04	○			
SK1	土層7内	水洗(3mm)	SK1-土層7内	哺乳類	歯		破片	1	0.05				
SK1	土層2内	水洗(1mm)	SK1-土層2内	鳥類	不明		破片	3	0.01	○			
SK1	土層4内	水洗(1mm)	SK1-土層4内	サケ科	蹄骨		破片	3	0.01	○			
				鳥類	不明			破片	4	0.01	○		
				小型鳥類	足根中足骨			遠位端片	1	0.00	○		
SK1	土層5内	水洗(1mm)	SK1-土層5内	サケ科	蹄骨		破片	2	0.01	○			
				鳥類	不明			破片	4	0.02	○		
SK1	土層6内	水洗(1mm)	SK1-土層6内	アユ	尾椎		略定	1	0.00	○			
SK1	土層7内	水洗(1mm)	SK1-土層7内	鳥類	不明		破片	4	0.01	○			
SK1	土層8内	水洗(1mm)	SK1-土層8内	サケ科	蹄骨		破片	1	0.00	○			
				鳥類	不明			破片	1	0.00	○		
SK1	土層10内	水洗(1mm)	SK1-土層10内	鳥類	趾骨		破片	1	0.01	○			
				鳥類	不明			破片	1	0.00	○		
SK1	土層13内	水洗(1mm)	SK1-土層13内	アユ	尾椎		破片	1	0.01	○			
				サケ科	蹄骨			破片	4	0.01	○		
SK4	取上	SK4-07	大型哺乳類	中手骨/中足骨			遠位端	1	2.16	○			

「骨」哺乳類・部位不明」という同定にとどまる資料については記載を省略した。

図版 出土骨



- | | |
|-------------------------------|-----------------------------------|
| 1. ニホンジカ角(宿戻:SI2-04) | 2. ニホンジカ?角?(宿戻:SK1-土器7内) |
| 3. 哺乳類指趾骨?(宿戻:SK1-土器14内) | 4. 大型哺乳類中手骨/中足骨(宿戻:SK4-07) |
| 5. 哺乳類指趾骨(宿戻:SK1-13) | 6. ニホンジカ?歯(宿戻:SK1-05) |
| 7. ニホンジカ角(宿戻:SK1-06) | 8. 哺乳類歯(宿戻:SK1-06) |
| 9. ニホンジカ角(宿戻:SK1-14) | 10. 哺乳類歯(宿戻:SK1-04) |
| 11. イノシシ属?歯(宿戻:SK1-24) | 12. タイ科歯(宿戻:SK1-26) |
| 13. 小型哺乳類尾椎(宿戻:SK1-土器4内) | 14. 哺乳類歯(宿戻:SK1-土器7内) |
| 15. サケ科椎骨(宿戻:SK1-土器4内) | 16. 小型鳥類足根中足骨(宿戻:SK1-土器4内) |
| 17. サケ科椎骨(宿戻:SK1-土器5内) | 18. アユ尾椎(宿戻:SK1-土器6内) |
| 19. サケ科椎骨(宿戻:SK1-土器8内) | 20. 鳥類趾骨(宿戻:SK1-土器10内) |
| 21. アユ尾椎(宿戻:SK1-土器13内) | 22. サケ科椎骨(宿戻:SK1-土器13内) |
| 23. イノシシ属第2/5基節骨(小野天神前:Ⅰ区-07) | 24. イノシシ属右踵骨(小野天神前:Ⅰ区-10) |
| 25. ニホンジカ角(小野天神前:Ⅱ区-02) | 26. ニホンジカ?角?(小野天神前:Ⅱ区-03) |
| 27. イノシシ属左膝骨(小野天神前:Ⅲ区-19) | 28. ニホンジカ左携骨(小野天神前:Ⅲ区-19) |
| 29. 哺乳類椎骨(小野天神前:Ⅲ区-19) | 30. ニホンジカ角(小野天神前:Ⅳ区-08) |
| 31. ニホンジカ左脛骨(小野天神前:SK41-02) | 32. ニホンジカ?角?(小野天神前:SK43-11) |
| 33. ニホンジカ角(小野天神前:SK56-03) | 34. 哺乳類寛骨?(小野天神前:SK68-19) |
| 35. ニホンジカ?角?(小野天神前:SK71-50) | 36. 哺乳類指骨(小野天神前:SK71-50) |
| 37. 哺乳類基節骨/中節骨(小野天神前:SK45-57) | 38. イノシシ属?第2/5基節骨?(小野天神前:SK48-06) |
| 39. 哺乳類指骨(小野天神前:SK48-06) | 40. イノシシ属歯(小野天神前:SK45-57) |
| 41. 哺乳類歯(小野天神前:SK47-02) | |

2 小野天神前遺跡、宿尻遺跡、中台遺跡出土土器の圧痕レプリカ作成観察

田中義文 (ハリノ・サーヴェイ株式会社)

はじめに

市内の遺跡から出土した弥生土器にみられる土器圧痕について、その原体を知る目的で、レプリカ法を用いた土器圧痕調査を実施する。

1 試料

試料は、小野天神前遺跡、宿尻遺跡、中台遺跡から検出された弥生土器7点である。1つの土器に複数の圧痕がみられるものもあるため、レプリカは計10点作成している。試料の詳細は結果と合わせて表1に示す。

2 分析方法

土器圧痕のレプリカ作成は、歯科用のシリコン印象材を用い、辻野・田川(1991)を参考にを行う。圧痕ならびにその周りを水でぬらし、印象材に含まれる溶剤が土器に染みこんで変色するのを防止するとともに、印象材の剥離を容易にする。圧痕の中に水が溜まっていないことを確認した後、混和したシリコン印象材を注入し、硬化した後に取り出す。印象材に土などの付着物が混じる場合が多いため、3～4回型取りを繰り返す。また、圧痕の内部がプラスチック状に広がっている場合は、印象材の硬さを調整するなどして、圧痕の破壊を防ぐ。型取りを行ったあと、印象材に含まれる油分が土器胎土に染みこんで変色した場合は、アセトンを使ってできるだけ拭き取る。

作成したレプリカは、観察しやすいように整形した後、接着剤で試料台に貼り、デジタルマイクロスコープと電子顕微鏡で観察する。電子顕微鏡では、チャージアップによる解像度低下を防ぐため、レプリカに蒸着(炭素)を施し、ドータイトで接地(アース)する。

3 結果・考察

結果を表1に示す。以下に土器ごとの圧痕の状況や原体に関する検討を行う。

小野天神前遺跡の土器1は2つの細長い溝状で、浅い。原体は直径1mm程度の円柱状と思われ、直線上に並んでいる。おそらく、これらは同一の原体であり、胎土内

表1. 土器圧痕観察結果

遺跡	遺物	土器番号/外面/内面	No.	結果	備考
小野天神前	SK45B	土器1 内面		不明	剥離?
		土器5 内面(側面)		イネ(稲)	
		土器5 外面	5-1	ム半類(オオムギ?)	プラスチック状
			5-2	ム半類(オオムギ?)	プラスチック状
		土器7 外面		木材料?	プラスチック状
宿尻	SK1	土器11 内面(側面)		不明	プラスチック状
		土器15 内面	15-1	植物片(葉?)	
			15-2	木材	プラスチック状 腐化材残存
		土器15 外面	15-3	不明	プラスチック状
中台	圧痕	土器2 内面(側面)		腐化材?	プラスチック状

部でつながっている可能性が高い。植物の根や茎に由来する可能性があるものの、種類は不明である。

小野天神前遺跡の土器5は、イネの穎(稲穂)で、長さ7mm、幅5mm程度の扁平な長楕円体である。基部に存在するはずの小穂軸や一對の護穎は欠損する。外穎と内穎が縫合して長楕円形の稲穂を構成する状態が認められる。3つの隆起が特徴的で、表面には顆粒状突起が縦列する。

宿尻遺跡土器5は2ヶ所から採取した。ともにプラスチック状になっており、外観より中の空間が広い。双方ともレプリカの大きさは長さ4.5mm、幅2.5mmの紡錘形で、一部に縦長の細胞構造がみられる。胚乳の痕跡等は不明瞭である。形状から、ム半類と思われ、大きさと形状からオオムギの可能性が高い。2点とも縦溝がみられないので、背面方向の印象が残ったと思われる。またプラスチック状であることから、埋め込まれた状態で焼成し、原体が焼失したと考えられる。

宿尻遺跡土器7の土器圧痕もプラスチック状になっており、外観より中の空間が広い。長さ7mm、幅6mm程度で角張っており、一定方向に筋状の模様が目立つ。おそらく、材料とみられる。プラスチック状であることから、埋め込まれた状態で焼成し、原体が焼失したと考えられる。

宿尻遺跡土器11の土器圧痕もプラスチック状になっており、外観より中の空間が広い。3mm程度の扁平な円盤状であるが、表面模様等はなく、原体は不明である。

宿尻遺跡土器15は3ヶ所から採取された。土器15-1の土器圧痕は浅い。長さ5.5mm、幅2.5mm程度で、長辺方向に深い筋(籾管束か)があり、短辺方向に細かなう

ろこ状の模様が見られる。草本類（イネ科等）の茎や葉に由来する可能性がある。土器15-2の土器圧痕はフラスコ状になっており、外観より中の空間が広い。長さ4mm、幅3mm程度で角張っており、一定方向に筋状の模様が明瞭にみられ、材片とみられる。レプリカには、焼失した炭化材片と思われる原体の一部が付着しているが、微細なため種類は不明である。土器15-3の土器圧痕はフラスコ状になっており、外観より中の空間が広い。長さ5.5mm、幅3mm程度の広卵形で扁平であり、植物の種実のようにもみえるが、原体の種類は不明である。

中台遺跡の土器2はフラスコ状になっており、外観より中の空間が広い。長さ6mm、幅3mm程度で角張っており、一定方向に筋状の模様が明瞭で、材片とみられる。フラスコ状であることから、埋め込まれた状態で焼成し、

原体が焼失したと考えられる。

市内の泉坂下遺跡からは、土器圧痕から稲穂が検出されたが、今回はこれにムギ類の圧痕が加わっている。なお、泉坂下遺跡では、弥生時代の再葬墓の土器より、コメ（イネ胚乳）、コムギなどの炭化穀粒が確認されており（鈴木編, 2011）、当時の栽培・利用が示唆される。

引用文献

- 丑野 毅・田川裕美, 1991, レプリカ法による土器圧痕の観察, 考古学と自然科学, 24, pp.13-36.
鈴木素行編, 2011, 茨城県常陸大宮市泉坂下遺跡, 常陸大宮市教育委員会, p.125.

図版1 土器圧痕(1)

小野天神前遺跡(SK45B 土器1)



土器

小野天神前遺跡(SK45B 土器5)



土器

宿戻遺跡(SK1 土器5-1)

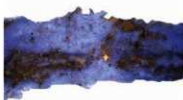


土器

宿戻遺跡(SK1 土器5-2)



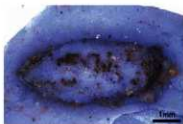
土器



マイクロスコープ



マイクロスコープ



マイクロスコープ



マイクロスコープ



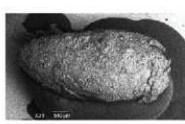
電子顕微鏡



電子顕微鏡



電子顕微鏡



電子顕微鏡

図版2 土器圧痕(2)

宿尻遺跡(SK1 土器7)



土器

宿尻遺跡(SK1 土器11)



土器

宿尻遺跡(SK1 土器15-1)



土器

宿尻遺跡(SK1 土器15-2)



土器

宿尻遺跡(SK1 土器15-3)

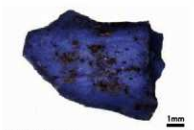


土器

中台遺跡(採集 土器2)

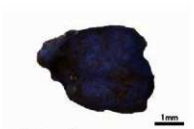


土器



マイクروسコープ

1mm



マイクروسコープ

1mm



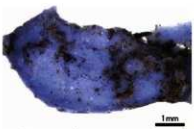
マイクروسコープ

1mm



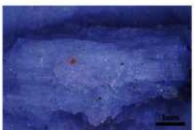
マイクروسコープ

1mm



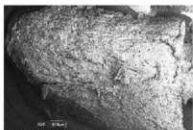
マイクروسコープ

1mm

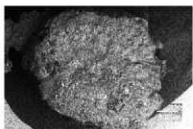


マイクروسコープ

1mm



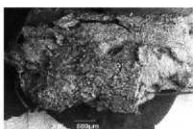
電子顕微鏡



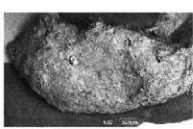
電子顕微鏡



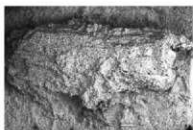
電子顕微鏡



電子顕微鏡



電子顕微鏡



電子顕微鏡

V 調査の成果と課題

—小野天神前遺跡における再葬墓群の成立と展開—

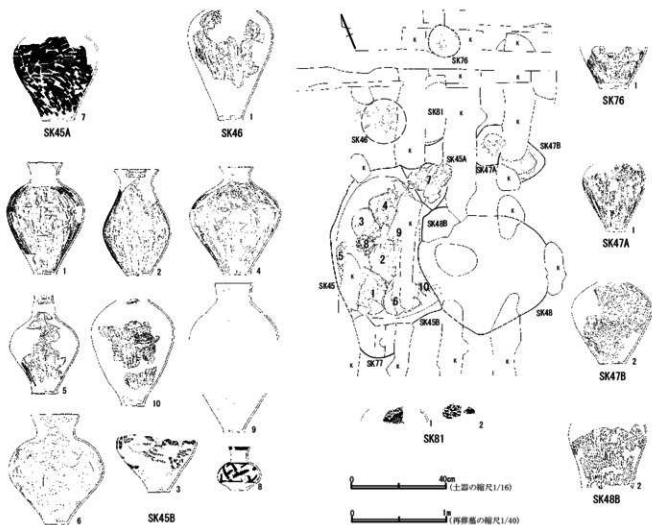
1 新たに検出された再葬墓群

1976 (昭和51)年に茨城県歴史館が実施した発掘調査を第1次として、2021 (令和3)年に実施した小野天神前遺跡の第2次調査では、調査区内から未調査の再葬墓を6基 (第45A・45B・46・47A・47B・76号)、再葬墓群との関連が考えられる土坑3基 (第48・77・81号)を検出した。また、第48号土坑は再葬墓を破壊して掘り込まれたらしいことが明らかとなり、わずかに残された土坑の痕跡を第48B号として推定した (第50図)。再葬墓に埋置された土器は、第45B号が9個体で、これらの再葬墓のなかで突出している。他の6基は、それぞれ1個体のみであった。

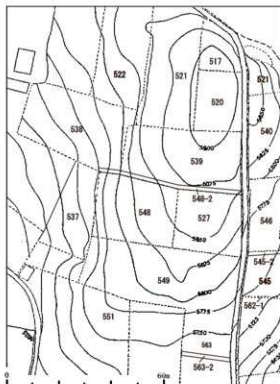
第45B号と第45A号は重複し、その新旧関係が明確に

捉えられた。第45B号が旧く、第45A号が新しい。つまり、先に構築されていた第45B号と連結するように、第45A号はその東側に掘り込まれた。第48B号にも、ほぼ同じ選地が考えられる。さらに、第45B・48B号の2基に重複して第48号が掘り込まれ、これが2基に埋置されていた土器の一部を破壊した。破壊された土器は散在させることなく、第48B号の位置にまとめて埋め戻されており、その土器の意味を認知していたような措置が窺える。第48号には、その規模と覆土の観察から、土壌墓が推定された。

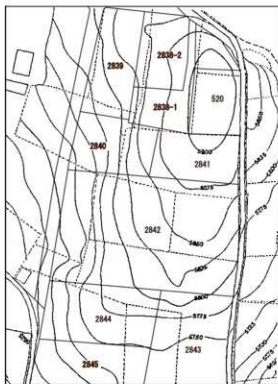
第46・47A・47B号の3基は、第45B号からやや離れて北側に位置する。第47A・47B号の2基もまた連結



第50図 第2次調査区で検出された弥生時代の遺構と土器群



1. 第1次調査時の地籍



2. 1982年11月以降の地籍

第51図 換地に伴う地籍の変更

するように重複していた。第76号がさらに北側に分布することには、第81号が既に存在していたことが想定され、第81号は、第46号に連結するように掘り込まれていたのかもしれない。この第81号にも、土壌墓を推定している。他の再葬墓に埋置された土器が全て横位の姿勢であるのに対して、第76号のみは正位の姿勢であった。土器の上部が攪乱により欠失することから、口縁部まで存在したのか不明であり、再葬墓と報告したが、土器棺の可能性も否定できない。第77号については、土器が埋設されておらず、覆土中に柱痕を見出したことから、後に連結あるいは接近して追加される再葬墓・土壌墓に第45B号の位置を示す標柱を埋設した、その掘り方ではなかったかと想像した。

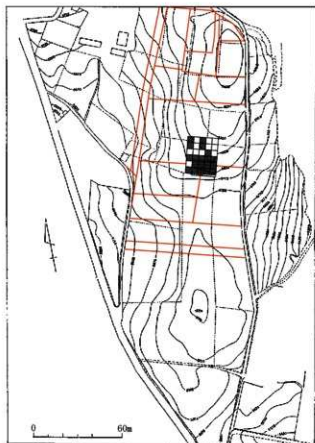
第2次調査で検出された再葬墓・土壌墓には、第45B号を中核とした群構成が推定されたが、まずは、これが第1次調査の再葬墓群とどのような位置関係にあるのかを明らかにしなければならない。

2 第1次調査区の位置

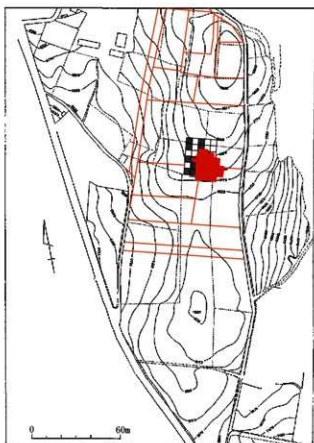
茨城県歴史館が発掘調査を実施した第1次調査区には、南側限界にまで再葬墓が分布し、さらに南側の空間

にも分布が伸びる可能性が残されていた。その未調査部分について再葬墓の有無を確認することが第2次調査の目的であった。したがって、第2次調査区は、第1次調査区の再葬墓分布範囲を含めて南側の隣接した位置に設定した(第52図)。しかしながら、予定を上回る286mに調査面積を拡大しても、第2次調査区内に第1次調査の再葬墓群を確認することはできなかった。第2次調査区は、ゴボウ耕作による攪乱が第1次調査の時点よりかなり進行していた。既掘の再葬墓は埋め戻されて攪乱に紛れることから、手掘りの深耕溝よりも新しく、トレンチャーの深耕溝よりも古い攪乱を見極めるためには、調査区全体の攪乱を精査せざるを得なかった。その結果、第2次調査区内には第1次調査の再葬墓群、少なくとも2・14・16・18号という大型の土坑の配置は存在しないという結論に至った。第2次調査では、調査区の空掘を実施しており、撮影された写真からも、予定通りの地点に調査区が設定されており、位置を誤ったのは第1次調査の報告と考えられた。それでは、第1次調査区はどこにあるのか。

地籍の変更 まずは、調査地の地籍を確認することから検討を始めた。遺跡の西側に県道長沢水戸線があり、



1. 報告書に記載された第1次調査区の位置



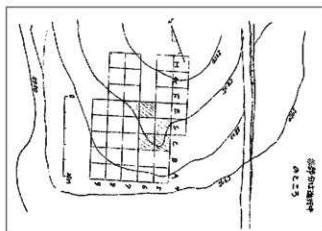
2. 第1・2次調査区の位置関係

第52図 第1次調査区と第2次調査区(1)

住宅を三角形に囲む細い道路や東側を周回する道路、ほとんどが耕作地という現況も、第1次調査時と変わらない風景には見えるが、1982(昭和57)年11月に耕地整理の換地に伴う地籍変更があった。それまで3桁の数字で表記されていた地籍は、新たに4桁の数字に変更されている(第51図)。第1次調査区に相当する地籍は527・548・549の3筆であったが、1982年11月以降には、これが2842・2843・2844に変更された。第2次調査区は、この新地籍2842・2843・2844である。但し、換地により土地境界が移動しており、第2次調査区に見られたゴボウ耕作による攪乱の分布は、旧・新それぞれの地籍での土地利用によるものと理解された。Ⅱ区東側に見られた手掘りによるゴボウ耕作痕は、旧地籍549がL字形であることに符合する。一方、トレンチャーによるゴボウ耕作痕は、新地籍の土地境界にほぼ一致している。

地形測量図の作成 調査区の位置とともに地形が測量図されたのであれば、その位置を誤ることはあり得ないと考えられた。地形測量図では等高線が記入された地

籍520に、現在では住宅が建つ(図版1参照)。この住宅は1975(昭和50)年に建築され、転居してきた当時小学生の中部茂之が眼前で展開される発掘調査を記憶している。また、発掘調査期間中に、参加した大学生を中心として編集・発行された『調査だより』№1(小野天神前遺跡調査者編1976)には既に地形測量図と同じ等高線が記入されていた(第53図1)。つまり、地形測量図は発掘調査以前に準備されており、それは1975(昭和50)年以前に作成されたものであったらしい。既に作成されていた地形測量図の中に調査区の位置を落とし込む際に、手違いが生じたと考えられるのである。その誤りが生じた原因の1つは、『調査だより』№1に掲載された調査区の形状と、報告書(阿久津1978a)の「遺跡測量図」に記入された調査区の形状がおおよそ似ていることから、そのまま報告書に採用したことであると見られた。5列分の東西幅の調査区は、『調査だより』№1が「5~9列」であるのに対して、報告書はこれを「3~7列」とする。この時点で東西方向に8mの誤差が生じることになる。



1. 『調査だより』№1の第1次調査区



2. 第1次調査区の南端



3. 第1次調査区の東端



4. 第1次調査区の北端

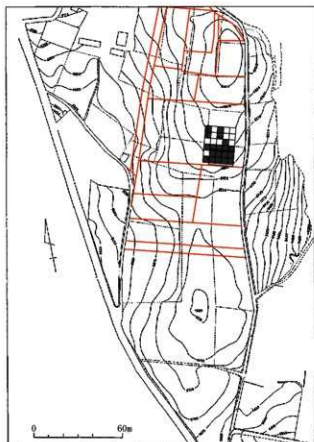
第53図 第1次調査区位置の検討資料

写真に残された位置 『調査だより』№1に掲載された調査区の位置を、等高線の形状にしたがって第2次調査区と重ねてもなお、新たに検出された再葬墓群は第1次調査区内に含まれてしまう。そこで、未公表のものを含めて、調査中に撮影された写真の中に手掛かりを求めることとした。

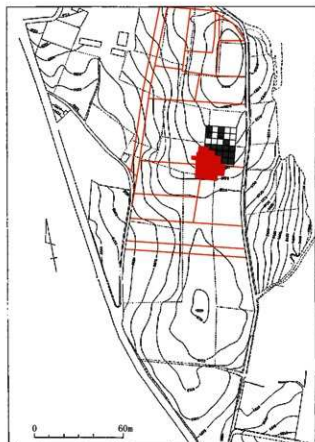
第53図2は、調査区の南端が写された写真である。調査開始からほどなく撮影されたものと考えられた。膝辺りまで地表下に隠れた人物が写り込んでいて、これが『調査だより』№1(第53図1)に「進行中のところ」と斜線部で示されたC6グリッドに相当する。これより南側にはA・B列の設定杭が打たれており、A列は、土地境界にほぼ接していることが見て取れる。つまり、調査区は、旧

地籍549の南側境界を南北方向の起点(A9列)として設定され、実際にはC～H列が調査されたことから、旧地籍549の境界より8mほど北側に位置することになる。

第53図3は、調査区の東端が写された写真である。再葬墓の土器が既に取り上げられており、調査終了間際に撮影されたものと考えられた。調査区内にシートが敷かれた箇所がD3グリッドに相当する。写り込んだテントからも、道路までは8mほどと見積もることができ、これはグリッド2列分に相当する距離である。つまり、調査区は、旧地籍549の東側境界を東西方向の起点(19列)として設定され、実際には3～7列が調査されたことから、旧地籍549の境界より8mほど西側に位置することになる。



1. 第1次調査区位置の訂正



2. 第1・2次調査区的位置関係

第54図 第1次調査区と第2次調査区(2)

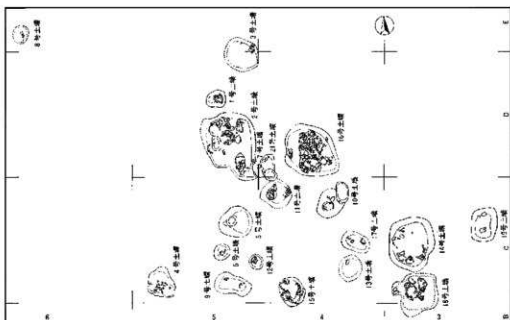
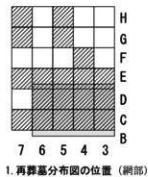
第53図4は、調査区の北端が写された写真である。地籍520の住宅が写り込んでおり、旧地籍539は全面が耕作地のまま、旧地籍527の一部にF4・G5・H5グリッドが位置する。旧地籍539の北側境界からH5グリッドまでの距離は推量難しいもの、南側境界と調査区のE・F列の区画がほぼ一致することは確実に見て取れる。これは、旧地籍549の南側境界を南北方向の起点(A列)として調査区が設定されたことに合致する。報告書(阿久津1978a)には、C5・D4・D5グリッドの南壁について表土からローム層までの断面図が掲載されており、その地表の標高は、従前の位置図の等高線とは整合せず、訂正した位置図の等高線にほぼ整合することも、これを支持する。

第1次調査区は、グリッド記号の順番からも南東に起点があることが知られるのであり、それは、旧地籍549の南・東側の土地境界を利用したものであった。これを報告書の「遺跡測量図」(第52図1)は、南・西方向にそれぞれ8mほど誤って図示していたことが明らかとなった。

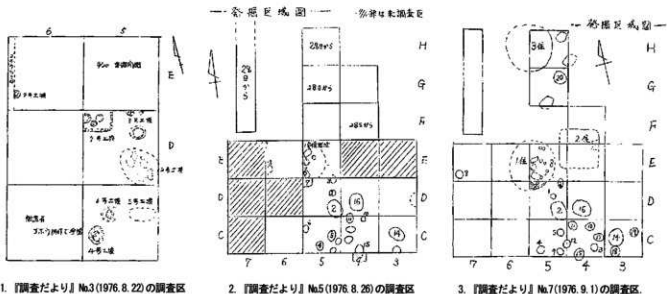
正しくは、第54図1のように図示されるべきであったと考える。その位置は、「畑でゴボウを掘っていた四倉英明さんが人面付土器を掘り当て」(四倉1995)という旧地籍549を中心として、旧地籍527・548の3筆にまたがる。また、最初の人面付土器を掘り当て、第1次調査区を南北方向に攪乱したゴボウの深耕(第55図3)は、第2次調査区のⅡ区東側からⅡ区拡張区に検出された手掘りによるゴボウの深耕の延長上にあることがほぼ確実となった。

3 第1次調査区の範囲と面積

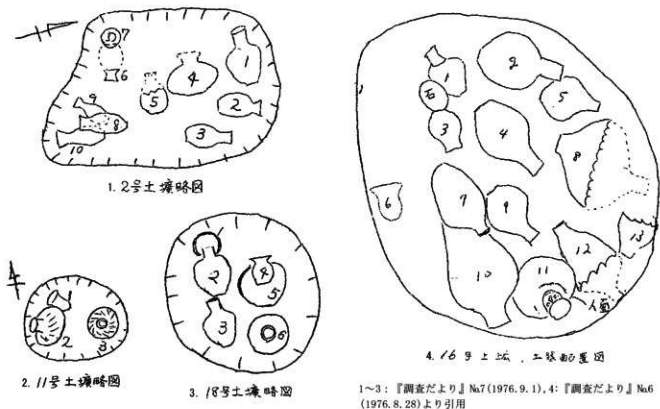
報告書(阿久津1978a)の「遺跡測量図」には、調査を実施したとするグリッドに斜線が記入されていた(第55図1)。これを、『調査だより』に掲載された「発掘区域図」(第56図)と比較してみると、8月26日発行の№5ではC7・D6・D7・E3・E4・E7グリッドに斜線の「未調査区」(2)として記入されている。F4・G5・H5グリッドは、図中に「28日から」(2)と記入されたが、実際には29日に「F・G・Hグリッド調査開始」(縄文時代後期の住居



第55図 第1次調査区における再葬墓の分布



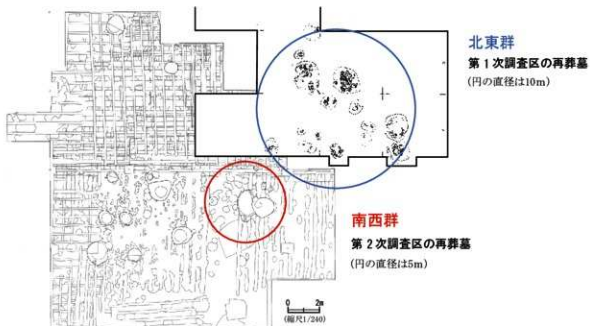
第56図 第1次調査区の範囲と面積の検討資料



第57図 第1次調査区の再葬墓の略図

址、古墳時代の住居址確認」と遅れた。8月30・31日は「土壌墓の実測、遺物の取り上げ」に費やされており、9月1日に調査は終了を迎える。9月3日には埋め戻しが完了する日程の中で、C7・D6・D7・E3・E4・E7グリッドが調査できたとは考えられない。再葬墓の土器のほとんどが取り上げられた状況でも、D6・E3・E4グリッドは手

付かずのままであった(第55図3)。また、F～H7グリッドには、幅2mのトレンチが設定されたように見える(第56図2・3)が、これも調査は実施できたのか。図面、写真、遺物は一切残されていない。「調査済、ゴボウ耕作で全壊」(第56図1)と記入されたC6グリッドを含めるとしても、調査が実施されたことが確実なのはC3～6, D3



第58図 第1・2次調査区の再葬墓

～5, E5・6, F4, G5, H5の12グリッド、面積は拡張部分を含めても200㎡ほどである。「6・B・C・Dは攪乱が各区全域に及んでおり、遺構検出が困難であった」(阿久津1979)とは、C6グリッドからの類推ということなのであろう。

なお、『調査だより』には、いくつかの再葬墓の土器出土状況が略図で掲載されており、調査時の観察を記録した資料として、ここに掲載しておきたい(第57図)。

4 第1・2次調査区の位置関係

第1次調査区の位置及び調査範囲を修正し、第2次調査区と重ねてみると、C6グリッドの全部とC5グリッドの一部が第2次調査区内に含まれていたことが明らかとなった(第58図)。ここには再葬墓の4号墓墳が調査されていたが、直径1mほどの攪乱として残されている痕跡を、多くの攪乱の中から特定することはできなかった。「調査済、ゴボウ耕作で全壊」というC6グリッド相当部分には、第106～112号土坑とした未調査の遺構が分布しており、覆土の状態や表土中の遺物からは縄文時代の遺構と考えられた。第1次調査区ではE5・6区に「1号住居跡」、H5グリッドに「3号住居跡」という縄文時代の住居跡も検出されており(第56図3)、このような土坑が第1次調査区内にも展開していたことはほぼ確実に、報告書(阿久津1978a)に掲載された土坑にも、これが混在す

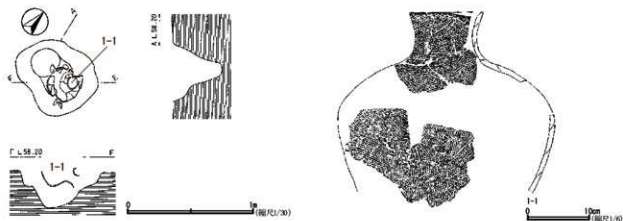
ると考えなければならない。5・7・10・19・21号土坑には、弥生時代とする根拠が見いだせないことから、これらを除外すると、弥生時代の遺構は15基となる。これは、「弥生時代の土坑墓(再葬墓)15個」という『調査だより』№7の記述に一致する。

調査区と位置関係からは、第1次調査区の15基を北東群、第2次調査区の10基を南西群と呼ぶ。北東群は、直径10mほどの範囲に展開している。但し、第2次調査がこの南側を調査対象にできなかったことから、範囲は南側へと拡張する可能性が残されている。南西群は、直径5mほどの範囲に展開する。この2群区分では、北東群が主、南西群が従のような関係にも映るが、再葬墓群全体の構造を捉えるためには、北東群の再検討が必要である。

5 第1次調査区の再葬墓

第1次調査区に報告された再葬墓の再検討には、茨城県立歴史館に保管されていた発掘調査の図面も閲覧し、所蔵されている全ての遺物を観察した。

報告書(阿久津1978a)に掲載された遺構図は攪乱部分を推定して復元されているが、測量原因には、攪乱の範囲が記入されていたことから、これを加筆した(斜線で表現)。また、報告書では、土坑への帰属は明示されていても、各々の土器の出土位置が不明であった。測量原因に



第59図 1号土壙・出土土器

は、土器の取り上げ番号が青鉛筆で記入されており、その番号で土器は注記されている(第8表)。したがって、取り上げ番号—注記番号—図版番号を対照させることにより、土器の出土位置が明らかになった。取り上げ番号と図版番号は一対一の対応とは限らないので、両方を加筆した(取り上げ番号は黒付数字を水色で、挿図番号は茶色で表記)。

土器が埋置された姿勢については、「多くは直立にしていたものが、その後の作業(埋めもどし)などによって倒れたとも当然考えられる」、「直立して土器を埋置した後、その中に土を一方から入れてゆくと、このような状態になる可能性がある」(阿久津1979)等と記述され、ほとんどの土器に解説を欠く。このような想像には既に否定を表明しており(鈴木編2011)、埋置の姿勢を明らかにするため、出土状況の図面及び写真について、接合復元されている土器の残存部分の形、割れ方などを対照して推定を試みた。

報告書(阿久津1978a)に掲載された土器の実測図には、拓本を伴わないものが多い。実測図に表現された条痕文や縄文の実際を理解するための補助として、無文の2点を除くすべてに拓本を付加した。特に個々の土器の底面の拓本は、これが初出となる。土器の観察では、同一個体の識別により、個体数の変動も生じた。これについては、各土坑の検討において詳述するが、特に2号土壙に帰属すると報告された人面付土器の人面部破片は、帰属の確固たる根拠を失い、遺構外の遺物として扱うことになった。なお、土器の計測値については第9表を参照とする。

(1) 1号土壙

遺構(第59図)「隅丸方形に近い掘り方をもち、20センチメートルで段を形成して、U字形に掘り込んでいる」、「埋設されている土器は1段目下面に位置」(阿久津1979)という記述と、瓢形に近い平面形状からは、2基の土坑の重複ではないかと考えられる。新しい方の土坑が再葬墓ということになる。確認面での規模と形状は直径70cmほどの円形であろうか。

土器の出土状況「底部より口縁部の方がむしろ低い位置にある。土層の状況から判断しても、直立していたものが倒れたのではなく、はじめから倒置したものと考えられる」(阿久津1979)と、この事例については横位の姿勢が記述されている。口縁部が北東、底部が南西を向き、口縁部と胴部を土坑の底面に接地した姿勢が推定される。

土器1-1(第59図) 中型の壺形土器。口縁部は、平・単純口縁で、やや歪んだ楕円形となる。口縁部から胴部まで、刷毛状の条痕文が施されている。口頸部は左上り→右上り、胴上部は右上り→左上りの順序で、一部が格子状を構成する。器内面の胴下部にも一部条痕文が見られる。胎土には、金雲母を極少量含む。

(2) 2A・B号土壙

遺構(第60図)「方形に近いもので、一部突出した形状を呈している」(阿久津1979)という、その突出部は、川崎純徳等(1980)も既に指摘しているように、2基の土坑の重複によるものと見られる。エレベーション図には、2基の土坑の重複部分にそれぞれ底面からの立ち上がりも記録されている。ここでは、南側の突出部相当の土坑を

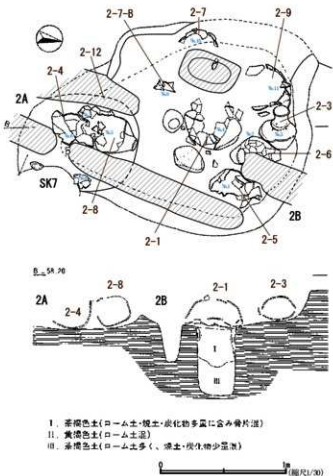
「2A号」、北側の土坑を「2B号」と呼ぶことにする。規模と形状は、2A号が長軸（南北）1.1～1.2m・短軸（東西）0.8mほどの楕円形、2B号が長軸（東西）1.7m・短軸（南北）1.5mほどの楕円形と推定される。2B号の底面に検出されたピットは、土器が埋置された下位に相当し、重複した縄文時代の遺構と考えられる。

土器の出土状況 2号土壇の土器として報告されたのは12点であった。そのうち2-4、8、12（破片）の3個体が2A号、2-1、3、5、6、7、9の6個体が2B号にそれぞれ帰属する。2-11として報告された小型壺形土器の口縁部は、攪乱部からの出土と注記されており、帰属を明らかにし得ない。また、2-10として報告された口縁部は、2-1の同一個体と識別された。未報告であった「No.9」は、2-7の同一個体と識別され、ゴボウ耕作により遊離したものと考えられた。これを「2-7-B」として追加する。

2A号の2個体は、2-4が口縁部を南東、底部を北西に向け、2-8が口縁部を南、底部を北に向けた横位の姿勢で埋置されている。『調査だより』No.7では、ここに3個体が埋置されたように図示されたが、土器の大きさから見て2-4の破片の広がりをも2個体分に誤認したものと考えられる（第57図1）。2-4の胴部には、2-8の口頸部がのる状態であったことが推定される。

2B号の6個体は、2-1、3、7、9の4個体が口縁部を西、底部を東に向け、2-5、6の2個体が口縁部を北、底部を南に向けた横位の姿勢で埋置されている。2-9の胴部には、2-3の口頸部がのる状態であったことが推定される。

人面付土器の出土位置 人面部破片「2-2」には、出土位置の注記がない。報告書（阿久津1978a）の遺物出土状況図にも、その原因にも出土位置は記録されておらず、出土状況の写真も残されていない。『調査だより』No.2には、「人面土器出土するく特報」として、次のように記述されていた。「No.1で報告したC-5・D-5地点において、本日新たに土壇墓（3号から6号）が確認されました。しかし、ゴボウ耕作によって深くまで掘られているために、確認された土壇群はいずれも半分くらいが破壊されています。その破壊された所から人面付土器が出土しましたが、発見された部分は顔の一部分にすぎません」。添えられたスケッチから、これが人面部破片「2-2」の一部に相当することは明らかである。2号土壇についての記述は



第60図 2A・B号土壇

なく、文脈からは「土壇墓（3号から6号）」の「破壊された所」から出土したことが読み取れる。少なくとも、遺物の帰属を確定できない攪乱の中から出土したことは認めなければならない。3～6号土壇が2号土壇の周囲に位置することは確かである。それでは、攪乱から出土した人面部破片「2-2」は何故、2号土壇の遺物として周知されることになったのであろうか。報告書等では、人面部破片「2-2」が以下のように記載されてきた。

報告書の『茨城県大宮町小野天神前遺跡（資料編）』（阿久津1978a）において、人面部破片は2号土壇の土器2として「2-2」の記号が与えられた。2号土壇は、土器1～12の12個が「2-1～12」として報告されている。その一覧表の備考欄には、土器1と2に「同一個体の可能性がある」と記載されていた。

『日本考古学年報』29（1976年版）に掲載された「茨城県小野天神前遺跡」（阿久津1978b）では、「土壇2 弥・中壺11（人面付1個）」と記載されており、土器「2-1」と人面部破片「2-2」は、同一の1個として扱われている。

『茨城県歴史館報』6に掲載された「大宮町小野天神

前遺跡の分析」(阿久津1979)は、「資料編」の報告書(阿久津1978a)に対応する「本文編」及び「考察編」に位置付けられている。遺構の考察において土壌をⅠ～Ⅲ類に分類したⅢ類「10個以上の組み合わせ」の説明の中に、「2号は12個の壺形土器と甕形土器から成る。2号土壌は、土器の埋置が散在的で、明らかに直立してみられるのが1個、倒れているものが6個、残りは攪乱のため、その状況を判断することができない。甕形土器は1個独立してみられ、単独埋置と考えられるが、攪乱が著しくその状況を明確に把握することができない」という記述がある。土器の数を「12個」としているが、「壺形土器11個」に、「甕形土器1個」を加えた「12個」であるらしい。この「甕形土器」が具体的にどの土器を指示するのかは不明で、おそらくは16号土壌と混乱したと見られる。遺物の考察においては、2号土壌の土器が一覧表には「1～11」、挿図には「2-1～2-12」として掲載されている。ともに「2-2」は「壺形土器(人面部)」であり、一覧表には「1」に接合」と記載された。

『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』に掲載された「小野天神前遺跡」(阿久津1991)では、「2号—壺形土器11個(うち1個は人面付壺形土器である)」と記載されている。さらに、2号土壌から出土したことを前提に、「1つの土壌に10個以上の土器を埋置するもので、茨城県以北に多くみられるが、小野天神前遺跡では同類の組み合わせの中に1個ずつ人面付土器が置かれているのが特徴である」という分析の結果が導かれている。

当初は「2-1」と「同一個体の可能性がある」という指摘であったものが、あたかも同一個体であるかのように扱われ、事実反して「接合する」ことまでが記載されるようになった。おそらくは「同一個体の可能性がある」ことを根拠として、攪乱から出土した人面部破片には、2号土壌に帰属することを想定し、「2-2」という記号が与えられたのであろう。2号土壌から出土したと扱うことで、小野天神前遺跡では全ての人面付土器がそれぞれ10個以上の土器を埋置する土坑から出土したと分析されるに至っている。

2号土壌の土器「2-1」と人面部破片「2-2」は、同一個体と考えることができるのであろうか。2号土壌から出土した土器を全て観察すると、胎土・焼成・色調と、口縁部の大きさ、器壁の厚さ、器内面の調整等からは、

「2-10」とされた口縁部が「2-1」の欠落する口縁部に相当することが推定された。「2-10」に推定還元される口径は13cmほどである。一方、人面部破片「2-2」は、器壁も厚く、内面に粗い調整痕を残すことが、「2-1」の頸部からの連続とは考え難い。なによりも推定還元される口径が25cmほどと大きく、「2-1」の口頸部ではあり得ない。2号土壌の土器「2-1」と同一個体ではないと判断されることにより、人面部破片「2-2」は、2号土壌に帰属する根拠を失う。

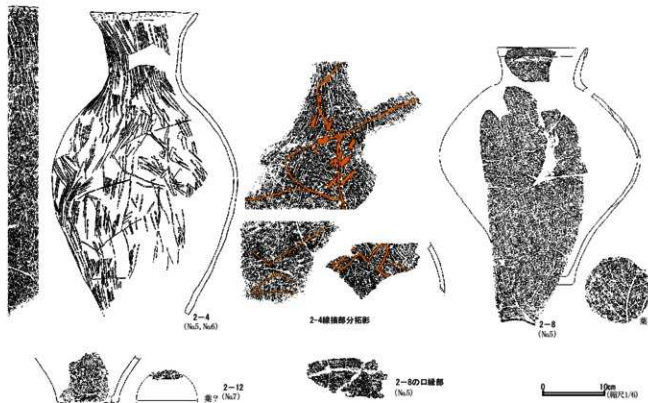
2A号土壌土器2-4 (第61図) 中型の壺形土器。口縁部は、平・単純口縁で、肥厚した口縁が指頭により押圧された痕跡を残す。口縁部から胴部まで、櫛歯状の条痕文が施されている。胴下部には篋状工具による細い線描があり、これは条痕文の前に施文されている。胴上部には棒状工具による太い線描があり、これは条痕文の後に施文された。未報告の破片にも線描の一部を見出したので、これを追加したが、それでも全体の形象は明らかでない。器内外面に炭化物の付着が認められる。

2A号土壌土器2-8 (第61図) 大型の壺形土器。口縁部は平・複合口縁で、単節斜縄文LRが施されている。口縁下は凹線状に窪む。胴部には、櫛歯状の条痕文が施されている。底面痕跡は木葉痕(クヌギ・裏面)。器内外面に炭化物の付着が認められる。

2A号土壌土器2-12 (第61図) 壺形土器の胴・底部の破片。胎土・色調、器面の状態は、2A号土壌土器2-4ではなく、2B号土壌2-7によく似る。攪乱により遊離したものか。

2B号土壌土器2-1 (第62図) 「2-10」として報告された口縁部が同一個体と識別され、器高が572mmほどに推定される大型の壺形土器である。口縁部は平・複合口縁で単節斜縄文LR、胴部は櫛歯状の条痕文が施されている。底面痕跡は木葉痕(トチノキ型・裏面、2重圧痕)。胎土には骨針を少量含む。器内外面に炭化物の付着が認められる。なお、報告書(阿久津1978a)にグリッド出土遺物として掲載された「D5-19」も同一個体の口縁部である。

2B号土壌土器2-3 (第62図) 小型の壺形土器。口縁部は波状の複合口縁である。波頂部が7箇所残存し、全体では10単位と推定される。口縁部は単節斜縄文LR、胴部は櫛歯状の条痕文が施されている。頸部と胴部の境界には、篋状工具で刺し切るように施文された刺突文が2



第61図 2A号土壌出土土器

列でめぐる。底面痕跡は木葉痕(トチノキ型・裏面)。胎土に金雲母を少量、骨針を多量に含む。頸部に補修孔が2孔4対であり、孔は全て器外面から穿たれている。器内外面に炭化物の付着が認められる。

2B号土壌土器2-5(第62図) 中型の壺形土器。口縁部は平・複合口縁で単節斜縄文LR、胴部にも同じ縄文が施されている。底面痕跡は木葉痕であったようにも見えるが、調整により消失し判然としない。胎土には骨針を少量含む。口唇部器内面にいくつかの剝離が観察された。

2B号土壌土器2-6(第62図) 中型の壺形土器。口縁部は平縁で、有段状に調整された複合口縁。口縁部は単節斜縄文LR、胴部は刷毛状の条痕文が縦位に施されている。底面痕跡は木葉痕(トチノキ型・裏面)。胎土には金雲母と骨針を含む。胴部に補修孔が5孔あり、孔は全て器外面から穿たれている。破片が欠損することから、土器の割れを挟む補修孔の対応には2通り(a・b)が考えられる。器面の軟弱な部分にネズミの囓り痕のような傷跡が観察された。

2B号土壌土器2-7(第62図) 中型の壺形土器。口頸部(2-7-B)は接合せず、底部を欠損する。単純口縁で、口唇部が押圧された微波状となる。口・頸部は全体的に撫で調

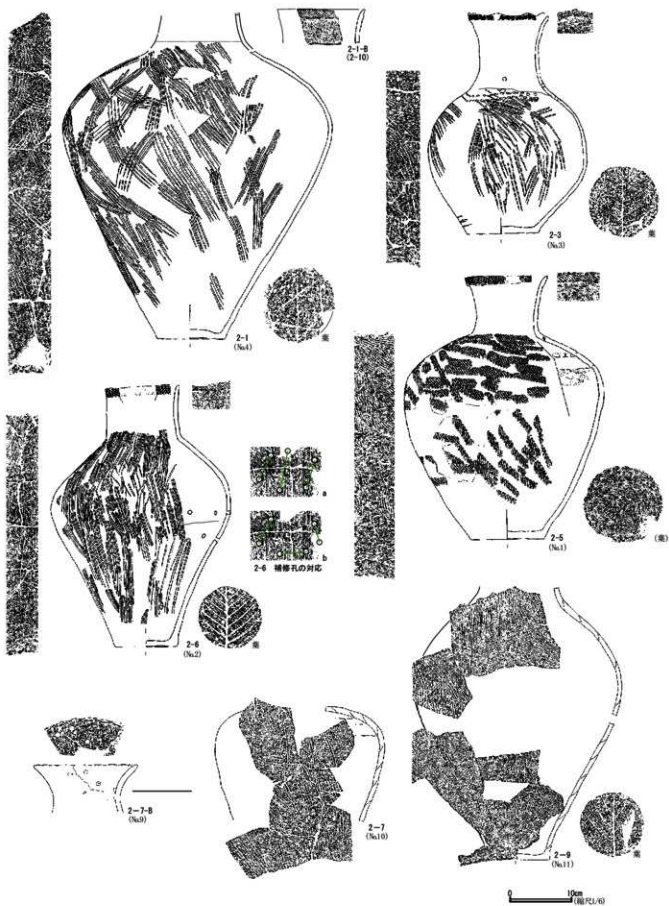
整、一部は磨き調整に近い。胴部は櫛歯状の条痕文が縦位に施されている。口頸部には、補修孔が5孔まで残存し、2孔3対の組合せが推定される。

2B号土壌土器2-9(第62図) 中型の壺形土器。口・頸部を欠損する。胴部には、櫛歯状・刷毛状の条痕文が縦位に施されている。底面痕跡は木葉痕(カシワ型・裏面)。器内外面に炭化物の付着が認められる。

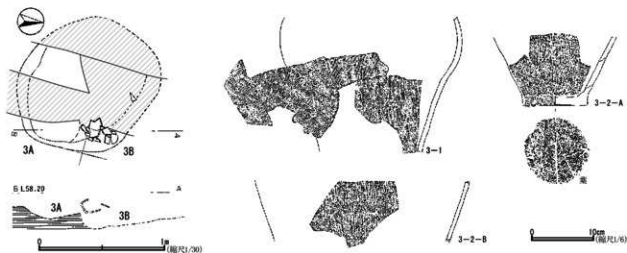
(3) 3A・B号土壌

遺構(第63図) 直径1mほどで「円形状」の土坑と推定されている。しかし、実測図の底面には段差があるようにも表現されていて判然としない。これを3A・3B号という2基の重複とすると、3A号は直径1mほどの浅い土坑、3B号はこれより一段深い土坑となり、土器は3B号に出土位置が記録されている。

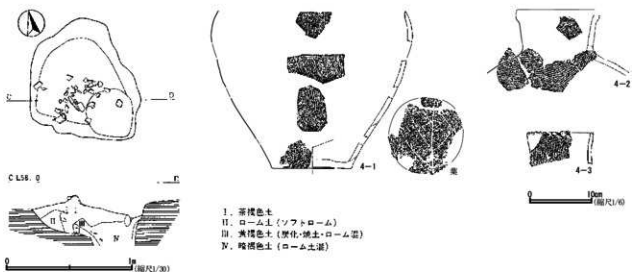
土器の出土状況 3号土壌の土器として報告されたのは2点であった。しかし、「3-2」として実測図が合成された底部と胴部破片は、条痕文や器面の質感、炭化物付着の有無などから別個体と識別され、これを底部「3-2-A」、胴部破片「3-2-B」として分離することにより、土器は3個体分と考えられる。破片の数が多いのは3-1



第62図 2B号土墳出土土器



第63図 3号土坑・出土土器



第64図 4号土坑・出土土器

- Ⅰ. 茶褐色土
 Ⅱ. ローム土（ソフトローム）
 Ⅲ. 黄褐色土（炭化・焼土・ローム混）
 Ⅳ. 暗褐色土（ローム土混）

であり、図示された以外にも破片が出土している。写真図版では、「3-2-A」の底面が西を向くようにも見えるが、その他の破片のほとんどは3-1と考えざるを得ないことから、埋設の姿勢は明らかでない。あるいは、第48B号土坑のような状況であったのか。そうすると、3A号には土壌墓の可能性が考えられることになるが、覆土の堆積については明らかでない。

土器3-1（第63図） 中型の壺形土器と推定される。多数が出土した破片の中には、口縁部及び底部は含まれておらず、胴部のみが残存する。胴部には、刷毛状の条痕文が縦位に施されている。胎土には骨針を極少量含む。器外面にはわずかに炭化物の付着が認められる。

土器3-2-A（第63図） 胴・底部の破片であり、底部は完存する。胴部には、刷毛状の条痕文が縦位に施されて

いる。底面痕跡は木葉痕（トチノキ型・裏面カ、2重圧痕）。焼成に良否によるのか、軟弱である。器内面に多量の炭化物が付着している。

土器3-2-B（第63図） 胴部の破片であり、残存部分の最大径320mm（残存率14%）と推定される。胴部には、刷毛状の条痕文が縦位に施されている。焼成は良い。器内外面に炭化物の付着は認められない。

(4) 4号土坑

遺構（第64図）「一部方形を呈し、北東面では不整形である。掘り込みは、U字型であるが土坑南東コーナーで径25センチメートル（引用註：図では40cmほどを測る）、深さ70センチメートル以上の掘り込みがみられる」（阿久津1979）と記載されており、これも縄文時代の土坑との重

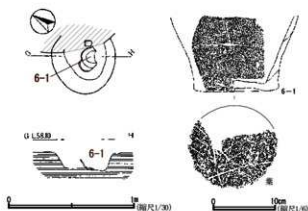
複が考えられる。覆土下部には大きなロームブロックが記録されており、掘削直後に埋め戻されたと思われることから、土壌墓の可能性はある。

土器の出土状況 ゴボウ耕作による擾乱を受けていないにも関わらず、土器は破片の状態ですら覆土中に散在し、土層断面図に記録された土器は、覆土上部に集中する。土坑底面に埋置された土器ではなく、墓の上部に供献された土器と考えられる。

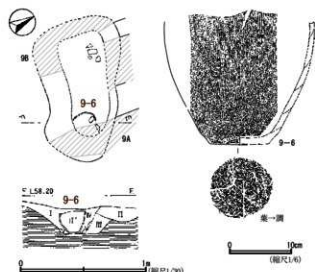
土器4-1 (第64図) 残存率の低い破片から推定復元されており、底部以外の法量は確実でない。胴-底部の破片が残存し、胴部には刷毛状の条痕文が縦位に施されている(一部の拓本を改変)。底面痕跡は木葉痕(クズ型・裏面)。胎土には骨針を多量に含む。胴部破片の器内外面に炭化物の付着が認められる。

土器4-2 (第64図) 口頸部の破片と、胴上部の破片が同一個体と識別された。口頸部の破片は、口唇部が残存しておらず、複合口縁の上部を欠く。口縁部には単節斜縄文LRが施されている。胴部の破片は、肩が張るように図化されていたが、もう少し緩やかな傾きが推定される(断面図を改変)。胴部にも同じ縄文が施文されている。胎土には金雲母と骨針をともに少量含む。

土器4-3 (第64図) 口頸部の破片。口唇部は指頭による押圧で微波状を呈する。口縁部には横位に、頸部には縦位に刷毛状の条痕文が施されている。胎土には骨針が認められず、4-1とは明らかに別個体である。



第65図 6号土坑・出土土器



- I. 赤褐色土層(ローム土層) Ⅲ. 黄褐色土(ローム土層)
 II. 暗褐色土層(ローム土層・土器片含む) Ⅳ. 黄褐色土(目より暗くローム土層)
 Ⅴ. 暗褐色土層(目より暗い) Ⅵ. 暗褐色土(目より暗くロームが多く混)

第66図 9号土坑・出土土器

(5) 6号土坑

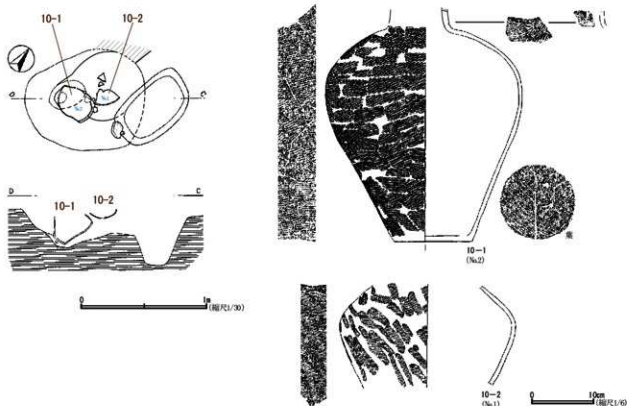
遺構 (第65図) 直径50cmほどの円形の土坑と推定される。堆積土層は記録されていない。

土器の出土状況 土坑底面に接して土器が正位の姿勢で検出されている。確認面からの深さは15cmほどであるが、「この状況から土坑上面は、これ(引用註:土坑底面)よりも30センチメートル以上ある」(阿久津1979)と推定されている。

土器6-1 (第65図) 胴-底部の破片。胴部には、細い櫛歯状の条痕文が縦位に施されている。底面痕跡は木葉痕(カシワ型あるいはクズ型・裏面・2重圧痕)。器内面の一部に炭化物の付着が認められる。

(6) 9A・B号土坑

遺構 (第66図) 東西1.15m、南北0.6mほどの規模で1つの土坑として図化されているが、南・北の壁が括れて平面が瓢状であることから、2基の土坑が重複すると考えられる。ここでは、東側を「9A号」、西側を「9B号」と呼ぶ。「土坑は、東側が深く、西にゆくに從って浅くなっており、土器は、その底部を深い部分の底辺に密着するように置かれている」(阿久津1979)とも記載されており、土器が埋置された9A号は、その「深い部分」を中心とした直径60cmほどの円形の土坑ではなかろうか。9B号にも土器破片の出土状況が図化されており、これは、グリッドの遺物として報告された「D5-16~18」に相当するのではないかと考えられる。同一個体と識別

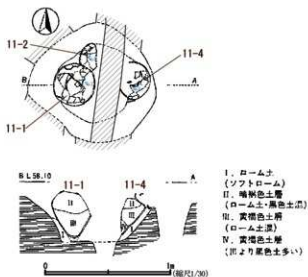


第67図 10号土坑・出土土器

される破片が9号土坑とD5グリッドから出土し、これらが接合する破片もある。しかし、9号土坑内であっても、出土位置が攪乱部分と見られることから、土坑に伴う可能性は考慮されても、確定できない。報告書（阿久津1978a）では9号土坑と12号土坑のセクション図の記号を取り違えていると判断し、訂正の上引用した。

土器の出土状況 土坑底面に接して土器が正位の姿勢で検出されている。

9A号土坑土器9-6（第66図） 胴-底部の破片であり、底部は完存する。胴部には、刷毛状の条痕文が縦位に施されている。底面痕跡は木葉痕（不明）、調整痕。器外面に炭化物の付着が認められる。



第68図 11号土坑

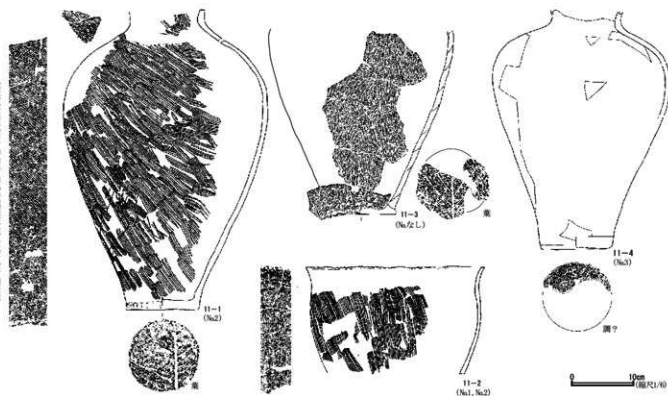
(7) 10号土坑

遺構（第67図） 「円形に近いもので、東を別な時期不明の土坑によって削られている」（阿久津1979）、さらに西側はゴボウ耕作により攪乱されており、北側の壁は検出されなかった。長軸は90cmほどであろうか。

土器の出土状況 土坑底面に埋置された状態で検出されたのは10-1であり、「倒位」と表現される角度ではあり、おそらくは傾斜する東壁に接して斜位に埋置され

たことが考えられる（エレベーション図のラインは接地面を通らない）。その姿勢は、底部が西、口縁部が東を向く。10-2は、土坑底面から10cm余浮いた位置で、器内面を上に向けた状態で検出されている。土層堆積断面図を欠くため、供献の土器、横位に土器が埋置された土坑の重複なども可能性としてはあるものの、これには、10-1に被せられていた蓋の転落を考慮しておきたい。

土器10-1（第67図） 中型の壺形土器。口-頸部を欠失



第69図 11号土坑出土土器

する。頸部は無文で、胴部との境界には、篋状工具で刺し切るように施文された刺突文がめぐる。胴部には、単節斜縄文LRが施されている。底面痕跡は木葉痕(トチノキ型・表面)。胎土には銀雲母(白雲母)と石英礫を多量に含み、このような特徴の胎土は10-1のみである。

土器 10-2(第67図) 中型の壺形土器。口・頸部と底部を欠損する。胴部には、無節斜縄文Lが施されている。胴上部の器内面に発泡状の剥落が観察された。

(8) 11号土坑

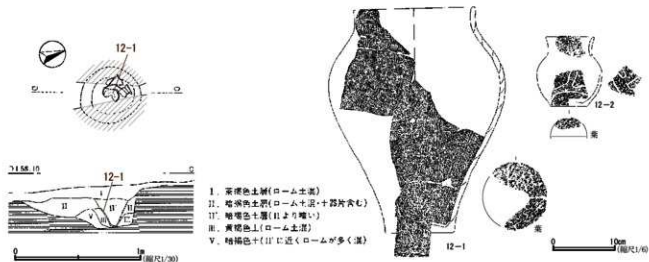
遺構(第68図) 東西1.0m、南北0.9mほどの楕円形で、確認面からの深さは35cm以上を測る。「土器底部は、底面に密着しており、土壌との間にはローム土をつめ込んでいる。この例は他の土壌にはみられず、当土壌が唯一である」(阿久津1979)と記載されており、土坑の掘削直後に、掘り上げたローム土で土器を固定したことが考えられる。

土器の出土状況 報告書(阿久津1978a)には11-1～3の3個体が報告されているが、出土状況が記録されたのは、11-1・2の2個体と、新たに「11-4」として追加する1個体の計3個体である。これは、出土状況の

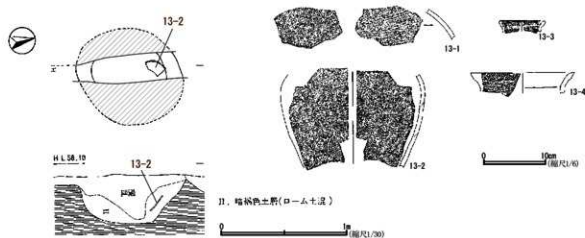
図・写真と残存部位の照合、注記から明らかになった。11-3は注記も「11土(引用註:11号土坑の略記)」とあるだけで、出土位置は明らかでない。3個体は、ほぼ正位の姿勢で埋置されており、11-1と11-4の間には、もう1個体分が正位で埋置できる空間が認められる。南北方向のゴボウ耕作がこの部分を攪乱しており、11-3は攪乱中から出土したものと見られる。埋置された土器は4個体であった。複数個体が正位で埋置された土坑は、この11号のみである。

土器 11-1(第69図) 器高が50cmを超えるかと推定される大型の壺形土器。口縁部を欠失し、頸部の破片と胴部は接合しない。頸・胴部には、刷毛状の条痕文が左上り斜位に施されている。胴下の一部には条痕文上に、右上り斜位の沈線も複数条が施文されている。底面痕跡は木葉痕(カンフ型あるいはクス型・表面)。器外面に発泡状の剥落、器内外面に炭化物の付着が認められる。

土器 11-2(第69図) 壺形土器。攪乱により口・胴部の半分以上と底部を欠失する。口唇部には、篋状工具による刻みが施されている。口・頸部は無文。胴部には、刷毛状の条痕文が縦位に施されている。口・胴上部の器外面に炭化物が付着し、胴下部は赤みを帯びる。



第70図 12号土坑・出土土器



第71図 13号土坑・出土土器

土器 11-3 (第69図) 壺形土器の胴・底部破片。胴部には、刷毛状の条痕文が縦位に施されている。底面痕跡は木葉痕(カシワ型・表面)。

土器 11-4 (第69図) 中型の壺形土器。口縁部を欠失する。頸-胴部は、撫で調整による無文である。底面には圧痕が観察されず、撫で調整が施されたと考えられる。器内外面に炭化物の付着が認められる。

(9) 12号土坑

遺構 (第70図) 直径50cmほどの円形の土坑と推定される。「土器底部付近にわずかにローム土で押えた痕跡がみられ、ローム土混じりの黄褐色土、同茶褐色土が周辺にみられる」(阿久津1979)。

土器の出土状況 12-1は、土坑底面に正位の姿勢で

埋置されていた。「確認された土器の中にもう1個の破片が確認されており、土坑の広さから考えても、2個が並ぶとは考えられず、むしろ合口していた可能性をもつ」(阿久津1979)と記述された「もう1個の破片」は、12-2なのであろうか。しかし、これが12-1と「合口」になることは、法量から考えてあり得ない。遺構外として報告された磨消縄文の浅鉢形土器(第82図2)は、同一個体の破片に「12土 フク土」と注記されている。

土器 12-1 (第70図) 中型の壺形土器で、他の壺形とは異なり、胴部に対して口頸部が大きいことから「大口壺」と呼ばれる形態である。口縁部から胴部にかけて、櫛歯状の条痕文が縦位に施されている。底面痕跡は木葉痕(カシワ型・表面)。器内外面に炭化物の付着が認められ、器外面が底部付近まで、器内面が器外面よりも上位まで

炭化物の付着した事例は、他に見ていない。

土器 12-2 (第70図) 小型精製の壺形土器。報告書(阿久津1978a)では胴長に復元されたが、ほぼ球胴と推定して図化した。口縁部には、わずかに縄文が施文されている。頸部は無文。胴部には、沈線区画の磨消縄文で文様が構成される。縄文は単節斜縄文LR。赤彩の痕跡は認められない。底面痕跡は木炭痕。

(10) 13号土壇

遺構 (第71図) 直径あるいは長軸85cmほどの円形あるいは楕円形の土坑と推定される。

土器の出土状況 13-2のみ出土位置が図化されたが、注記には「13土 カクラン」とある。「土器片は底面まで達せず、約5センチメートルほど離れてみられるが、土壇内に残された土をみると、ローム土混じりの褐色土がみられ、このことから、土器の位置は底面近くにあったものと判断した」(阿久津1979)と記述されているが、土層は、土器の位置を判断する根拠とはなり得ず、少なくとも再葬墓とは認め難い。土壇墓であろうか。

土器 13-1 (第71図) 壺形土器の胴部破片。刷毛状の条痕文が縦位に施されている。

土器 13-2 (第71図) 中型の壺形土器の胴部破片。撫で調整の無文。器外面に炭化物の付着が認められる。

土器 13-3 (第71図) 小型の壺形土器であろうか。遺物の所在が明らかでなく、観察できない。

土器 13-4 (第71図) 壺形土器の口縁部破片。器内面に稜をもって形成して口縁が外反する。平・複合口縁で、口縁部には付加条縄文第1種LR+Rが施されている。胎土には黒色粒子が目立つ。特に胎土の特徴が異なることから、13-1・2とは別個体と識別された。

(11) 14号土壇

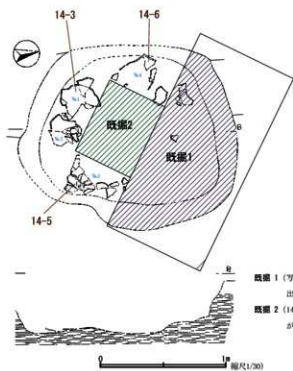
掘り出された土器 1974(昭和49)年秋にゴボウ収穫に伴い掘り出された土器については、『大宮町史』に1枚の写真が掲載され、「土壇内に6個の壺形土器などがあり、その中の1個は人面付土器」(阿久津1977)と解説されている。この写真は、掘り出した四倉英明ではなく、四倉一郎により撮影されたものである。撮影された写真は7枚が残されており、公表されたのは、その中の1枚であったことが明らかとなった。同じようなアングルで撮

影された2枚を除く5枚を掲載した(第72図写真1~5)。「大宮町史」に掲載されたのは写真1である。撮影された土器は、確かに6個体を数える。しかし、この中に人面付土器(14-1)は写り込んでいない。写真4の左寄りに写る土器の口頸部に、人面の後頭部に相当する面の可能性を考えても、現存する人面付土器の口頸部には一致しないのである。そもそも人面付土器が掘り出されたのであれば、それを中心に写真は撮影されることになったはずとも考えられた。また、土が付着しているため文様は明らかでないものの、大塚子之吉が所有し、後に茨城県立歴史館の所蔵となった2個体の壺形土器(14-2・4)も、写真には見出すことができない。これらは、人面付土器が掘り出される以前に見発された土器ではないか。この6個体の掘り出しを「既掘1」として、その位置を14号土壇の中に求めるならば、土壇の北東部であったと考えられる。これらの土器の所在は全く不明である。

人面付土器を含む3個体の掘り出しを「既掘2」として、その位置を14号土壇の中に求めるならば、土壇中央部に見られる空白の部分が考えられることになる。「14土 №4」と注記された破片が14-2の磨消縄文の欠落部に相当することも、これを支持する。「既掘1」と「既掘2」の時間差については明らかにし得ない。「むしろを上にかけていた。…(中略)…、むしろの上で子供達が遊んでいたため、破片化してしまい、(引用註:大塚が)とりあえず、水戸まで持ち帰り復元した」(阿久津1978a)と伝えられており、大塚が悪意にしていた古美術関連の技術者の手によって復元されたと考えられる。但し、人面付土器(14-1)の胴部については所在が不明である。

発掘調査で検出された土器は、14-3・5~7の4個体が報告されている。図化された出土位置—注記—土器番号を照合すると、「№2」に相当する土器が報告されておらず、その所在も不明である。また、14-7は「№3」と「№4」という離れた注記の破片が同一個体と識別され、その点数は少ない。これには、「既掘1」での回収から漏れた破片の可能性が考えられる。

「既掘1」が6個体、「既掘2」が3個体、発掘調査が確実に3個体であるならば、14号土壇には、12個体の土器が埋置されていたことになる。14号土壇に埋置された土器の個体数については、「壺6~7(人面付壺1個)」(阿久津1978b)、「7個以上」(阿久津1980a)と記載



既掘1 (写真1～5に写る土器の個体が
出土したと推定される部分)

既掘2 (14-1, 14-2, 14-4の土器の個体
が出土したと推定される部分)



写真 1



写真 2



写真 3

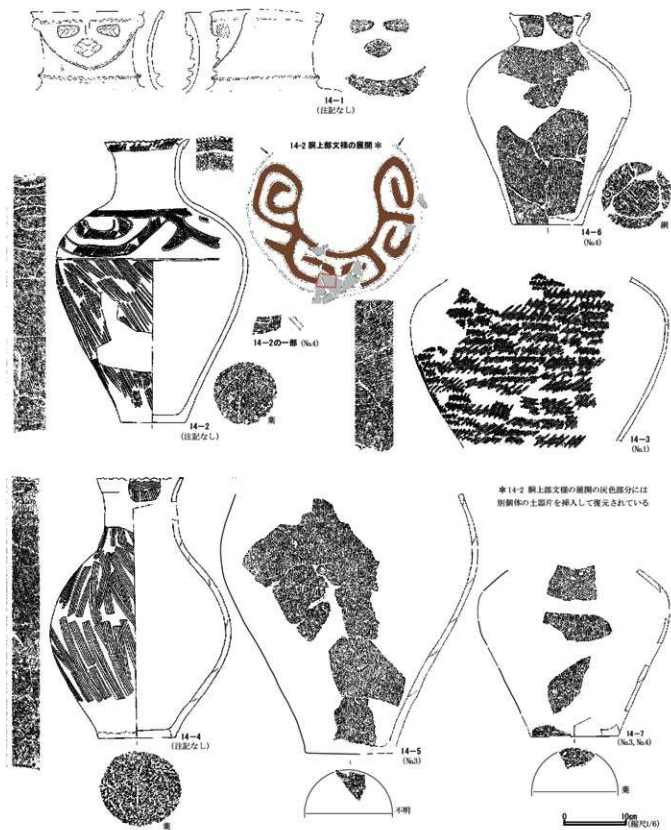


写真 4



写真 5

第72図 14号土坑



第73図 14号土壌出土土器

される一方で、「10個以上」と規定する「Ⅲ類」（阿久津1979）に分類されるなど混迷するが、最少でも12個体と捉えておきたい。

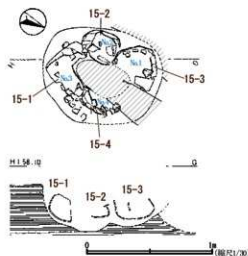
遺構（第72図）北東部は「既掘1」とした土器の掘り出しに伴い、壁が削られた可能性もあるが、南北1.5m、東西1.45mほどの楕円形の土坑が推定される。

土器の出土状況 「その状況をその当時撮影した写真により判断すると、複数の壺形土器群はいずれも直立して見られる」（阿久津1979）と記載されたが、同時に撮影された5枚の写真からは、土器群は基本的に横位に埋置されており、立ち気味に見える土器も、口頸部を別の土器の胴部にのせた状態である。「既掘1」の位置が確かならば、底部を東、口縁部を西に向けた姿勢が多い。細頸の壺形土器だけは、底部を北、口縁部を南に向けて、別の土器に口頸部をのせている。

発掘調査では、「底面に接して倒れた状態で出土している壺形土器は3個体分」（阿久津1979）と記載されたが、この「3個体分」の1個体が、姿勢など復元できそうもない14-7であるのか、あるいは「№2」であるのか定かでない。14-6は底部が北西、口縁部が南東を向く姿勢であったと推定される。

土器14-1（第73図）頸部に人面が造形された壺形土器であり、口頸部は接合の痕跡もなく全周し、胴部は極一部が残存する。頸部から胴部へは直角に近い角度で屈曲することから、肩の大きく張った胴部形態が推定される。平・複合口縁で、人面上部のみ複合口縁の下端に刻みが施されている。目・鼻・口・耳・顎を貼付により隆起させ、棒状工具による沈線や刻みが加えられる。左側の頬から顎（右頬に相当）には赤彩の痕跡が部分的に残る。左側の耳（右耳に相当）の孔は、押し出された粘土が塞ぐような状態であり、穿孔部に何かを通したことは考え難い。頸部には刻みを有する隆帯がめぐる。胴部には刷毛状の条痕文が横位に施されている。

土器14-2（第73図）中型の壺形土器。口唇部が棒状工具で刻まれて、口縁は微波状を呈する。複合口縁には、縄文が施された後、同じ棒状工具によると見られる刺突文がめぐる。頸部は無文。胴上部には沈線区画の磨消縄文により文様が構成されている。中央を「双対渦文」（鈴木正1978）と捉え、左右それぞれに渦状文を付加した構成と見ておきたい。縄文は単節斜縄文LR。欠落部分には、



第74図 15号土坑

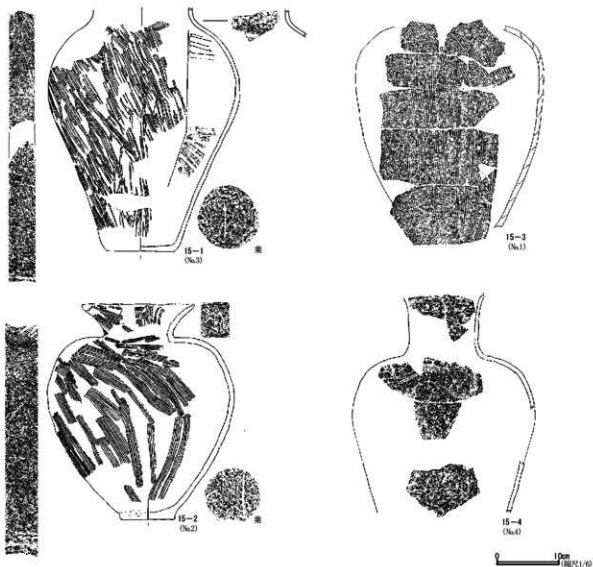
別個体の破片（14-4と見られる破片も含む）がはめ込まれている。これは古美術品の復元に採用されていた当時の手法であり、充填材も石膏とは異なる。沈線で区画された胴下部には、刷毛状の条痕文が右下りの斜位に施されている。底面痕跡は木葉痕（トチノキ型・表面か）。器内外面に炭化物の付着が認められる。

土器14-3（第73図）大型の壺形土器の胴部破片。胴部には、単節斜縄文LR（1段3条、付加彩気味）が横位に施されている。器内面には炭化物の付着が認められる。

土器14-4（第73図）中型の壺形土器。14-2と同じ手法で復元されている。指頭による口唇部への押圧で微波状を呈し、有段の複合口縁にはやや左上りの横位、頸・胴部には縦位を基本として刷毛状の条痕文が施されている。底面痕跡は木葉痕（カシワ型・表面、2重圧痕）。胎土にやや多量の骨針を含む。器外面には炭化物の付着が認められる。

土器14-5（第73図）大型の壺形土器の胴・底部。刷毛状の条痕文が縦位に施されている。施文が疎らで、半截竹管による並行沈線のように見える部分もある。底面痕跡は不明。器内面に炭化物の付着、器外面に変色が認められる。

土器14-6（第73図）小型の壺形土器。口唇部を山形に突出させた波状口縁である。有段の複合口縁には単節斜縄文LRが施されている。頸部は無文。胴部には、刷毛～櫛歯状の条痕文が施されている。胴下部は縦位、胴上部は左上り斜位で施文方向が異なる。底面痕跡は網代痕で、土坑から出土した土器では唯一の網代痕である。器



第75図 15号土壇出土土器

内面の下部には多量に、器外面の上部にはわずかに炭化物の付着が認められる。

土器 14-7 (第73図) 胴-底部の4点の破片が同一個体と識別された。残存率がかなり低いことから、法量や形態は確実ではない。胴部には刷毛状～櫛歯状の条痕文が施されており、これも胴下部は縦位、胴上部は斜位で施文方向が異なる。底面痕跡は木葉痕(ケズ型×裏面)。器内面に炭化物の付着が認められる。

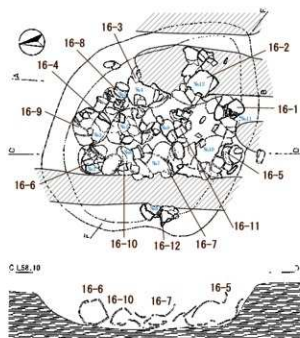
(12) 15号土壇

遺構 (第74図) 南北95cm、東西75cmほどの楕円形の土坑と推定される。底面の段差は、攪乱部分を掘り下げたために生じたものと見られる。

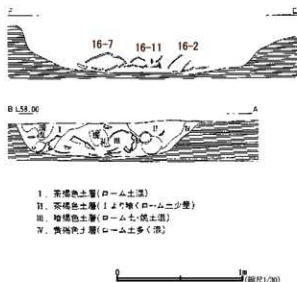
土器の出土状況 「3個の壺形土器がみられ、明らかに直立している状態を確認できたのが1個、残りの2個

はわずかに倒れた状態でみられ、土壇の広さから考えると、直立していたものが倒れたと判断しても良いと思われる」(阿久津1979)と記載されたが、土器は「No.1～4」という4個体の出土状況が図化されていた。「No.1～3」に該当する15-1～3は報告されたが、報告されなかった「No.4」を「15-4」として追加する。つまり、埋置された土器は4個体であった。また、「明らかに直立している状態」は、どの土器を指すのか。むしろ、エレベーション図や出土状況の写真からは、明らかに横位の状態の土器を認めることができる。15-1は、底部が西、口縁部が東を向く横位の姿勢である。「直立」を主張するためには、底面が接地した状態のエレベーション図が必要である。

土器 15-1 (第75図) 中型の壺形土器。口-頸部を欠失する。胴部には、刷毛状の条痕文がやや左上りの縦位に施文されている。底部付近は横位に、底面の周縁にも撫



第76図 16号土坑



- I. 茶褐色土層(ローム土層)
- II. 茶褐色土層(1より厚くローム土少量)
- III. 暗褐色土層(ローム土・灰土層)
- IV. 黄褐色土層(ローム土多く混)

0 10 (単位:20)

で調整がある。底面痕跡は木葉痕(トチノ型・表面)。器内外面には炭化物が付着し、器内面の付着範囲には発泡状の剥落も観察された。

土器 15-2 (第75図) 中型の壺形土器。平・単純口縁であり、大きく外反する。胴部は肩が張る形態。底部付近には成形の歪みが見られる。口・胴部には、刷毛状の条痕文が施されている。口頸部は縦位、肩に相当する胴上部は横位、胴中部は左上りの斜位、胴下部は縦位に施文の方向を変えている。底面痕跡は木葉痕(トチノ型・表面)。器外面には炭化物が付着し、器内面胴下部には変色が認められる。器壁が厚いことによるのか、充填材によるのか、持ち上げると重く感じる。

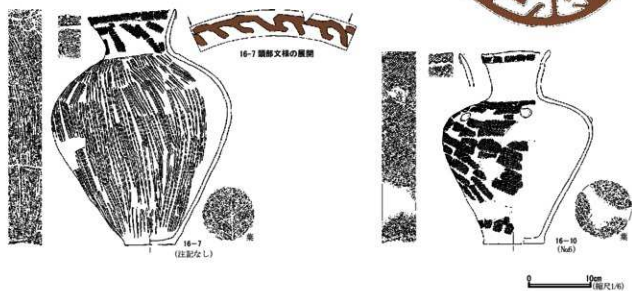
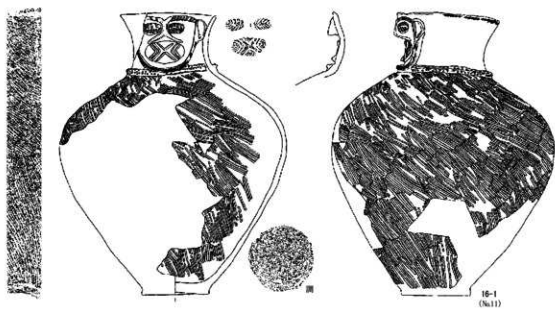
土器 15-3 (第75図) 中型の壺形土器。口・頸部と底部を欠失し、胴の一部が残存する。胴部は肩の張る形態。刷毛状の条痕文が施されており、肩に相当する胴上部は左上り斜位、胴中・下部は縦位に施文の方向を変えている。器内外面には炭化物の付着が認められる。

土器 15-4 (第75図) 中型の壺形土器。頸部から胴部にかけての破片である。頸部上端の破断面は摩滅しており、口縁部を欠損した後に、ここを擬口縁として使用されたと考えられる。頸部は無文。胴部の条痕文は刷毛状で、頸部との境界には横位に、以下には左上り・右上りの斜位で格子状を構成するように施文されている。器外面には炭化物の付着が認められる。

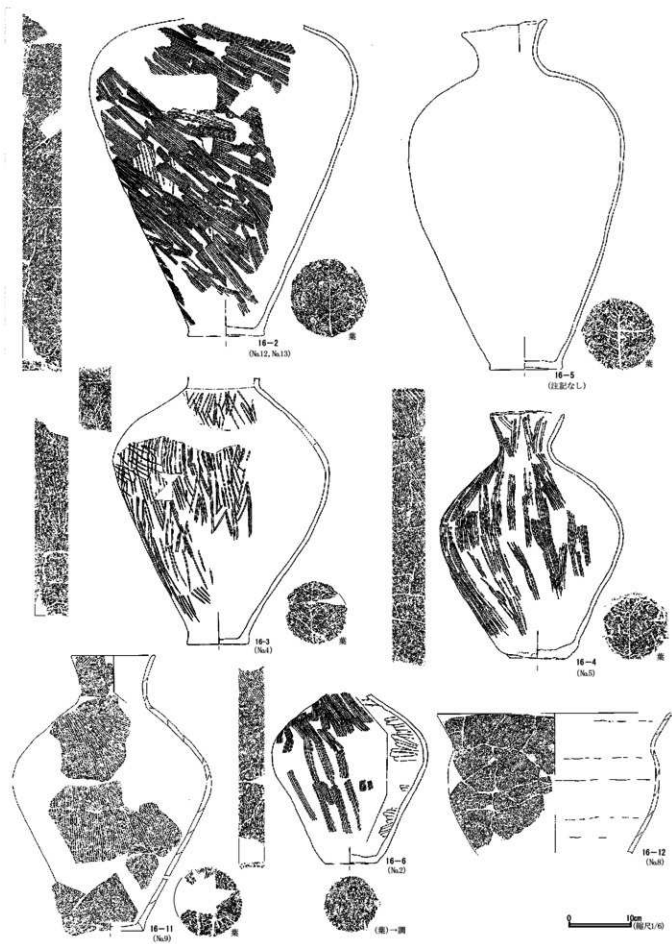
(13) 16号土坑

遺構 (第76図) 南北2.0m、東西1.6mほどの略楕円形の土坑と推定される。覆土は4層に分けられており、いずれの土層にもローム土を含む。Ⅲ層は、土坑中央部の凸状堆積であり、このような土層堆積は、第45B号土坑に共通する。埋置した土器を固定するために埋め戻された土層と想定される。

土器の出土状況 土坑の中央部には、ゴボウ収穫の攪乱が及ばず土器が良好に残されていた。密集して埋置された土器がゴボウの生育を妨げ、収穫に値する状況ではなかったのかもしれない。「16号土坑は13個(引用註:12の誤り)が埋置されており、11個が壺形土器、1個が甕形土器である。これらの土器はいずれも倒れた状態で出土しているが、その倒れ方は同方向にあることが確認された。この方向はいずれも南東方向に口縁部が向いており、土器の埋置状況が密であることから、自然に倒れていったのではなく、直立して土器を埋置した後、その中に土を一方から入れてゆくと、このような状態になる可能性がある」(阿久津1979)と記載されたが、再葬墓という複雑な葬送儀礼の締め括りが、調査当時のトレンチの埋め戻しのように描写されることに違和感を抱く。12個体の土器は全て横位に埋置されていた。16-1～11の11個体は、底部を北西、口縁部を南東に向けた姿勢であるが、16-12のみは、その逆方向を向く。土坑南端に位置



第77図 16号土壌出土土器(1)



第78図 16号土壌出土土器(2)

する16-1・2・5を起点として、先に埋置された土器の胴部に後の土器の口頸部をのせるようにして、北方向へと順次に埋置された。16-1・2・5の埋置順序は確定できないが、人面付土器の16-1が中央に位置する。

土器16-1 (第77図) 頸部に人面が造形された中型の壺形土器。平・単純口縁で、口唇部付近の一部に縄文が施されている。目・鼻・口・眉・耳・顎を貼付により隆起させて人面が造形され、棒状工具による沈線や刻みが加えられる。また、鼻・口・顎部分には、単節斜縄文LRが施されている(実測図の鼻・口部分には縄文が表現されていない)。目・鼻・口・眉・耳・顎と、左側の頬(右頬に相当)の一部、頸部の隆帯上には赤彩の痕跡が残る。右側の耳(左耳に相当)には穿孔がある。頸部の隆帯上には植物茎による刺突列が2・3条でめぐる。胴部には太い櫛歯状~刷毛状の条痕文が施されている。胴上部は左上りの斜位、胴下部はやや左上りの縦位に施文の方向を変える。底面は調整されており、胎土中の礫が動いた軌跡が沈線のように見える。頸部の器内面には、発泡状の剥落がある。

土器16-2 (第78図) 大型の壺形土器。口頸部を欠失する。胴部には、刷毛状の条痕文が左上り斜位に施されている。底面痕跡は木葉痕(カシワ型・裏面)。器内外面には炭化物の付着が認められる。

土器16-3 (第78図) 中型の壺形土器。口頸部を欠損し、胴上部の破片は接合しない。胴部には、太い櫛歯状の条痕文が縦位を基本に施されている。頸部との境界が沈線あるいは条痕のように図化されていたが、条痕文は頸部の撫で調整で途切れる。底面痕跡は木葉痕(カシワ型・表面)。器内外面には炭化物の付着が認められる。

土器16-4 (第78図) 中型の壺形土器。平・単純口縁で、頸部が細い。底部付近には、成形が潰れた歪みがある。口縁部から胴部にかけて、刷毛状の条痕文が縦位に施されている。底面痕跡は木葉痕(カシワ型・表面)。胎土には金雲母を極少量含む、赤色粒子が目立つ。

土器16-5 (第78図) 大型の壺形土器。平・単純口縁で、器内面に稜を形成した受け口状を呈する。全体が撫で調整による無文である。底面痕跡は木葉痕(カシワ型・表面)。器内面の底部付近に炭化物の付着が認められる。

土器16-6 (第78図) 中型の壺形土器。口・頸部を欠失する。頸部が細く、底部付近が歪む等、16-4に似る。胴部には、刷毛状の条痕文が施されている。胴上部は左上

り斜位、胴下部はやや左上りの縦位に施文方向を変える。底面痕跡は、主脈の痕跡の一部が残存するようにも観察されるが、削り調整によりほぼ消えている。胎土には赤色粒子が目立つ。極わずかに炭化物の付着が認められる。

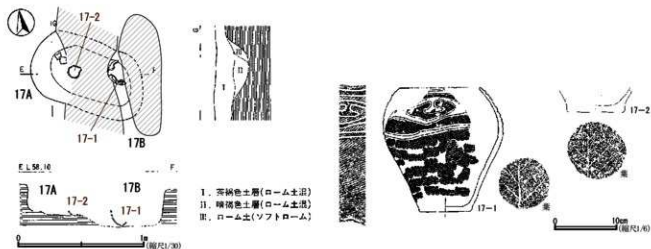
土器16-7 (第77図) 中型の壺形土器。口唇部には、棒状工具による刻みが施されている。平・複合口縁で、口縁部は縄文。頸部には、縄文が回転方向を変えて施文され、文様が構成される。単節斜縄文LR。胴部には、太い櫛歯状の条痕文が縦位に施文されている。底面痕跡は木葉痕(カシワ型・裏面)。胎土には極少量の骨針が含まれているように観察された。

土器16-8 (第77図) 小型精製の壺形土器。平・単純口縁で、胴部には沈線区画の磨消縄文で文様が構成される。上下の縄文帯を縦位の縄文帯が繋ぎ、さらに縄文帯が枝分かれした「ヒトデ文」である。単節斜縄文LR。縄文部には赤彩の痕跡も残る。口頸部の他、無文部は磨き調整。底面痕跡は木葉痕(カシワ型・表面)。胎土には泥岩片が目立つ。器内外面には炭化物の付着が認められる。

土器16-9 (第77図) 中型の壺形土器。平・複合口縁。口縁が微波状に図化されているのは、口唇部から器内面側に剥離が生じていることによる。但し、充填材の塗布により剥離面は観察できない。口縁直下は凹線状の撫で調整、頸部は無文。胴上部には、磨消縄文により文様が構成される。実測図では「S字文」のように見えるが、基本的には「双対渦文」が2単位で、一方の「双対渦文」に渦状文を付加した構成である。胴下部にも縄文が施されており、全て単節斜縄文LR。底面痕跡は木葉痕(トチノキ型・表面)。胎土には金雲母、骨針、赤色粒子、泥岩片をそれぞれ少量含む。胴上部に2孔2対の補修孔があり、縦方向のひび割れに対応したものと推定される。器外面には炭化物の付着、器内面には変色が認められた。

土器16-10 (第77図) 小型の壺形土器。平・複合口縁で、頸部は無文。口縁部と胴部には、縄文が施されている。口縁部と胴上部は横位、胴下部は左上り斜位に施文の方向を変える。単節斜縄文LR。縄文の施文後、肩に相当する部分に円形の突起が貼付されており、これは7単位の全てが残存する。底面痕跡は木葉痕(トチノキ型・裏面)。胎土には赤色粒子が目立ち、銀雲母(白雲母)を少量含む。器内外面には炭化物の付着が認められる。

土器16-11 (第78図) 中型の壺形土器。口・頸部、頸



第79図 17号土坑・出土土器

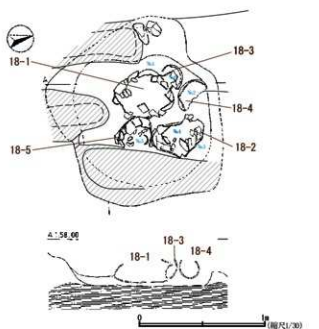
胴部、胴-底部の破片の実測図が合成されて、全体が復元されている。頸-胴部の破片は、観察できなかった。平・単純口縁で、口縁部には単節斜縄文LRが施文されている。頸部は無文。胴部には、刷毛状の条痕文が施されている。胴上部は左上り斜位、胴下部は縦位に施文の方向を変える。底面痕跡は木葉痕。器内外面には炭化物の付着が認められる。

土器16-12 (第78図) 甕形土器。胴下-底部を欠損する。胴下部は削り調整、他は横位の撫で調整により全体が無文である。器外面に炭化物の付着が認められる。

(14) 17A・B号土坑

遺構 (第79図) 「底面は二段掘り」(阿久津1979)と記載されたが、その段差部分が攪乱されていて、浅い西部と深い東部が1つの土坑であるのかは確認できていない。むしろ、川崎純徳等(1980)も指摘するように「底面を二段掘り」とするよりも、2基の土坑の重複と捉えておくべきと考える。その場合、西部を「17A号」、東部を「17B号」と呼ぶ。ともに直径50cm前後の略円形の土坑が推定される。

土器の出土状況 「土器はいずれも底面に接してみられ、特に一段目には小形の土器を置き、深い所に甕形土器を置いていた」(阿久津1979)と記載されたが、この「小形の土器」に相当する深鉢形土器(17-1)は、第17B号すなわち「深い所」から出土し、甕形土器と見られる底部は第17A号すなわち「一段目」から出土しており、記載とは全く逆である。エレベーション図にはやや傾くように図化されているが、ともに攪乱に接しており、正位の

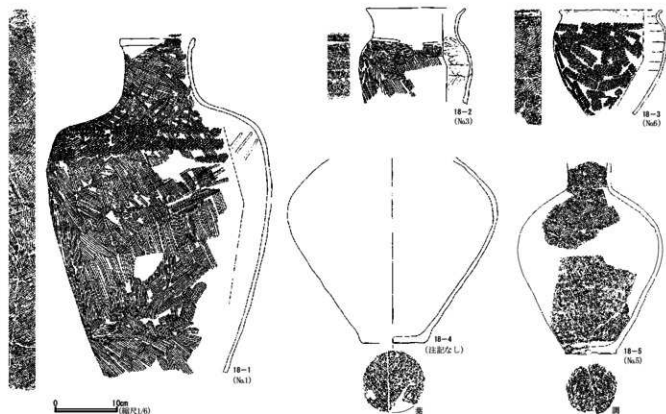


第80図 18号土坑

姿勢で埋置されていたものが動いたと考えられる。少なくとも横位ではない。

17A号土器土器17-2 (第79図) 未報告であった底部を図化し、「17-2」として追加する。残存する器外面は無文である。底面痕跡は木葉痕(カンフ型・裏面)。炭化物の付着は認められない。

17B号土器土器17-1 (第79図) 小型精製の深鉢形土器。平・単純口縁が内湾する。胴上部には横位、胴下部には左上り斜位に単節斜縄文LRが施文され、胴上部には磨消縄文で文様が構成される。無文部にも磨消された縄文の痕跡が観察され、細い無文帯により文様が描出された文字通りの磨消縄文である。底面痕跡は木葉痕(カン



第81図 18号土壇出土土器

ワ型・裏面)。明瞭な炭化物の付着は認められないが、器面の色調は黒ずんでいる。

(15) 18号土壇

遺構 (第80図) ゴボウ耕作の攪乱により「不整形」に見えており、本来は、直径1.3mほどの略円形の土壇ではなかったかと推定される。

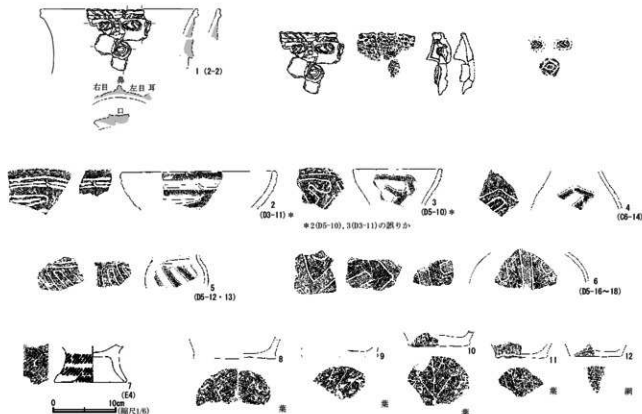
土器の出土状況 報告書(阿久津1978a)には壺2・甕2として4個体の土器が掲載されたが、「4個の壺形土器と1個の甕形土器から成り、いずれも倒置された状態で確認された」(阿久津1979)と記載されることになった。出土状況と注記からは、全部で6個体の土器があったと考えられ、「No.5」と注記された土器を「18-5」として追加したが、それでも「No.4」に相当する、おそらくは壺形土器の所在が不明である。底面に埋置されたのは、18-1・4・5と「No.4」の壺形土器が4個体ということになる。甕形土器の2個体は、18-3が壺形土器18-1の、18-2が壺形土器「No.4」の口縁部周辺にあり、土器の形状のままあるいは大破片の状態で、壺形土器の蓋と利用されたと推定される。『調査だより』No.7には、「18号土壇略図」(第

57図3)が描かれ、「壺の単棺状態が2つみられ、他は壺の口に裏でふたをしているようにしているのがみられ、壺と裏との合口と考えられます」と記述されており、調査中から蓋付として捉えられていた。18-1と18-5は底部が西、口縁部が東を向き、「No.4」も底部が北西、口縁部が南東を向く横位の姿勢である。18-4は、東壁の傾斜面に沿う斜位と推定され、底部が北東、口縁部が南西を向く。

土器18-1 (第81図) 大型の壺形土器。平・複合口縁で、口唇部と口縁部には縄文が施されている。頸部から胴部にかけては、貝殻条痕～刷毛状の条痕文で、頸上部が横位、頸下～胴部には左上り(密)・右上り(疎)の格子状、胴部でも段階ごとに方向を少しずつ変えながら施文される。胴上部には、条痕文の上に単節斜縄文LR(0段多糸)も施文された。胎土には赤色粒子が目立つ。炭化物の付着は全く認められない。

土器18-2 (第81図) 小型の甕形土器。平・単純口縁で、頸部が長い。口・頸部は、横方向の撫で調整による無文。胴部には、刷毛状の条痕文が多方向に施文されている。器外面に炭化物の付着が認められる。

土器18-3 (第81図) 小型の甕形土器。平・単純口縁



第82図 遺構外出土遺物

で、頸部が短い。口-頸部は、横方向の撫で調整により無文。胴部には、単節斜縄文LRと、一部に結節文が施文されている。結節文が観察されたのは、この個体のみであった。器外面に炭化物の付着が認められる。

土器 18-4 (第81図) 中型の壺形土器。口-頸部を欠失する。胴部は、撫で調整による無文で、発泡状の剥落が広い範囲に密集する。底面痕跡は木葉痕(トチノキ型・表面)。炭化物の付着は全く認められない。

土器 18-5 (第81図) 中型の壺形土器。口縁部を欠失する。頸部は、撫で調整による無文。胴上部には、無節斜縄文Lが、頸部との境界付近は横位、それ以下は斜位に施文されている。胴下部及び底面は、磨き〜撫で調整。炭化物の付着は全く認められない。

18号土壇から出土した5個体の土器は、壺形土器の蓋として埋置された推定される2個体の甕形土器には炭化物の付着が認められ、土坑底面に埋置された3個体の壺形土器には、炭化物の付着が全く認められない。

(16) 遺構外

2号土壇「2-2」として報告されてきた人面部破片と、グリッド出土遺物として掲載された土器の一部、未報告

であった底部破片の一部を「遺構外」の土器として追加した(第82図)。

1 2号土壇「2-2」として報告されてきた人面部破片。口唇部付近の器外面・器内面それぞれで口径を復元し、誤差が僅かであったことから、口径を250mm(残存率12%)と推定した。超大型の壺形土器、あるいは「広口壺」と考えられる。口唇部には刻みが施され、人面層上の口縁部には左上り斜位の沈線が施されている。これと対象形で右上り斜位の沈線も施されていたように見えるが、明瞭ではない。

破断面に観察された造形の痕跡は、顔面を構成する個々の部品を土器の頸部に直接貼付したというのではなく、土台となる顔面部全体を頸部に接合したと考えられるものであった。特に、口部分を含む下半部は、顔面造形の塊の一部が器内面へ続くように観察され、縄文時代の注口土器の成形が想起された。つまり、既に成形された頸部に孔を穿ち、その孔に顔面部裏側の一部を嵌め込むようにして接合されたのではないかと想定された。器内面には粗く調整した刮りに伴う擦痕が明瞭であり、これは、顔面部の接合に伴うものではないかと考えられたが、他の部分の状態が不明なことから、確実ではない。

第8表 小野天神前遺跡第1次調査出土土器注記一覧表

発掘区	土層	注記	備考	発掘区	土層	注記	備考	発掘区	土層	注記	備考		
第55区	SK1	1-1	R006 1号土		第56区	SK11	11-2	R006 11土 黒1	破片多数	第77区	SK16	16-3	R006 16土 黒4
		1-2	R006 2土 黒5				16-4	R006 16土 黒5					
		2-1	R006 2土 黒6	破片多数			16-5	片記なし					
		2-2	R006 2土 カクラン	(上層部破片)			16-6	R006 16土 黒2					
第61区	SK28	2-8	R006 2土 黒5		第78区	SK12	12-1	R006 12土 黒3	表面片多数	第79区	SK17	17-2	R006 17号土
		2-12	R006 2土 黒7	(2-7の底面片)			12-2	R006 12土 フク土	17-3			R006 16土 黒3	
		2-1	R006 2土 黒4				12-3	R006 12土 フク土	17-4			片記なし	
		2-18	R006 2土	(報告書2-10)			12-4	R006 C-4 土層	底層破片			16-10	R006 16土 黒6
第62区	SK3	3-1	R006 3号土 黒3		第79区	SK13	13-1	R006 13土 カクラン		第80区	SK18	18-1	R006 18号土 黒1
		3-2	R006 2土 黒1				13-2	R006 13土 カクラン	18-2			R006 18土 黒3	
		3-3	R006 2号土 黒3				13-3	遺物なし	18-3			R006 18土 黒6	
		3-4	R006 2土 カクラン				13-4	R006 13土 カクラン	18-4			片記なし	
第63区	SK3	3-4	R006 3号土		第81区	SK18	14-1	片記なし	人面付	第82区	遺物なし	12-2	R006 D-5 カクラン
		3-5	R006 2土 黒1				14-2	片記なし	203(10-11)			R006 D-5 カクラン	
		3-6	R006 2号土 黒3				14-3	片記なし	146			R006 14土 黒4	
		3-7	R006 2土 黒10				14-4	片記なし	309(10-10)			R006 D-5 土層	
第64区	SK4	4-1	R006 4号土		第82区	遺物なし	14-5	R006 14土 黒3		203(10-11)	R006 D-5 カクラン	大破片	
		4-2	R006 4号土				14-6	R006 14土 黒4	147			R006 14土 黒3	小破片
		4-3	R006 4号土				14-7	R006 14土 黒4	475(14)			R006 C-6 土層	
		4-4	R006 4号土				14-8	R006 14土 フク土	536(12-13)			R006 D-5 カクラン	
第65区	SK6	6-1	R006 6号土		第85区	SK15	15-1	R006 15土 黒3		605(10-10)	R006 9土 フク土	破片7点あり	
		6-2	R006 6号土				15-2	R006 15土 黒2	15-3			R006 15土 黒1	破片5点あり
第66区	SK9	9-1	R006 9号土		第77区	SK16	16-1	R006 16土 黒1	表面片多数	7(8)	R006 F-4 土層		
		9-2	R006 9号土				16-2	R006 16土 黒2	8			R006 C-6 土層	
第67区	SK10	10-1	R006 10号土	上層の破片	第78区	SK16	16-1	R006 16土 黒1	人面付	9	R006 D-4 土層		
		10-2	R006 10号土				16-2	R006 16土 黒2	10			R006 C-5 土層	
第68区	SK11	11-1	R006 11号土		第78区	SK16	16-2	R006 16土 黒1		11	R006 E-6 カクラン		
		11-2	R006 11号土				16-3	R006 16土 黒3	12			R006 D-5 カクラン	

目・鼻・口・眉・耳には沈線が加えられる。顔面が薄く赤みを帯びて見えることから、赤彩されていたことが考えられたが、これも確実ではない。胎土には、角閃石であろうか、黒色粒子が目立つ。

2 「D3-11」という番号で報告されたが、注記は「D-5 カクラン」であり、出土位置を3 (D5-10) と取り違えている。同一個体の破片の注記が「12土 フク土」であり、D5グリッドに位置する12号土層に帰属した土器ではなかった。浅鉢形土器として図化したのが、その口径244mmは、浅鉢形土器12-1の口径180mmを覆うことが可能であり、正位で埋置された12-1の蓋として利用されたことも考えられる。体部には、単節斜縄文LRが施文され、細い無文帯のまわりに磨消縄文で宇文系統の文様が構成される。器内面は磨き〜撫で調整。赤彩の痕跡、炭化物の付着はともに認められない。

3 「D5-10」という番号で報告されたが、注記は「D3 2層」であり、出土位置を2 (D3-11) と取り違えている。D3グリッドには、再葬墓が検出されていない。小型精製の鉢形土器であり、底部を欠損する。体部には、沈線区画の磨消縄文で文様が構成される。縄文は、単節斜縄文LRで、施文の方向を変えながら沈線区画内を充填している。無文部に黒色の付着物が認められ、これは塗布されていたものかもしれない。器内面は撫で調整。胎土には金雲母(?)を含む。

4 C6グリッドから出土した。C6グリッドには、再葬

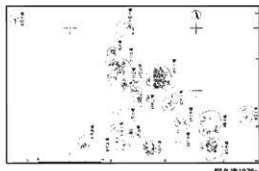
墓が検出されておらず、最も近いのはC5グリッド西側の4号土層である。小型精製の壺形土器の胴部破片。沈線区画の磨消縄文で文様が構成される。縄文は、細かな単節斜縄文LRで、施文の方向を変えながら沈線区画内を充填している。縄文部に赤彩の痕跡がわずかに残る。

5 D5グリッドから出土した。D5グリッドには、再葬墓の1-2号土層が位置する。小型精製の広口壺形土器の胴部破片である。沈線区画の磨消縄文で文様が構成される。縄文は、単節斜縄文LRで、施文の方向を変えながら沈線区画内を充填している。縄文部に赤彩の痕跡が窺えるが、確実ではない。

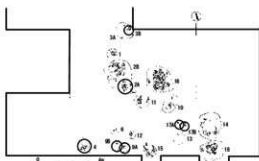
6 同一個体と識別された7点に「9土 フク土」、5点に「D-5 カクラン」の注記があり、9号土層から出土した破片とD5グリッドの破片の接合も認められる。D5グリッドは、9号土層が位置するC5グリッド南端から3m以上は離れており、ゴボウ耕作の南北方向に破片が移動したことが考えられる。破片数も多い9号土層に帰属したことを想定したくなるが、9号土層であっても西側の視乱部分から出土したと見られることから、可能性は考慮しても、確定することはできない。小型精製の壺形土器の胴部破片である。沈線区画の磨消縄文で文様が構成される。縄文は、単節斜縄文LRで、施文の方向を変えながら沈線区画内を充填している。縄文部に赤彩の痕跡が明瞭に残る。胎土には赤色粒子が目立つ。

7 F4グリッドの表土から出土しており、北東群の再

阿久津1979			鈴木2023(本番)		
土坑番号	土葬数	土葬姿勢	土坑番号	埋置土葬数	土葬姿勢
1号土壙	1	仰置	1号	1	仰置
2号土壙	12	直立・仰置	2号	2	仰置
			3号	0	仰置
			4号	0	仰置
3号土壙	2	---	5号	---	---
4号土壙	3	---	6号	3	仰置
			7号	3	仰置中
5号土壙	---	---	8号	---	---
6号土壙	1	直立	9号	1	直立
7号土壙	---	---	10号	---	---
8号土壙	---	---	11号	1	直立
9号土壙	埋置	直立	12号	1	直立
10号土壙	2	直立	13号	1	仰置
11号土壙	3	直立	14号	1	直立
12号土壙	2	直立	15号	1	直立
13号土壙	4	---	16号	3	仰置中
14号土壙	10以上	直立・仰置	17号	12	仰置
15号土壙	3	直立	18号	4	仰置
16号土壙	12	直立	19号	12	仰置
17号土壙	2	直立	20号	1	直立
			21号	1	直立
18号土壙	3	仰置	22号	4	埋置・仰置
19号土壙	---	---	23号	---	---
20号土壙	---	---	24号	---	---
			25号	---	---
			26号	---	---
			27号	---	---
			28号	---	---
			29号	---	---
			30号	---	---
			31号	---	---
			32号	---	---
			33号	---	---
			34号	---	---
			35号	---	---
			36号	---	---
			37号	---	---
			38号	---	---
			39号	---	---
			40号	---	---
			41号	---	---
			42号	---	---
			43号	---	---
			44号	---	---
			45号	---	---
			46号	---	---
			47号	---	---
			48号	---	---
			49号	---	---
			50号	---	---
			51号	---	---
			52号	---	---
			53号	---	---
			54号	---	---
			55号	---	---
			56号	---	---
			57号	---	---
			58号	---	---
			59号	---	---
			60号	---	---
			61号	---	---
			62号	---	---
			63号	---	---
			64号	---	---
			65号	---	---
			66号	---	---
			67号	---	---
			68号	---	---
			69号	---	---
			70号	---	---
			71号	---	---
			72号	---	---
			73号	---	---
			74号	---	---
			75号	---	---
			76号	---	---
			77号	---	---
			78号	---	---
			79号	---	---
			80号	---	---
			81号	---	---
			82号	---	---
			83号	---	---
			84号	---	---
			85号	---	---
			86号	---	---
			87号	---	---
			88号	---	---
			89号	---	---
			90号	---	---
			91号	---	---
			92号	---	---
			93号	---	---
			94号	---	---
			95号	---	---
			96号	---	---
			97号	---	---
			98号	---	---
			99号	---	---
			100号	---	---



阿久津1979a



鈴木2023(本番)

第83図 第1次調査区の報告と再検討

については、再葬墓とともに分布を検討する確たる根拠は持たない。なお、1978年には、「他の再葬墓跡にみられるような管玉は見られず」(阿久津1978c)と記載されていた副葬品について、1988年には「16号土壙壺形土器内から、滑石製白玉2個が確認された」(阿久津・安田1988)、1991年にも「16号土壙2号壺形土器内から2個の滑石製白玉が出土している」(阿久津1991)と記述されるが、これについては確認できなかった。

以上のように検討してきた重複土坑の分割、土坑底面に埋置された土器の個体数、埋置の姿勢、蓋の個体数について、報告書(阿久津1978a・1979)との変更点を明示するため、第83図にまとめた。変更が認められなかったのは、6号土壙のみである。

6 土坑の分類

第1次調査区を再検討した土坑と第2次調査区から検出された土坑を、まず次のように分類する。

I類 土器が土坑底面に埋置された状態で検出される。再葬墓と考えられるもの。

II類 土器が土坑底面には埋置されておらず、覆土中から検出される。土壙墓と考えられるもの。第1次調査の4・13号、第2次調査の第48・81号が相当し、第1次

調査の3A号にも土壙墓の可能性が考えられた。日立市十王堂遺跡(清水他2010)に1基、桜川市青木北原遺跡(片野他2007)に6基など類型が報告されている。十王堂遺跡の1基は長軸1.45mの楕円形、青木北原遺跡の6基は直径・長軸1.2～1.56mの円形・楕円形である。

次にI類を、埋置された土器の数量を基準として細分する。

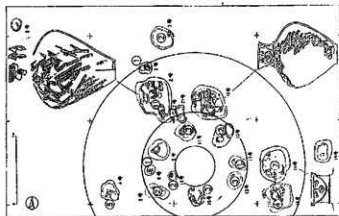
IA類 1個体の土器を埋置する。第1次調査の1・6・9A・10・12・17A・17B号、第2次調査の第45A・46・47A・47B・76号が相当し、第1次調査の9B号、第2次調査の第48B号にもIA類の可能性が考えられた。

IB類 2・3個体(IA類のほぼ倍數)の土器を埋置する。第1次調査の2A号が相当し、3B号にもIB類の可能性が考えられた。

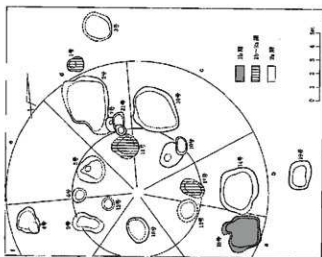
IC類 4～7個体(IB類のほぼ倍數)の土器を埋置する。第1次調査の2B・11・15・18号が相当する。

ID類 8～14個体(IC類の倍數)の土器を埋置する。第1次調査の16号、第2次調査の第45B号が相当し、第1次調査の14号にもID類の可能性が考えられた。

IA類は、9A・9B号、17A・17B号、47A・47B号というIA類どうしの重複とともに、第45A・45B号というID類との重複が認められる。IB類には、2A・2B



1. 石川1989



2. 設楽2008

第84図 第1次調査区の分析事例

号というI C類との重複がある。

さらに、土器が埋置された姿勢から、それぞれが細分されることになるが、「立位」とも表現される正位の姿勢はI A類と、I C類の11号土壇に限られ、逆位はI C類の第45B号にのみ出現する特異な姿勢である。小野天神前遺跡から那珂川上流方向へ8.5kmほどに位置する宿尻遺跡(鈴木編2022)の再葬墓にも、この逆位の姿勢が含まれていることには注意をしておきたい。

7 再葬墓群の成立と展開

小野天神前遺跡の第1次調査区から検出された再葬墓群については、既に石川日出志(1989)と設楽博己(2008)による分析がある。

石川は、「弥生時代中期初頭の茨城県小野天神前遺跡の墓坑群が小規模ながら2重の環状配列に推定できて興味深い」と指摘し、「大胆至極だがそうすると内帯は埋置土器が3個以下の小規模墓坑のみ、外帯は唯一前期に属する第18号墓坑を含めて土器4個以上の大形墓坑が主となり、顔面付土器各1個を持つ墓坑3基も外帯に属し、さらに周辺に小規模墓坑が散在するという構成になる」と分析した(第84図1)。

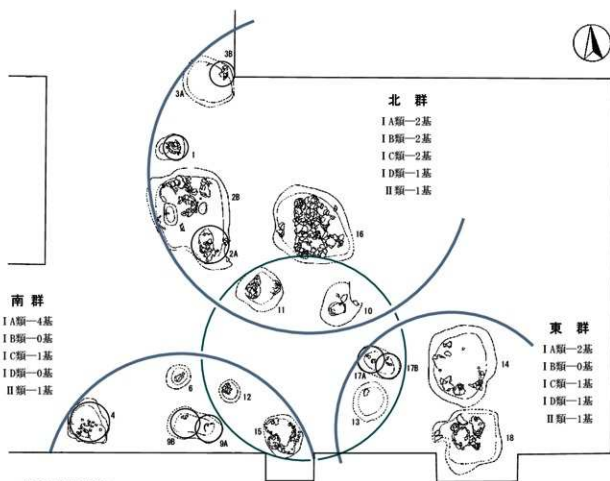
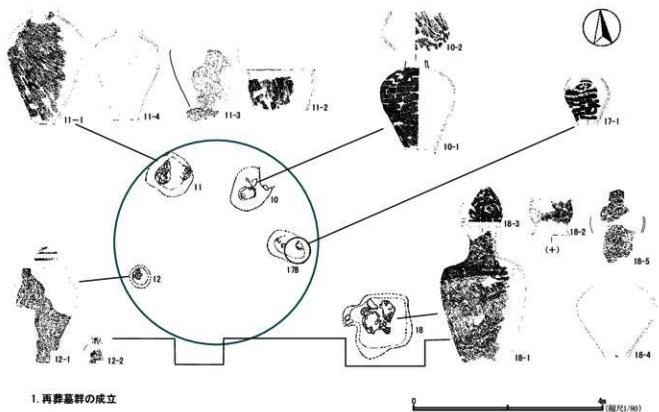
設楽は、石川による内帯・外帯を下敷きとしながら、「大小のペアがよくわかるa～dの4群は、隣接関係からa・bとc・dの2群にわけられるようである。これらは2期の土坑が大半だが、18号土坑が1a期ないし1b期にさかのぼるほか、1・11・17号土坑が相対的に古く、1b期新段階もしくはそれに近い年代が与えられる。時期

の古い土坑は、内帯と外帯の両者ともに存在しているので、内帯と外帯は先後関係ではなく、同時並行で形成されていったことを考えさせると分析した(第84図2)。また、「時期は1b期が2基、1b期ないし2期が2基、2期が8基、時期不明が3基である」とも記述しており、「1b期」すなわち「弥生前期」に遡る複数の再葬墓を認めている。

第1次調査区の再検討と第2次調査区における新たな再葬墓群の検出をもとに、小野天神前遺跡における再葬墓群の成立と展開について、考察を加えてみたい。

再葬墓に埋置された土器は、ほとんどが壺形で構成されるが、単体の深鉢形が埋置された17B号があり、11・16・18号には表形が組成する。そのうち条痕文の表形の18号は石川、設楽ともに前期、同じく条痕文の表形の11号、磨消縄文の深鉢形の17B号は設楽が前期に遡ることを指摘した。11号は、小野天神前遺跡において複数個体の土器が正位の姿勢で埋置された唯一の再葬墓でもある。

別個体の土器を蓋として組合わせた蓋付は稀であるが、その蓋付が18号に2組、10号と12号にそれぞれ1組認められた。12号は、大型「広口壺」という器種に工字文系の口縁部文様の浅鉢形という組み合わせである。条痕文の大型「広口壺」は、設楽が「1a期～1b期古段階」に位置付けた福島県鳥内遺跡(目黒編1998)の18号土坑等に組成する。10号は、埋置された壺形の頸・胸部境界に刺し切りの刺突列が施文されており、この施文も鳥内遺跡18号土坑に見い出せる。10・12号の2基について



第85図 北東群再葬墓の成立と展開

ても、前期に遡ることが考えられてくる。

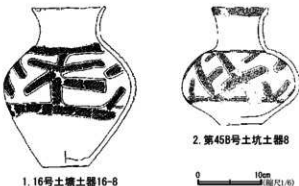
壺形以外の器種や「広口壺」、蓋付の組成、複数個体の正位という姿勢から抽出された再葬墓を、相対的に旧く位置付けることは、泉坂下遺跡(鈴木編2011)において、再葬墓の切り合い関係を基礎として、大型壺形の渦状文の変遷から導かれた「泉坂下Ⅰ・Ⅱ期」の遺跡編年とも整合する。泉坂下遺跡では、「広口壺」の組成、蓋付の組成複数個体の正位という姿勢が「泉坂下Ⅰ期」とした第4号墓壇にのみ認められている。一方で、設楽が「1b～2a期」とした1号土壇は、条痕文のみの壺形が単体であり、時期を限定することは難しい。

10・11・12・17B・18号5基を前期に遡る成立期の再葬群として捉えると、その墓域は、10・11・12・17B号の4基が直径4mほどの範囲に環状に並び、18号がこれから南東方向にやや離れた(第85図1)。10・12・17B号がⅠA類、11・18号がⅠC類で、ⅠB・ⅠD・Ⅱ類は含まない。直径4mほどの範囲は石川の「内帯」に相当する。「内帯」の内側に余地がほとんどないこともあって、中期の再葬墓群は、成立期の墓域を中心として「外帯」方向へと展開することになる。なお、「2-2」として報告されていた人面部破片は、顎部分の造形が14-1や16-1のような隆帯ではなく、顔面の一部として連続することを古相と捉え、「広口壺」に付属したと推定されることから、この成立期のものではないかと考えている。

成立期の再葬墓群を分離すると遺構間の距離関係がより明瞭となり、その後の再葬墓群は、成立期の再葬墓を起点として、大きくは北・東・南の3方向に分かれて展開したことが捉えられる(第85図2)。

北群は、10・11号を起点として、1・2A・2B・3A・3B・16号の8基で構成され、2A・2B号、3A・3B号という重複する2組を含む。E4グリッドは未調査と考えられたので群構成の北端は明らかでない。土壇の分類では、ⅠA類2基、ⅠB類2基、ⅠC類2基、ⅠD類1基、Ⅱ類1基となる。ⅠD類とした16号土壇には、12個体が埋置され、人面付土器1個体を含む。埋置の姿勢は、成立期の11号のみが4個体とも正位で、他は全て横位である。

東群は、17B・18号を起点として、13・14・17A号の5基で構成され、17A・17B号という重複する1組を含む。南端が未調査のため明らかでなく、さらに数基が加わる可能性が大きい。土壇の分類では、ⅠA類2基、



第86図 小型精製壺形土器の変遷

ⅠC類1基、ⅠD類1基、Ⅱ類1基となる。ⅠD類とした14号土壇には、少なくとも12個体が埋置されていたと推定され、人面付土器1個体を含む。埋置の姿勢は、ⅠA類の17A・17B号が正位、他は全て横位である。

南群は、12号を起点として、4・6・9A・9B・15号の6基で構成され、9A・9B号という重複する1組を含む。南端が未調査のため明らかでなく、北・東群の構成と分布からは、特にⅠC類とした15号土壇の南側にⅠD類相当の再葬墓が存在するかを確認することが課題として残されている。土壇の分類では、ⅠA類4基、ⅠC類1基、Ⅱ類1基となる。埋置の姿勢は、ⅠA類のうち3基が正位、他は全て横位である。

第1次調査区に検出された再葬墓群は、大きく3つの群に分かれて展開し、墓域の全体が形成されたことが考えられた。このような再葬墓群について、「分節化した大型の墓域をもつ弥生再葬墓は、一つの埋葬小群を一つの居住集団の墓域にあて、墓地全体を近隣小集団の共同墓地とみなす」(設楽2008)のであれば、分散居住した集団による土器の属性に差異は見出せないであろうか。胎土の観察では、いくつかの特徴的な含有物が認められ、なかでも金雲母、骨針がそれぞれに、あるいはともに観察された胎土があり、2B号土壇では6個体中4個体に、1号土壇の1個体、3B号土壇の1個体、16号土壇の2もしくは3個体も含めて北群に多いことは有意な差異である。土器製作のために調達された粘土あるいは混和材の砂粒に地質的な背景が異なることを示しており、居住の分散を反映したことが考えられるのである。

一方、第2次調査区に検出された再葬墓群は、成立期

の再葬墓群を起点として形成されたものではない。むしろ、第1次調査区の再葬墓群の全体を北東群、第2次調査区の再葬墓群を南西群と呼称したように、北・東・南群が北東群として括れるような墓域が大よそではあっても形成された後に、その外縁の南西部に追加されたことが推定される(第58図)。北群の16号土壌と南西群の第45B号土坑からそれぞれ出土した小型精製の壺形を比較すると、磨消縄文による「ヒトデ文」は、上下の縄文帯を垂直に連結する16号よりも、斜めに連結する第45B号が新しい(第86図)。南西群の土坑の分類は、I A類6基(第48B号を含む)、I D類1基、II類2基である。I D類を中核として、これに重複、近接するようにI A類、II類が順次に形成されたことが、一部は切り合い関係から捉えられた。これとよく似た構成が、北群の2A・2B・3A・3B号土坑の配置に窺える。I C類の2B号を中核としてI B類の2A号が重複、I A類の1号が近接、さらにI B類の3B号、II類の3A号が連なるという位置関係である。全体が把握できていない南群をのぞき北・東・南西の3群は、展開期にI D類という多数の土器を埋置した再葬墓を中核としてI A類など単数あるいは少数の土器の再葬墓が形成され、4群ともにII類という土壌墓が構成に加わる。

墓域のほぼ中央に位置する成立期の再葬墓群、成立期の再葬墓を起点として3方向に伸長した展開期の再葬墓群、展開期の途中に墓域の外縁に追加された南西群という3つの段階で小野天神前遺跡の再葬墓群は形成された。また、群構成は、多数を埋置した再葬墓が形成された後、これを中核として単数・少数の再葬墓が重複・近接して形成されることが捉えられた。これには、中核となる再葬墓への「合葬」あるいは「追葬」に等しい思惟を読み取ることもできよう。さらに、土壌墓については、その終焉に出現したことを想定しておきたい。

註1 阿久津久による一連の報告(阿久津1977~1991)には、調査区的地籍は記載されておらず、発掘届という行政文書にも辿り着けなかった。地権者の1人であった四倉一郎が、「発掘調査したのは、ゴボウを作っていない私の畑と、英明さんと、宇野野常重さんの畑」(西倉1995)と話していることから、3筆の地籍が判明した。

註2 調査面積を「320㎡、20×16m」(阿久津1978b)とする記載は、調査を実施したとする「遺跡測量図」(阿久津1978a)斜線部のグリップ面積の総計にはほぼ一致する。

註3 第55図の2(再葬墓の分布図)と3(再葬墓群の全体)を比較すると、4号土壌の北側には図示されていない土坑が見て取れる。おそらくは、縄文時代の土坑と判断されたことにより、分布図には省略されたのであろう。

註4 弥生時代の遺構数については、阿久津1977に「弥生時代の土壌20か所」、報告書である阿久津1978aに記載なし、阿久津1978bに「土壌は22個、そのうち18個が弥生時代のもの」、阿久津1978cに「再葬墓群(土壌16)」、阿久津1979では20基として分析、阿久津1981に「所謂再葬墓とされる土壌が計17基」、阿久津1982に「弥生時代土壌(18基)」など一定していない。

註5 横位の姿勢で検出されても、それは直立が倒れたものとする解釈は、阿久津久の独自のものではない。千葉県天神前遺跡(弥生・大塚1974)では第2号墓域について、「これらの土器はすべて最初は直立していたものであるが、すぐに左から右へ傾倒しとなったもの、中央の第6例土器だけが直立を保っていた」、栃木県出流原遺跡(弥生1981)の第11号墓域について「9個が弓状に並び、そして傾倒し状に傾いて、これら土器はすべて見解に合ったものである。設楽博己(2008)は、阿久津による小野天神前遺跡の調査を、「発掘を通じて遺跡・遺構から問題点を引き出し発展させていった」と評価したが、むしろ既往の見解に縛られていたと捉えている。

註6 設楽博己(2008)は、「土器の中から焼けた人骨が出土している」と記載したが、これが「人骨の可能性のある四肢骨片」を出土した7号土壌を指すならば、引用の誤りである。

註7 川崎純徳等(1980)は、「小玉の検出もあるという」と記述しており、「阿久津氏からは現在、分析の過程にある新知見についてご教示いただいております」という「新知見」であったのかもしれない。なお、小野天神前遺跡の採掘資料では、江幡武雄採集品のなかに滑石製の白玉を確認している。

参考文献

- 阿久津久 1977 『日本のはじまりから農耕まで「大宮町の遺跡」』『大宮町史』大宮町役場 44-74頁、107-184頁
- 阿久津久 1978 a 『茨城県大宮町小野天神前遺跡(弥生)』学術調査報告書1 茨城県歴史館
- 阿久津久 1978 b 『茨城県小野天神前遺跡』『日本考古学年報』29(1979年報) 日本考古学協会 43-45頁
- 阿久津久 1978 c 『小野天神前遺跡』『日本考古学年報』29(1979年報) 日本考古学協会 119-120頁
- 阿久津久 1979 『大宮町小野天神前遺跡の分析』『茨城県歴史館報』6 26-54頁
- 阿久津久 1980 a 『大宮町小野天神前遺跡の分析(2)』『茨城県歴史館報』7 1-20頁
- 阿久津久 1980 b 『考古』『大宮町史 史料集』大宮町役場 25-56頁
- 阿久津久 1981 『特別展 東日本の弥生土器 一初期弥生土器の系譜—』茨城県歴史館
- 阿久津久 1982 『那珂郡大宮町小野天神前遺跡』『茨城県遺跡・古墳発掘調査報告書』Ⅲ(昭和51~55年度) 茨城県教育委員会 7-8頁
- 阿久津久・安田厚子 1988 『茨城県』『東日本の弥生墓跡 一再葬墓と方形溝溝墓—』第9回三県シンポジウム 群馬県考古学研究所 他 240-268頁
- 阿久津久 1991 『小野天神前遺跡』『茨城県史料 考古資料編 弥

- 生時代」茨城県 131-135頁
- 阿久津久 2017「茨城の再葬墓」『泉坂下遺跡国指定・出土遺物国重要文化財指定記念シンポジウム なんだっぺ？泉坂下 一再葬墓研究の最新線—講演等要旨・資料集』常陸大宮市教育委員会 33-48頁
- 飯島義雄・宮崎重雄・外山和夫 1987「所謂「再葬墓」の再検討に向けての予察—特に出土骨類に焦点をあてて—」『群馬県立歴史博物館紀要』第8号 21-50頁
- 石川日出志 1989「再葬墓—研究の課題—」『考古学ジャーナル』302 17-22頁
- 植木雅博 2021「仮称天神前式土器と周辺資料の現状整理」弥生時代研究会 Online 学習会
- 小野天神前遺跡調査者会 1976「調査だより」№1-7 小野天神前遺跡調査者
- 片野晴久・青木 亨 2007「当向遺跡2・青木北原遺跡—北関東自動車道(福和~友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書XV—」茨城県教育財団文化財調査報告第271集 茨城県教育財団
- 川崎純徳・鴨志田篤二 1980『小野天神前遺跡の研究』勝田文化研究会
- 小林青樹 1992「「糞壺」・「壺糞」考」『史学研究集録』第17号 7-16頁
- 設楽博己 2008『弥生再葬墓と社会』塙書房
- 清水 哲 2010『天王堂遺跡—主要地方道日立笠間線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書—』茨城県教育財団文化財調査報告第332集 茨城県教育財団
- 杉原荘介 1981『栃木県出流原における弥生時代の再葬墓群』明治大学文学部研究報告考古学第8冊 明治大学
- 杉原荘介・大塚初重 1974『千葉県天神前における弥生時代中期の墓址』明治大学文学部研究報告考古学第4冊 明治大学
- 鈴木正博 1978「赤浜覺書」『常総台地』9 1-23頁
- 鈴木素行 2011「泉坂下遺跡の研究—人面付土器を伴う弥生時代中期の再葬墓群について—」(私家集)
- 鈴木素行 2022「宿尻遺跡—久懸川・那珂川流域の再葬墓 I—」常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第37集 常陸大宮市教育委員会
- 目黒吉明 1998『福島県指定史跡 烏内遺跡』石川町埋蔵文化財調査報告書第16集 石川町教育委員会
- 四倉一郎・四倉みね(石川町字細田取町) 1995「わたしと小野天神前遺跡」『大宮の考古遺物』大宮町教育委員会 41-42頁

報告書抄録

ふりがな	おのてんじんまえいせき
書名	小野天神前遺跡
副書名	久慈川・那珂川流域の再葬墓
巻次	Ⅱ
シリーズ名	茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第40集
編著者名	鈴木素行, 中林香澄, 田中美零, 金井慎司, 田中義文
編集機関	常陸大宮市教育委員会
所在地	〒319-2292 茨城県常陸大宮市中富町3135番地の6
発行機関	常陸大宮市教育委員会
所在地	〒319-2292 茨城県常陸大宮市中富町3135番地の6
発行年月日	2023(令和5)年7月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おのてんじんまえいせき 小野天神前遺跡	ひたちなかみよしの 常陸大宮市小野字天神前 2842, 2843, 2844番地	08225	大013	36° 32' 15"	140° 22' 00"	20210510 ～ 20210625	286	国史跡泉坂下遺跡の整備 計画及び常陸大宮市史編 さん事業に伴う学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小野天神前遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴状遺構 1基 炉跡 2基 土坑 6基	縄文土器(中～晩期) 土製品(土偶, 耳飾等) 石器(石鏃, 石鏃等) 石製品(石棒等) 動物遺存体(鹿魚骨等) 植物遺存体(炭化種子等)	1976年に茨城県歴史館が実施した発掘調査の範囲外から、新たに弥生時代中期の再葬墓7基(推定の1基を含む)を検出した。そのうち第45B号土壌には、9個体の壺形土器が埋置されていた。再葬墓群全体の構造を把握するために、茨城県歴史館の調査について再検討を行なった。
	墓跡	弥生時代	再葬墓 7基 土坑 3基	弥生土器(中期)	
	不明	不明	土坑 110基		

仕様

【紙質】 本書は長期保存を考慮し、すべて中性紙を使用している。

表紙	マットポスト	153kg
巻頭図版	マットコート	90kg
本扉・序文・例言・目次・本文・抄録・奥付	書籍用紙クリーム	70kg

【印刷】

オフセット印刷

小野天神前遺跡

—久慈川・那珂川流域の再葬墓Ⅱ—

発行日 2023(令和5)年7月31日

編著者 鈴木 素行

編集・発行 常陸大宮市教育委員会

所在地 茨城県常陸大宮市中富町3135番地の6

電話番号 0295-52-1111

印刷 コトブキ印刷株式会社



onotenjinmaa ruins